



公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

ファカルティ・ディベロップメント 報告書 2013

2014 年 3 月

教育学習支援チーム

はじめに

教育学習支援チームは、授業公開と学生による授業評価を行い、それを取りまとめてこの報告書を作ることだけが任務となっていたような側面がありました。しかし、今年度の教育学生支援チームでは、本来のFDとは何を指すべきか？そのためにはどうすればいいのかということについて、随分と前向きな議論ができたと思っています。その結果、授業評価実施要項が策定され、平成26年度から要項に基づいて授業評価を実施することとなりました。第2期中期計画が始まり、学生たちの学力下支えのための補講や、就学サポート体制の整備についても、多くないとはいえ予算も確保され実際の対策も実施できるようになってきています。来年度からは、本学のFD活動を進化させるために、表面的な数値にこだわることなく、その持っている意味をくみ取れるような試みをさらに積み重ねていけると期待しています。

授業評価も授業公開も、すべて一旦制度化されるとどうしても形骸化、マンネリ化が進んでしまいます。実際、私自身の授業評価をみても、ここ数年自由コメント欄の記述が激減しているように思いました。これも一つの学生諸君からのメッセージであると思います。そこで、学生たちがアンケート用紙に記入する前に「学生諸君の評価は後輩の授業に生かされるし、書いてくれたコメントへの教員の答えは大学のホームページにアップされている。教員が君たちのコメントに対しどう考えているかも是非読んでおいてほしい。」と伝えて教室を離れました。それを伝えただけで評価の点数にはそれほど変化はなかったと思いますが、コメントは3割以上が書き込んでくれていました。授業評価一つをとっても、評価する側とされる側に相互のキャッチボールが大切だということを感じさせられました。授業評価や授業公開も、まだまだ本来の目的を達成していけそうです。

福井県立大学は、経済学部、生物資源学部、海洋生物資源学部、看護福祉学部、学術教養センター、キャリアセンターと多様な部局が学生の教育に取り組んでいます。従いまして、教育の内容もその進め方も多様です。本報告書では、各部局でのFD活動の取り組みをこれまでより部局の特性を配慮した形で取りまとめていただきました。大学が大きく変貌することが求められている現在、大学教職員の仕事量も激増しています。そのような中で、ほとんどの大学教員は教育者としての系統的な訓練を受けていないのですから、教育力を高めていくためには、常に自らを振り返り改善し、本学の教育力向上のためのムーブメントを部局の枠を超えて全学的に巻き起こしていかななくてはならないと思います。学生の成長していく姿を目の当たりにするのは、何物にも代えがたい喜びであると思います。その一助となるように、この報告書を活用していただければと思います。また、最後になりましたが、本報告書を取りまとめるにあたってご尽力いただいたチームリーダーの新宮 晋先生はじめ各部局のチーム員および事務局の方々の多大な努力に深謝します。

2014年3月

教育学習支援チーム代表 青海忠久

目 次

はじめに	i
1. 活動概要	1
1.1 委員の構成	1
1.2 会議録	1
1.3 FD 事業経費	15
1.4 事業の実施状況	15
1.4.1 授業評価	15
1.4.2 授業公開	26
1.4.3 FD 研修	26
2. 各部局の FD 活動	27
2.1 経済学部	27
2.1.1 授業評価について	27
2.1.2 授業公開の方針と実績	27
2.1.3 部局での FD 研修	31
2.1.4 授業改善についての課題と展望	32
2.2 生物資源学部	33
2.2.1 授業評価について	33
2.2.2 授業公開の方針と実績	33
2.2.3 授業改善への取り組み	34
2.2.4 授業改善についての課題と展望	41
2.3 海洋生物資源学部	46
2.3.1 授業評価について	46
2.3.2 授業公開の方針と実績	48
2.3.3 部局での FD 研修	50
2.3.4 授業改善についての課題と展望	50
2.4 看護福祉学部	51
2.4.1 授業評価	51
2.4.2 授業公開	52
2.4.3 授業改善への取り組み	53
2.4.4 FD 研修	54
2.5 学術教養センター	60
2.5.1 授業評価について	60
2.5.2 授業公開の方針と実績	60
2.5.3 部局での FD 研修	61
2.5.4 授業改善についての課題と展望	63
3 点検と課題	70
3.1 授業評価	70
3.2 授業公開	71
3.3 研修その他	72

1. 活動概要

1.1 委員の構成

チームの規定（規定第 12 号）により教育担当理事をチーム長とし、メンバーを理事が選考する。2013 年度のメンバーは、以下の 12 名の教員と 5 名の職員である。

2013 年度チーム委員名簿

氏 名	所 属	職	役 割
青 海 忠 久	理事（教育担当）	副 学 長	チーム長
福 山 龍	経済学部	教 授	委 員
新 宮 晋	経済学部	准 教 授	チームリーダー
松 岡 由 浩	生物資源学部	准 教 授	委 員
伊 藤 貴 文	生物資源学部	講 師	委 員
富 永 修	海洋生物資源学部	教 授	委 員
松 川 雅 仁	海洋生物資源学部	准 教 授	委 員
塚 本 利 幸	看護福祉学部	准 教 授	委 員
平 井 一 芳	看護福祉学部	講 師	委 員
木 村 小 夜	学術教養センター	教 授	委 員
山 川 修	学術教養センター	教 授	委 員
亀 田 勝 見	学術教養センター	准 教 授	委 員
白 崎 雅 義	教育・学生支援部	部 長	事務局
山 崎 英 雄	教育推進課	課長代理	事務局
大 野 史 博	情報ネットワーク管理室	室長代理	事務局
遊 津 安 司	企画サービス室（小浜 C）	主 任	事務局（小浜 C）
村 崎 明 子	教育推進課	主 任	事務局（福井 C）

1.2 会議録

■ 第1回会議録

日時 平成25年5月29日（水）13:00～13:50

場所 福井キャンパス管理棟特別会議室、小浜キャンパスTV会議室

出席 青海、福山、新宮、松岡、伊藤、富永、平井、木村、山川、亀田
事務局（白崎、山崎、遊津、村崎）

欠席 松川、塚本、事務局（大野）

1. チームリーダーについて

チーム員による自己紹介の後、青海副学長より、今年度から2年間、経済学部の新宮准教授にチームリーダーをお願いしたいとの意向が示され、承認された。

2. FD事業について

資料に基づき事務局より、2012年度の授業公開、学内・学外研修、授業評価の実施結果について報告された。

【授業公開について】

新宮チームリーダーより、授業公開について、参観数がない状況が続くのであれば、実施方法を考え直したほうがいいのかとの意見が述べられた。効果がないのであれば、やめることも考えられるが、効果があるのであれば、参観数を増やすことを考える必要があるのではないかとの提案がなされた。

出席者より、下記のような意見が出された。

- ・ 授業公開は、どのように自分の授業に生かせばいいのか、直ちに結びつきにくい面がある。
- ・ 昨年度は、演習の最後に地域のイベントで出店を行い、授業公開という形を取ったが、それまでは、通常の講義を公開していたため形が異なる。(海洋生物資源学部)
- ・ 随時公開となると、授業終了後、ディスカッションを行う時間が取れないのではないか。→随時公開とはしているが、事前に申し込んでいただくことにしているため、ディスカッションを行う時間は確保できる。(学術教養センター、生物資源学部)
- ・ 複数の教員で担当する授業について、公開という形はとっていないが、教員が集まり、授業について議論を行うことがあり、参考になっている。
- ・ すでに制度化されたものだけを報告書に記載して形骸化するのではなく、授業改善につながるもののできる限り取り上げたほうがよい。
- ・ すでに手一杯でやっている中、新しいことを始めるのであれば、スクラップアンドビルドを行っていただきたい。

上記の意見等をふまえ、青海副学長より、今後の授業公開の方法については、各部局で議論していただきたいとの依頼がされた。

【授業評価について】

青海副学長より、授業評価アンケートに対して教員がコメントを返していることを知らない学生が多いとの説明がされた。そのため、学生が、適当に回答することもあるのではないかとの意見が述べられた。これに対して、新宮チームリーダーより、アンケートの自由記述欄に、「書かれたコメントに対しては、教員がウェブ上で回答する」という内容を記載しておいたほうがよいのではないかとの提案がされた。

出席者より、下記のような意見が出された。

- ・ 昨年度の会議でも意見が出ていたが、教員がコメントを返す頃には、授業が終了しており、学生は興味を失っている。そのため、アンケート用紙に記入しても、直接的な効果にはつながらないと思う。
→次年度の同授業をとる学生の役には立つ。
→次年度当初にそのようなアナウンスをするのであれば意味はあるが、その授業を受けた学生がコメントを見るということは、あまり意味がない。
- ・ コメントを記入する時間を半ば強制的につくれば、もう少しコメントが増えるかもしれない。
- ・ いつもはLMSでコメントを出させているが、過去にアンケート用紙で提出させた時は、コメントが激減した。学生は、タイプするほうが書きやすいのかもしれない。LMSでは、有意義なコメントが見られる。
- ・ 毎年、学生は異なるので、意味があるとは思わない。授業期間の途中で、個人的に学生に講義の進め方等について意見を聞くようにしている。
- ・ 授業評価が制度として始まるまでは、制度とは別に個人的に意見を聞いていたが、現在の制度では、学生が数値をマーキングして終わってしまい、コメントは書かなくてもいいという気分になるのかもしれない。
- ・ 個人的に行ったことであっても、授業改善につながるものは公開できるとよいのではないか。
- ・ 業務実績報告の中で報告しており、大学のホームページでも見ることができる。報告していない教員は

いないはずである。制度が始まってからは、授業の半期時点ぐらいで個人的にアンケートを行っており、これをしなければ学生の本音が聞けない。

- ・ コメントを書かない学生はいるが、数値の経年変化は参考になる。他の授業と比べることは、あまり意味がないと思うが、自分の授業の中では役に立っている。
- ・ 授業評価が形骸化した頃から教員同士の懇談会を活発に行うようになったが、懇談会の方が、はるかに意味がある。制度外でどのように授業改善活動を行っているかということをこの会議で上手に吸い上げていければと思う。

上記の意見等をふまえ、青海副学長より、あまり教員の負担になってはならないと思うが、できる範囲で進めていきたいと思うとの考えが述べられた。

【2013年度FD実施事業予算について】

資料に基づき事務局から、2013年度FD実施事業予算について説明された。昨年度と比べ、5%のシーリングがかかったことがあわせて報告された。FD研修等を企画する学部学科は、旅費等についてFD予算から執行するので、事前に事務局まで相談していただきたい旨、依頼がされた。

新宮チームリーダーより、昨年度の研修は、どのように企画が上がってきたのかとの質問に対し、事務局より、各学部学科から上がってきたものであり、昨年度は、チーム会議やフレックス等を通じて説明いただいたとの報告がされた。青海副学長より、各学部学科から企画が持ち上がったときに、優先順位をつけるということはなかったのかという質問に対して、事務局より、昨年度はそのようなことはなかったので、FD研修については、活発に行っていたらと思うが、長期研修になると費用も多くかかるため、研修については、事前に事務局まで相談してほしいとの説明がされた。新宮チームリーダーより、研修の企画が上がってくるかどうか心配なため、予算措置の可能性も含めてアナウンスしたほうが、アイデアも出てくるのではないかと意見が述べられた。

3. その他

- ・ 山川教授より、すでにフレックスで周知してあるが、8月26日～8月28日にティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを行う。定員が12名まで拡大できるので、参加していただきたいとの依頼がされた。また、今年度のフレックス合宿研修会は、9月9、10日に福井高専で開催される予定であり、高等教育の授業設計の一人者である熊本大学の鈴木先生をお招きできることになったとの報告がされた。
- ・ 青海副学長より、修学上、問題のある学生が数名おり、学術教養センターの清水教授を中心に、様々な対応の仕方を相談していることが報告された。また、交流センターの一部屋を借り、水曜日午後、そのような学生が集まれるサロンのような場所をつくったとの報告がされた。なかなか授業に出てこない学生がいる場合などは、このような場所を使ってほしいとのアナウンスがされた。

【次回チーム会議開催予定】

第2回会議は、10月に開催予定。

前期の授業評価結果が出た時期に開催しているが、協議案件等あれば、会議を招集するとの説明がされた。

■ 第2回会議録

日時 平成25年10月21日(月) 13:00～14:40

場所 福井キャンパス管理棟特別会議室、小浜キャンパスTV会議室

出席 青海、新宮、松岡、伊藤、富永、塚本、平井、山川
事務局（白崎、山崎、遊津、村崎）
欠席 福山、松川、木村、亀田、事務局（大野）

1. 前期授業評価結果について

事務局より、資料に基づき、前期授業評価結果について説明がされ、以下の意見等が出された。

- ・ 調査票の回収状況について、経済学部回収率が低い。
- ・ 重要項目の経年特性というデータを示す場合は、同時に学年等の詳しい解析を行うべきである。
→報告書作成をする際に、必要な解析を行っていただければよいと思う。
- ・ 重要項目の数値が評価委員会に取り上げられるのだから、統計的に意味があるのかということも含めて、今後検討していくべきである。

2. F レックス合宿研修会報告について

山川教授より、資料に基づき、F レックス第4回合宿研修会について以下のとおり説明がされた。

- ・ 初日の講師の熊本大学・鈴木克明先生は、授業デザインの世界では第一人者であり、講演、ワークショップともに非常にわかりやすくおもしろいものであった。
- ・ 講演内容はすべてビデオに撮ってあるので、関心ある方は、お知らせいただきたい。
- ・ 二日目は、企業の方にお越しいただき、事例発表およびパネルディスカッションを行った。本学からは、4名の教員が出席した。

参加した新宮チームリーダーから、「授業改善に一番いいのは、研修ではないかと思う。研修は非常に刺激になるため、F レックス合宿研修会のミニチュア版のようなものができればよいと思う。」との意見が出された。

青海副学長より、「FD については、授業評価や授業公開だけでなく、このような研修も行っていくことも考えていかなければならない。」との考えが述べられた。

3. 年度計画における FD 活動について

事務局より、資料に基づき、年度計画における FD 活動について、「教育企画推進委員会において、学生による授業評価の結果について、部局長が把握する体制の整備については、要項等を作成し、その中に実施結果を目的以外に使用しない旨の但書きをつけて実施できないか検討することとなったため現在、実施している内容を盛り込んだ要項案が示されたが、内容について教育学習支援チーム会議で議論するよう依頼がされた。」との説明がされた。

青海副学長より、以下の説明がされた。

- ・ 年度計画には、学生による授業評価の結果について部局長が把握する体制を整備することが掲げられており、教育企画推進委員会で当初は、部局長が無条件で結果を見ることができる案が審議されたが、授業評価結果が教員評価（教員の処遇）につかわれるのではないかと懸念から、「部局長は、評価結果について報告を教員に求めることができる」との修正案が出された。しかし、そのような方法では、部局長が全体像を知ることなく、予断に基づいて一部の教員に報告を求めるということになる。また、評価結果を知るのが部局長のみになることも問題がある。そこで、新たな提案であるが、本チーム会議の委員と部局長が把握したうえで、授業改善を進めるために評価結果について議論する場を設定し、最終的には全教員が把握できるようにするというのを考えてはいいのではないかと思うが、どうであるか。

出席者より、以下のような意見が出された。

- ・ 個人的には、全部公開してもよいと思う。結果をお互いに見ることにより、授業をよりよくしていくことはあると思う。しかし、教員評価に使われることには歯止めをかけなければならない。
- ・ 授業改善のためにやっていることを教員評価に使われることがよくないことは、誰もが認識しているはずである。もし使われるのであれば、授業評価の点数を上げるために学生に媚びることなどが懸念される。しかし、教員相互で授業改善に使われるのであれば、問題はないと思われる。
- ・ 「部局長は、評価結果について報告を教員に求めることができる」とすると、部局長の手足を縛って実際には何もできないようにしてしまう。部局長のほか、より多くの教員で評価結果について議論することはよいと思う。
- ・ 議論するのであれば、同一科目の結果の推移も公開していく必要があるのではないかな。
- ・ 教員評価につながる可能性があるのであれば、今は決めることができないのではないかな。
- 教員評価につながる懸念があるのであれば、逆に、結果を目的以外には使用しないことをこの場または教育企画推進委員会で決めたうえで、授業改善に積極的に取り組んでいく方がよいのではないかな。教育企画推進委員会で、授業評価結果は教員評価には使用しないという方針をきちんと決めるべきである。
- ・ 結果の公開について、教員の承諾が必要となった理由はあるのか。
 - 授業評価は、自己研鑽の手段であるため、結果を公開するかどうかは、教員の判断によるという理由だったような気がする。授業評価を先進的に行っている大学の事例を取り入れたということもあるかもしれない。
- ・ 全教員に公開することになると、どのような効果があるのか。
 - まず、全教員が知ったうえで部局長が改善を考えることもできるようになることと、学生にフィードバックできることになる。
 - さらに、相互に見ることで、教員レベルの意識が変わる可能性がある。
- ・ 全部公開にすることはよいが、公開後、部局長等が結果について解析するに当たり、例えば評点の低いものをピックアップして議論するというようなことを盛り込んでおいたほうがよいのではないかな。公開するだけではなく、改善策をチームで提案していくことも必要かと思う。
 - 結果の取扱いについてどうするかは、部局が決めてはどうか。現実には、数字が低い場合には理由があることもあるため、そのような細かなことについて要項に盛り込めるか疑問である。また、業務実績報告書でも授業改善については報告している。

青海副学長より、「部局ごとの事情も異なるため、結果の解析や改善のための議論に当たっては、部局から選出されているチーム員にも参加していただくことにより、オープンな状況になると思う。」との考えが述べられたのに対し、出席者より、以下の意見が出された。

- ・ チーム員は、現実には部局で選出されるが、規程上は、副学長指名となっているため、部局から選出されたというように修正するべきである。
- ・ 情報や学生のコメントを分析して適切にアドバイスできる人を選出しなければ、授業改善につながらない。経験が浅い教員は、適さない。
- ・ 教員自身が困っている状況がなければ難しいと思うが、これまで結果について議論する場がなかったので、まずは、場をつくる必要があるのではないかな。

青海副学長より、「学生による授業評価結果を教員全員に公開することを本チームから教育企画推進委員

会に返すということによいか。」との意見に対し、新宮チームリーダーより、「学生による授業評価結果は、教員評価（教員の処遇）には使用しないことを前提とする必要がある。教員評価について、チームおよび教育企画推進委員会には決定権がないため、もし、学生による授業評価結果が教員評価（教員の処遇）に利用されることがあるならば、そのときは授業評価のあり方全体を考え直す。」との意見が出され、チームの中で了承された。

4. 第1中期目標期間および平成24年度業務実績評価への対応について

事務局より、資料に基づき、第1中期目標期間および平成24年度業務実績評価への対応について、「県評価委員会からの意見では、特に、公開した授業に参加する教員が少ないことが指摘されているので（平成24年度、教員が参加したのは3講義に19人）、今年度の授業公開の状況を検討いただきたい。」との説明がされた。

青海副学長より、「授業公開の参加者数については、FD 報告書に記載されている数字をとらえて指摘されているが、生物資源学部や学術教養センターが、全授業を公開することに意味があるとしていることと、公開している授業の結果を同時に報告書に記載している点について見直すべきかとも思う。しかし、授業公開を前に進めるには、もう少し考える必要がある。」との考えが述べられたのに対し、新宮チームリーダーより、「ある大学では、授業公開週間を設けて、その間に必ず一度は参加するというような取り組みを行っている。」との説明がされた。

出席者より、以下の意見が出された。

- ・ 授業改善というより、学生からのクレームがあった場合に授業をチェックするという意味で全部公開とした経緯がある。
このような場合、公開授業への参加者数が少ないということは、授業に大きな問題がないということである。
- ・ 授業公開にあまり効果がないということであれば、研修に力を入れるなど方向性を変えていく必要がある。
- ・ チェックのためにアドバイスする教員が授業公開に参加するのか、自分の授業改善のために参加するのかで、授業公開の意味合いが異なる。
- ・ 授業公開の後、意見交換の場を設けているが、講義の内容についてではなく、授業の進め方等について議論している。

青海副学長より、「評価委員会の意見に対する対応について、この場ですぐに決めることはできない。授業公開のほか、授業評価、研修など教育の質を改善していくことについて部局で提案いただき、できれば年内にもう一度チーム会議を開いて議論したいと思う。」との依頼がされた。

5. 学生意識調査アンケートについて

山川教授より、資料に基づき、学生意識調査アンケートについて以下のとおり説明がされた。

- ・ 毎年行っているアンケートであり、2年前まではLMSでアンケートを実施していたが、回答数が少なかったため、昨年度よりアンケート用紙で調査している。1年生は情報の必修科目において実施するが、2年生以上については、チーム員にアンケート用紙の配布をお願いする。なお、昨年度は、看護福祉学部は無記名式、その他の学部は記名式で行ったため、用紙が異なっている。
- ・ 回答期限は11月末となっているので、期限までに事務局まで提出していただきたい。

6. その他

(1) 後期授業評価について

事務局より、後期授業評価については、平成26年1月9日（木）から1月22日（水）に実施予定であるとの説明がされた。なお、前期授業評価のコメント等については、10月末までに提出いただくようお願いしているので、チーム員の先生方にも御協力いただきたいとの依頼がされた。

また、障害学生修学支援グループにおいて、富山大学の教員を招いて研修会を開催する予定であるので、FD予算において講師謝礼等を支出することについて、あわせて報告された。

(2) その他

山川教授より、資料に基づき、「第3回 Fレックス ティーチング・ポートフォリオ」について、3月6日～8日（一般選抜入試前期日程と後期日程の間）に福井大学で開催されるので、参加および周知いただきたいとの依頼がされた。

青海副学長より、「8月に行われた第2回ティーチング・ポートフォリオに参加したが、毎日慌しく過ごす中で、自分の教育について振り返ることは大変よい機会であった。他の教員の方にもぜひ参加していただきたい。」との感想が述べられた。

7. 次回チーム会議開催予定

青海副学長より、「次回の会議は、できれば年内に開催し、本日の課題について議論したい。また、報告書の作成についても考えていく必要があるので、忙しい中ではあるが、よろしくお願いします。」との依頼がされた。

■ 第3回会議録

日時 平成25年12月25日（水）10:40～11:50

場所 福井キャンパス管理棟特別会議室、小浜キャンパスTV会議室

出席 青海、新宮、松岡、伊藤、富永、塚本、平井、木村、山川、亀田

事務局（白崎、山崎、遊津、村崎）

欠席 福山、松川、事務局（大野）

1. 年度計画におけるFD活動について

(1) 授業評価実施要項（案）について

事務局より、資料に基づき、授業評価実施要項案について以下のとおり説明がされた。

- ・ 教育企画推進委員会より授業評価実施要項案について議論するよう依頼があったため、教育学習支援チーム会議にて議論した結果、最終的に教育企画推進委員会において要項案が決定した。
- ・ 教育学習支援チーム会議から提案した要項案よりさらに修正された点は、対象授業から除外する授業科目のうち「通年科目における」の部分が削除された点および授業評価結果の取扱いについて、「必要に応じて話し合いの場を設ける」と修正された点である。この「必要に応じて」とは、当該授業の授業改善が必要な場合だけでなく、新しい取組みを他の教員に紹介していく場合などさまざまな意味を持つことが確認された。
- ・ 教育企画推進委員会では、毎回の評価結果だけでなく経年変化を分析すること、現状の授業評価アンケートは無記名であるが、回答者（学生）に責任を持って回答させることを促すため記名式を検討すること、評価結果の公開の対象を非常勤講師にまで拡大することが今後の検討課題とされた。

- ・平成26年度から授業評価実施要項に基づき実施する。

出席者より、以下の意見等が出された。

- ・LMSは、一般的な名称であるのか。
→ラーニング・マネジメント・システムの略称で、「授業支援システム」のことである。大学の教育分野では一般的な名称である。
- ・アンケートを記名式にするのであれば、教員にアンケート結果を返すときに、記名部分を隠す必要がある。また、記名式にするとバイアスがかかり、学生は正直な感想を書くことができないだろう。
- ・アンケートを記入させる時には、教員が退席するなどの配慮を行っているのだから、記名式にすることは無意味ではないか。一方で、無責任な回答をさせないために何らかの条件を考える必要がある。
- ・経年変化の分析については、やり始めたらよいのではないか。よろしければ手伝う。

青海副学長より、「アンケートを記名式にするかどうかということは、これまでも繰り返し議論されてきており、運用も含めて今後検討する必要があるため、ここで結論づけることはできない。」との考えが述べられた。

(2) 評価結果の取扱いについて

事務局より、「授業評価実施要項において、評価結果について話し合いをする場が設けられることになった。必要に応じてとなっているが、今後、チームあるいは部局で授業改善のために方策を検討していただきたい。」との依頼がされた。

青海副学長より、「授業評価実施要項が策定され下地が整ったのではないかと思います。部局により事情が異なることもあることから、今後、どのようにしていくか部局でよく検討していただき、チームでも議論していきたいと思う。」との考えが述べられた。

2. 第1期中期目標期間および平成24年度業務実績評価への対応について

今後の授業改善について

青海副学長より、部局で授業改善のための方策を検討したことについて、報告いただくよう依頼がされた。

○ 経済学部

次期中期目標に向けて、真に授業改善につながることをしようということになった。数値目標などは、現場の感覚に合っていないと思われるため、部局の方から提案していく体制をつくる。個人評価ではなく、部局としてのパフォーマンスを上げるため、教員間の情報交換をもっと密に行う。そのためには、懇談会などを頻繁に行う。

授業公開については、講義科目には専門性と授業の工夫に一体性があるので、参観しても直ちに参考にできるわけではない。むしろ、演習科目の方がおもしろい取組みを行っている教員の話聞くことができ役に立つのではないか。教育歴のない新任教員には、授業参観を積極的に促し、ベテランの教員には独善的になっていないかどうかチェックするためにも、授業参観よりも研修の方がより効果的ではないか。経済教育学会には、事前に申し込めば、他大学の授業を参観できるシステムがある。学内で自分の専門分野と全く違う授業を参観するよりも、これを利用して自分の専門分野に合った授業を参観することも効果的ではないか。

○ 生物資源学部

授業公開については、学生から授業に問題があるという話は聞かない。参観数が少ないのは、ある意味、よい現状を反映しているためであり、参観者数を増やそうとする考えは、必要ないのではないかと。授業改善のために行っていることを教員間で情報共有し、JABEE プログラムと連携し、取り組んでいきたい。

○ 海洋生物資源学部

11月に授業公開を行い、教員24名のうち15名が参加した。参観することにより、自分の講義を客観的に考えることができる。授業公開時には、60分授業を行い、残り30分間は意見交換を行い、意義あるものだった。頻度について、年1回では出席できない教員もいるため、継続性も踏まえつつ半期に一度程度実施したいと考えている。授業公開と授業評価の関わりを考え、授業評価の数値が高い教員または低い教員の授業を公開することで理由が見えてくるかもしれない。

フレックスでFD研修を行っているが、学部内ではあまり周知できていない。FD研修に参加した教員に簡単な報告会を行っていただき、できるだけ参加を促す努力が必要と考える。

授業については、学内の公開だけでなく、例えば高校の教員に授業参観していただくことや、逆に高校の授業を参観させていただき、大学の講義にどのように活かしていけるか考えることも必要ではないかと。また、最近では授業コンサルティングという制度を実施している大学もあり、大学全体で取り組むことにより、個別に相談できるとよいのではないかと。

JABEE の取組みの中で、財界人などを招いて、社会が教員や大学に対してどのような要望を持つかというセミナーを開く計画がある。大学全体で取り組めるかどうかは分からないが、このようなことも必要ではないかと。

○ 看護福祉学部

今年度も授業公開を行った科目は約10科目あったが、いずれも参観者はいなかった。看護学科は、オムニバス講義や実習があり、教員が交互に授業について検討する機会が多く、授業公開という形だけではなく、授業改善に向けて取り組んでいる。社会福祉学科についても同様であり、実習連絡会議などで情報交換している。本日もこれからFD懇談会を実施する。

青海副学長より、「実習における情報交換やFD懇談会などは、記録として残していただきたい。」との依頼がされた。

○ 学術教養センター

授業公開は随時行っているが、参観者がいないことが問題であったが、公開を随時行う仕組みは維持しておいた方がよい。ただし、授業公開のみで授業改善を行うことを考えることはおかしい。授業公開は、元々、自分たちの授業を改善するという意味合いもあったが、何か問題があればその授業を見に行くという意味合いもあった。また、ゼミで課題を感じても、学術教養センターの場合は、同じ時間帯に一斉にゼミを行っており、参観できないという問題もある。そのため、懇談会を行って意見を交換するのがよいのではないかと。

生物資源学部が行っているように、教員が授業改善のために取り組んでいることをまとめたいと思う。授業改善のため、GPA を取り入れることも必要ではないかと。GPA の導入には、あわせてCAP 制の導入も検討される。成績がよくない学生には、CAP 制を取り入れ、履修制限を行うことで一つの授業に時間をかけて取り組ませるという趣旨である。

青海副学長より、「GPA を導入する場合、学生の世話をするスタッフが必要か。それとも、学生に任せておけばよいのか。」との質問が出されたのに対し、出席者より「担任教員がいるのではないかと。GPA を算定すること自体は、スタッフがいなくとも、すぐにできる。算定したGPA を担任教員がどのように扱うかで

ある。」との意見が出された。

新宮チームリーダーより、「3日間もかかるような研修もよいが、ダイジェスト版のような研修を行ってはどうか。2時間程度の研修であっても、授業改善への動機付けとすることができればよいのではないか。フレックスなどの大学連携もよいが、まずは学内で研修を行い、授業改善のヒントをつかむことができればよいと思う。他大学の事例を見ていても、長丁場の研修は長続きしていないようである。授業の合間にコンパクトな研修に参加できる仕組みづくりが必要ではないか。」との意見が出された。

青海副学長より、「全学で行う研修と個別に行う研修とをうまくかみ合わせて行っていきたい。」との考えが述べられた。

山川教授より、「予算があるのであれば、講師に依頼することは可能である。今、考えている講師は、3月6～8日に福井大学で研修を行うので、5日であれば、本学でも講演していただけるかもしれない。」との説明がされた。

事務局より、「予算執行は可能である。3月上旬は一般選抜の前期日程と後期日程の間であり、実施は可能と思われるが、今後、日程調整を行いたい。」との説明がされた。

3. FD報告書2013について

新宮チームリーダーより、「報告書には、部局ごとに、現状に対する課題と展望を記載していただきたい。部局ごとの取組みを踏まえたうえで、チーム会議で取り上げていけることを今後振り分けていってはどうか。経済学部でも、教員は授業改善に関して相当の取組みを行っているが、情報発信が弱すぎて表に出ない状況であるため、ぜひ全学で取組みを共有していただきたい。特に、授業公開については、部局ごとにどのようなポリシーで行っているかを記載していただきたい。授業公開を行っていても参観者数が少ない現状は、授業改善に役立っているとは思えないため、再度、検討していただきたい。」との依頼がされた。

出席者より、以下のような意見等が出された。

- ・ 授業公開がスタートした時は、どのような位置づけで行うかという共通認識があったのか。
 - 授業改善のための情報交換や研鑽の意味合いがあった。授業公開を行った後で、意見交換を行うという流れであった。
 - 生物資源学部や学術教養センターが行っている全部公開という形は、少し意味合いが異なるのかもしれない。
- ・ 授業公開には、授業改善のための意味合いと問題のある教員がいた場合の懲罰的な意味合いの二つがあると聞いていたが、どうなのか。
 - なぜ、懲罰的な意味合いが出てきたのかわからないが、そのような意味合いをポジティブにとらえるつもりは全くない。

スケジュールについて事務局より、「昨年度は取り掛かりが遅れたが、3月初めにはチームリーダーより報告書作成依頼がされていた。報告書のあり方を大きく変えるのであれば、前倒しで行う必要がある。」との説明がされた。

青海副学長より、「報告書作成にあたって、スケジュールや構成等を新宮チームリーダーおよび事務局と打ち合わせを行い、あらためてチーム員にアナウンスするので、よろしくお願いします。」との依頼がされた。

4. その他

(1) 授業評価中間アンケートについて

海洋生物資源学部より、「授業評価アンケートは授業の最後に行うが、中間時にも行うことができないか

という意見もある。中間時にアンケートを行うことによって、学生にフィードバックできる。」との説明がされた。これについて、新宮チームリーダーより、「経済学部でも同様の意見が出された。また、アンケートを一斉に行うことによって学生の意見がおざなりで自由記述意見があったとしても役に立たない。制度に基づき型どおりにアンケートを行うことよりも、授業の合間に自主的に行うアンケートの方が学生がきちんと対応している感がある。」との報告がされた。

事務局より、中間時にアンケートを行うとは、現行のアンケートを2回行うのではなく、教員が個別に行うものであることが確認された。

山川教授より、授業毎に学生のコメントを取れるソフトがあるので、今後、Fレックスを通じて紹介するとの説明がされた。

(2) 後期授業評価の実施について

事務局より、「後期の実施期間は1月9日（木）から1月22日（水）のため、アンケート用紙を年末年始にかけて教員に送付する。」との説明がされた。

(3) 平成26年度Fレックス合宿研修会について

新宮チームリーダーより、「平成26年度のFレックス合宿研修会は、本学が当番校であり、現在、FレックスのFDチームで企画を立てているところである。1泊2日の合宿研修であり、2日目について、ここ2年間は、キャリア教育をメインに行っていたが、学生が何を期待しているか各大学の学生に話をしてもらうような企画を考えている。」との説明がされた。

また、山川教授より、Fレックスのティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップが福井大学で3月6～8日に開催されるので、関心がある方は参加していただきたいとの依頼がされた。

5. 次回チーム会議開催予定

次回チーム会議は、3月中旬～下旬に開催予定

■ 第4回会議録

日時 平成26年3月20日（木）14:40～15:40

場所 福井キャンパス管理棟大会議室、小浜キャンパス会議室

出席 青海、新宮、福山、松岡、伊藤、宮台（代理）、塚本、平井、木村、山川、亀田
事務局（山崎、村崎）

欠席 富永、松川、事務局（白崎、大野、遊津）

1. 2013年度FD事業報告について

(1) 後期授業評価結果について

事務局より、資料に基づき、後期授業評価結果について説明がされた。

青海副学長より、海洋生物資源学部の評価結果が上昇したことについてコメントを求めたところ、海洋生物資源学部より以下のとおり報告がされた。

昨年度の後期授業評価において「内容理解」の評価を下げる要因となっていた科目の名称を変更するとともに、この科目を複数の教員が担当して、より理解を進めるようにするなど授業改善を試みた。また、今年度は、この科目と関連する数学が苦手な学生に対して補充教育を行った。この授業は複数教員

で実施したために授業評価の対象とはしなかったが、同様の項目で別途評価を行ったところ昨年度より改善されていることが読み取れた。補充教育を行うことにより、基礎学力のベースを上げることはできたが、さらに上げていく必要があるので、今後も授業改善のため引き続き努力していく。

(2) 各部局のFD活動について（「FD報告書2013」の作成について）

青海副学長より、今年度の各部局のFD活動について、現在作成中であるFD報告書の内容とあわせて報告いただくよう説明がされた。

<経済学部>

授業評価の結果について、今後、精密に結果を分析していきたい。また、学部内に教員間の交流を深めていこうという機運が出ているので、今後、懇談会等を活発に行い授業改善につなげていきたい。

<生物資源学部>

報告書作成にあたり、教員にアンケート調査を二つ行った。一つは、教員が授業に関してどのような工夫を行っているかについて調査した。調査結果は、報告書に記載したが、教員がどのような工夫を行っているか情報共有してお互いに役立ててもらおうという趣旨がある。もう一つは、本学のFD活動の現状についてどう考えているかについての調査である。様々な回答が寄せられたが、現在のFD活動は、教員の授業改善を支援するという形になっていないのではないかという意見があった。

青海副学長より、「授業改善について、今後どのようにしたらよいかという提案はなかったか。」との質問に対し、「アンケートでは見られなかったが、このチームで授業改善について考えていくものではないかと思う。」との説明がされた。

<海洋生物資源学部>

授業参観に関しては、これまで参加者数が少なかったが、今年度は半数以上の教員が出席するなど、授業改善に対する意識が高くなった。JABEEの取組みの中ではあるが、アンケート調査を行った結果、授業改善についてコメントしたものもあり、非常に参考になった。このアンケートは、記名式で行ったが、FDのアンケートより率直な意見が多かったように思う。

また、授業改善に関して、教員個人が構築していくことが非効率であるため、FDの専門家を招いて研究会を開催したいと考えている。それから、若狭高校とSSHの連携を図っているが、高校の教員は授業のプロであり、授業について非常に工夫を行っているため、今後、大学に来ていただき、アドバイスをもらうというようなことも考えている。

<看護福祉学部>

報告書では、授業評価について学科ごとに経年変化を分析している。

看護学科では、学生の看護実践能力向上に向けた教員有志の学習会を年間通じて開催した。社会福祉学科においても、実習連絡会を設けることや懇談会を開催するなど、教員間で密に連絡を取り合っている。また、資格系の学部であるので、指定科目変更に伴うカリキュラム改正などについては、教員間で活発に議論を行っている。授業の進め方についても様々な機関のセミナーに参加するなどして、日頃から情報を集めている。

<学術教養センター>

授業評価および授業公開については、今年度は大きな変化が見られず、報告書では現状を報告することとする。

授業について工夫したこと等を教員毎に報告書に記載することとした。

新宮チームリーダーより、「報告書の内容が、来年度以降のFD活動の方針、たたき台になればよい

と思う。また、生物資源学部や学術教養センターの報告にあったように、各教員の取組みを報告することも、関心が高くなりよいのではないかと。「部局内でもよいので、まずは教員間の交流が進むことが授業改善につながると思う。」「授業評価アンケートを行う際に、学生に一言『この評価は、次年度の授業に活かされる。』と言っていただくだけで、学生はもっと真剣に記入してくれるのではないかと。アンケートが形式的にならないよう、教員がもう少しきめ細やかに取り組むことで結果が変わってくるのではないかと。」との考えが述べられた。

海洋生物資源学部より、「今年度から、海洋生物資源学部のシラバスには、授業評価の結果と今後の取組みについて記載することとし、教員が授業改善に取り組む姿勢を見せることとした。」との報告がされた。

青海副学長より、「制度が形骸化しないようにしたい。教員から学生にメッセージを送ることも大事である。」「FD研修について、先日、ティーチング・ポートフォリオのミニワークを行った。約30名が出席し、少しでもFDについて認識が深まることが第一歩だと思うので、今後も進めていきたい。」との考えが述べられた。

(3) 決算報告について

事務局より、資料に基づき、決算報告について説明がされた。今年度は、チームに属する障害学生修学支援グループで研修会を行ったため、講師報酬等の支出がなされたことが説明された。また、決算額については、昨年度とほぼ同額であることが報告された。

2. 学生意識調査アンケート結果について

山川教授より、資料に基づき、学生意識調査アンケート結果について報告がされた。1,000名を超える学生から回答があり、回収率約67%であったことが報告された。資料は中間分析であり、因子数が変わる可能性もあることが説明された。また、結果については、4月中には学生にフィードバックできるが、看護福祉学部の学生は無記名でアンケート調査を実施しているので、全体結果は示せるが、学生個人にはフィードバックできないことが説明された。

新宮チームリーダーより、「アンケート結果について、最終的な結果が出る時期にもよるが、今後、FD報告書に記載することは可能か。」との質問が出されたのに対し、山川教授より、「他大学の結果は出せないが、本学の結果については、大学の了解があれば可能である。」との説明がされた。

青海副学長より、「調査結果をできるだけ大学で共有できればと思うので、今後、検討したい。」との考えが述べられた。

3. その他

(1) 平成26年度授業評価の実施について

事務局より、「授業評価実施要項が策定され、平成26年度から要項に基づいて授業評価を実施することとなった。看護福祉学部では4月から授業評価を実施するため、平成26年度の授業評価について、実施要項どおり実施することを確認いただきたい。」との説明がされた。

また、新宮チームリーダーより、「平成26年度から、部局長とチーム委員が評価結果を閲覧することとなった。今後、結果について部局で議論いただく場合もあると思うが、よろしくお願いします。」との依頼がされた。

特に異論はなく、平成26年度授業評価については、実施要項どおり実施することとなった。

(2) 平成26年度F レックス合宿研修会について

新宮チームリーダーより、「平成26年度のF レックス合宿研修会は、本学が当番校であるので、出席について等、協力願う。」との依頼がされた。

(3) 次回チーム会議開催予定

次回チーム会議は、5月に開催予定

1.3 FD 事業経費

平成25年度 FD事業経費(実績)

(単位:円)

費目	細目	実績
報償費		168,000
	FD研修 講師報酬(8/26～8/28)	91,200
	障害学生修学支援研修会 講師報酬(1/29)	38,400
	FD研修 講師報酬(2/28)	38,400
旅費		118,961
	FD研修 講師旅費(8/26～8/28)	57,080
	FD研修(F-レックス合宿研修会)(9/9～10)	6,850
	FD研修(F-レックス合宿研修会)(9/9～10)	1,850
	FD研修(F-レックス合宿研修会)(9/9～10)	5,000
	FD研修(F-レックス合宿研修会)(9/9～10)	10,641
	障害学生修学支援研修会 講師旅費(1/29)	8,600
	FD研修 講師旅費(2/28)	28,940
消耗品費		63,990
	FD研修メンター弁当代(8/26～8/28)	27,000
	FD研修資料代(F-レックス合宿研修会)(9/9～10)	3,000
	FD研修資料代(F-レックス合宿研修会)(9/9～10)	3,000
	FD研修資料代(F-レックス合宿研修会)(9/9～10)	3,000
	FD研修資料代(F-レックス合宿研修会)(9/9～10)	3,000
	文房具	24,990
委託料		1,877,463
	前期授業評価アンケート業務委託	850,500
	後期授業評価アンケート業務委託	819,000
	FD報告書2012 印刷	124,425
	「学生の意識調査アンケート」データ入力	83,538
合計		2,228,414

1.4 事業の実施状況

1.4.1 授業評価

実施概要、質問用紙と回答用紙、全体集計結果を16頁より順に掲載する。16頁の実施概要を2012年度のそれと比較すると、前期の学部に参加科目が290科目から291科目に増加（内訳は経済学部2科目減、生物資源学部増減なし、海洋資源学部2科目増、看護福祉学部1科目増、学術教養センター増減なし、キャリア教育科目増減なし）し、後期は289科目から271科目に減少（内訳は経済学部5科目減、生物資源学部増減なし、海洋資源学部1科目増、看護福祉学部8科目減、学術教養センター6科目減）した。

平成25年度前期 学生による授業評価の実施結果

★実施期間

平成25年7月8日(月)～7月18日(木)

★調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	1,892 枚	5,302 枚
生物資源学部	621 枚	905 枚
海洋生物資源学部	874 枚	1,098 枚
看護福祉学部	1,347 枚	1,706 枚
学術教養センター	4,156 枚	7,202 枚
キャリアセンター	7 枚	31 枚
計	8,897 枚	16,244 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	34 枚	45 枚
生物資源学研究科	34 枚	85 枚
看護福祉学研究科	11 枚	31 枚
計	79 枚	161 枚

★参加教員

＜学部＞		
経済学部	23 人	85.2%
生物資源学部	14 人	87.5%
海洋生物資源学部	16 人	100.0%
看護福祉学部	30 人	100.0%
学術教養センター	23 人	92.0%
キャリアセンター他	4 人	100.0%
非常勤講師	51 人	86.4%
計	161 人	91.0%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	6 人	66.7%
生物資源学研究科	3 人	60.0%
看護福祉学研究科	5 人	55.6%
非常勤講師	6 人	85.7%
計	20 人	66.7%

★参加科目

＜学部＞		
経済学部	48 科目	78.7%
生物資源学部	20 科目	95.2%
海洋生物資源学部	23 科目	100.0%
看護福祉学部	47 科目	88.7%
学術教養センター	152 科目	82.6%
キャリア教育科目	1 科目	100.0%
計	291 科目	84.8%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	13 科目	76.5%
生物資源学研究科	4 科目	57.1%
看護福祉学研究科	5 科目	38.5%
計	22 科目	59.5%

平成25年度後期 学生による授業評価の実施結果

★実施期間

平成26年1月9日(木)～1月22日(水)

★調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	1,796 枚	4,718 枚
生物資源学部	377 枚	605 枚
海洋生物資源学部	528 枚	811 枚
看護福祉学部	942 枚	1,374 枚
学術教養センター	3,036 枚	5,747 枚
計	6,679 枚	13,255 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	10 枚	42 枚
生物資源学研究科	24 枚	35 枚
看護福祉学研究科	15 枚	17 枚
計	49 枚	94 枚

★参加教員

＜学部＞		
経済学部	26 人	86.7%
生物資源学部	11 人	84.6%
海洋生物資源学部	15 人	93.8%
看護福祉学部	22 人	95.7%
学術教養センター	23 人	95.8%
キャリアセンター他	2 人	100.0%
非常勤講師	35 人	77.8%
計	134 人	87.6%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	3 人	42.9%
生物資源学研究科	4 人	100.0%
看護福祉学研究科	3 人	37.5%
非常勤講師	1 人	33.3%
計	11 人	50.0%

★参加科目

＜学部＞		
経済学部	75 科目	68.8%
生物資源学部	13 科目	81.3%
海洋生物資源学部	19 科目	86.4%
看護福祉学部	33 科目	84.6%
学術教養センター	131 科目	80.4%
計	271 科目	77.7%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	4 科目	36.4%
生物資源学研究科	4 科目	100.0%
看護福祉学研究科	5 科目	50.0%
計	13 科目	52.0%



福井県立大学 授業に関する調査

質問および回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために
行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

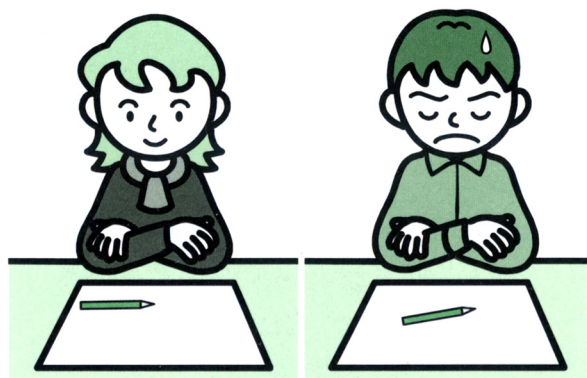
回答は裏面の回答欄に記入してください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述
してください。

記入上の注意

- 1：選択回答の場合はマークシート記入を、記述回答の場合は対応する空欄に記述
してください。
- 2：記入は濃い(B程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いてください。
- 3：訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してください。
- 4：用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないでください。

マーク例) 良い例 (2) ... ➡ ● 悪い例 (2) ... ➡ ~~(2)~~ ~~(2)~~ ~~(2)~~ ~~(2)~~



本アンケートによる(全学、学部別等)授業評価結果は、本学
ホームページ上で開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.fpu.ac.jp/group/fd/> を
御覧ください。

学籍番号の上から1ケタ目の数字をマークしてください。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

例) 平成25年4月入学生・・・①

学籍番号の上から2ケタ目の数字をマークしてください。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

例) 平成25年4月入学生・・・③

学部生 所属の番号をマークしてください。

1: 経済学部経済学科 2: 経済学部経営学科 3: 生物資源学部生物資源学科 4: 海洋生物資源学部海洋生物資源学科
5: 看護福祉学部看護学科 6: 看護福祉学部社会福祉学科 7: 科目等履修生・聴講生

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

大学院生 所属の番号をマークしてください。

8: 経済・経営学研究科 地域・国際経済専攻 9: 経済・経営学研究科 経営学専攻 10: 生物資源学研究科 生物資源学専攻
11: 海洋生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻 12: 看護福祉学研究科 看護学専攻 13: 看護福祉学研究科 社会福祉学専攻 14: 科目等履修生・聴講生

⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭

質問および回答欄

Q1 この授業(課題、レポート、予習復習を含む)に意欲的に取り組みましたか?

①意欲的に取り組まなかった ②あまり意欲的に取り組まなかった ③ある程度意欲的に取り組んだ ④意欲的に取り組んだ

① ② ③ ④

Q2 先生の講義の方法(話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム等の活用)はどうでしたか?

①不適切 ②やや不適切 ③まずまず適切 ④適切

① ② ③ ④

Q3 授業中の内容はどの程度理解できましたか?

①理解できなかった ②あまり理解できなかった ③ある程度理解できた ④理解できた

① ② ③ ④

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか?

①高まらなかった ②あまり高まらなかった ③少し高まった ④高まった

① ② ③ ④

Q5 この授業を総合的に評価してください。

①良くない ②あまり良くない ③まずまず良い ④良い

① ② ③ ④

Q6 授業を受けた上での感想(先生の授業への熱意、方法、教材、授業内容はシラバスに即していたか、など)を良かった点あるいは不備な点について自由に書いてください。この欄の記述に対する担当教員のコメントを、後日ウェブ上に掲載します。

Q6の自由記述欄

Q7 教員設定の質問(別紙参照)

① ② ③ ④

Q8 教員設定の質問(別紙参照)

Q8の自由記述欄

全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。
以下に、集計結果の見方を記す。

全集計数	回答された全てのアンケートから学部・学科・入学年度が不明のデータを除いたもの
Q1 から Q5	アンケートの Q1 から Q5 に対応 設問のキーワードを記すが、詳細は 18 頁を参照
数値上段	平均値（質問は、4 件法）
数値下段	母標準偏差。数値が大きい場合、平均値周りに正規分布状にばらつきが大きい時もあるが、良い評価と悪い評価が 2 分されている場合もあるので要注意。
集計方法	設問は、回答選択肢「1, 2, 3, 4」をそれぞれ「1 点, 2 点, 3 点, 4 点」と得点化、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を上段に、母標準偏差を下段に示す。無回答の場合の人数は母集団に含めず。「―」の欄は有効回答が無かったことを示す。

[集計グループ]

全体	全ての集計対象者
学部学科別	当該学部または学科の学生の評価結果を集計
入学年次別	学部学科の枠を越え、学生の入学年次（西暦年の下 2 桁）別に集計
部局別	当該学部には所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
規模別	授業が行われた教室の大小別に集計

全体集計結果（学部・前期）

集計グループ	（ 集計数 ）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	（ 8576 ）	3.18 0.72	3.28 0.72	3.06 0.74	3.14 0.80	3.30 0.70
学部学科別（ 8576 ）						
経済学部	（ 3929 ）	3.18 0.73	3.30 0.73	3.08 0.74	3.14 0.79	3.31 0.71
経済学科	（ 1908 ）	3.14 0.77	3.25 0.76	3.05 0.76	3.11 0.82	3.27 0.74
経営学科	（ 2021 ）	3.22 0.69	3.34 0.69	3.11 0.71	3.17 0.75	3.34 0.68
生物資源学部	（ 1106 ）	3.09 0.71	3.24 0.72	2.97 0.76	3.10 0.80	3.26 0.70
生物資源学科	（ 1106 ）	3.09 0.71	3.24 0.72	2.97 0.76	3.10 0.80	3.26 0.70
海洋生物資源学部	（ 1439 ）	3.06 0.75	3.18 0.72	2.94 0.76	2.98 0.84	3.18 0.73
海洋生物資源学科	（ 1439 ）	3.06 0.75	3.18 0.72	2.94 0.76	2.98 0.84	3.18 0.73
看護福祉学部	（ 2083 ）	3.31 0.67	3.36 0.69	3.16 0.70	3.27 0.76	3.38 0.65
看護学科	（ 1293 ）	3.37 0.65	3.37 0.68	3.19 0.67	3.30 0.75	3.37 0.65
社会福祉学科	（ 790 ）	3.21 0.68	3.35 0.71	3.12 0.74	3.22 0.77	3.38 0.66
科目等履修生・聴講生	（ 19 ）	3.42 0.67	3.47 0.82	3.32 0.73	3.47 0.75	3.42 0.82
入学年次別（ 8576 ）						
06生	（ 2 ）	2.50 1.50	2.50 1.50	2.50 1.50	3.00 1.00	2.50 1.50
07生	（ 0 ）	— —	— —	— —	— —	— —
08生	（ 20 ）	3.15 0.73	3.40 0.49	3.30 0.46	3.25 0.62	3.40 0.49
09生	（ 59 ）	3.19 0.65	3.32 0.75	3.19 0.62	3.22 0.76	3.41 0.72
10生	（ 415 ）	3.31 0.69	3.38 0.68	3.26 0.62	3.24 0.75	3.38 0.66
11生	（ 1639 ）	3.19 0.65	3.26 0.66	3.08 0.66	3.16 0.72	3.29 0.62
12生	（ 2480 ）	3.21 0.72	3.38 0.68	3.13 0.73	3.24 0.77	3.40 0.66
13生	（ 3961 ）	3.15 0.75	3.23 0.76	2.99 0.78	3.06 0.84	3.22 0.75
部局別（ 8576 ）						
経済学部	（ 1813 ）	3.17 0.71	3.31 0.69	3.06 0.73	3.14 0.76	3.32 0.68
生物資源学部	（ 605 ）	3.03 0.72	3.25 0.70	2.92 0.78	3.09 0.79	3.26 0.69
海洋生物資源学部	（ 859 ）	3.08 0.72	3.16 0.68	2.93 0.72	2.99 0.82	3.20 0.68
看護福祉学部	（ 1299 ）	3.35 0.65	3.38 0.68	3.20 0.66	3.34 0.72	3.41 0.64
学術教養センター	（ 4000 ）	3.18 0.74	3.28 0.75	3.07 0.76	3.11 0.82	3.28 0.73
規模別（ 8576 ）						
100人以上	（ 4092 ）	3.11 0.74	3.21 0.75	2.97 0.76	3.07 0.82	3.22 0.74
100人未満	（ 4484 ）	3.25 0.70	3.36 0.68	3.15 0.71	3.20 0.77	3.37 0.66

全体集計結果（学部・後期）

集計グループ	(集計数)	Q1意欲の受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	(6418)	3.21 0.70	3.30 0.71	3.12 0.71	3.20 0.77	3.34 0.68
学部学科別	(6418)					
経済学部	(3214)	3.21 0.72	3.30 0.73	3.14 0.72	3.20 0.77	3.35 0.70
経済学科	(1547)	3.18 0.74	3.27 0.76	3.09 0.75	3.17 0.80	3.31 0.73
経営学科	(1667)	3.24 0.70	3.33 0.71	3.19 0.69	3.23 0.74	3.38 0.67
生物資源学部	(759)	3.13 0.69	3.32 0.65	3.08 0.69	3.17 0.75	3.33 0.63
生物資源学科	(759)	3.13 0.69	3.32 0.65	3.08 0.69	3.17 0.75	3.33 0.63
海洋生物資源学部	(945)	3.09 0.72	3.19 0.73	2.98 0.73	3.10 0.81	3.25 0.72
海洋生物資源学科	(945)	3.09 0.72	3.19 0.73	2.98 0.73	3.10 0.81	3.25 0.72
看護福祉学部	(1497)	3.31 0.64	3.36 0.65	3.16 0.69	3.28 0.75	3.40 0.63
看護学科	(907)	3.38 0.63	3.37 0.65	3.21 0.70	3.31 0.75	3.41 0.63
社会福祉学科	(590)	3.21 0.65	3.35 0.65	3.09 0.68	3.22 0.75	3.38 0.64
科目等履修生・聴講生	(3)	3.67 0.47	4.00 0.00	3.67 0.47	4.00 0.00	4.00 0.00
入学年次別	(6418)					
08生	(24)	3.21 0.64	3.21 0.64	3.13 0.67	3.29 0.54	3.25 0.66
09生	(46)	3.26 0.82	3.43 0.68	3.26 0.74	3.33 0.75	3.48 0.62
10生	(325)	3.38 0.67	3.55 0.62	3.43 0.61	3.50 0.65	3.60 0.58
11生	(985)	3.32 0.67	3.40 0.64	3.23 0.66	3.34 0.71	3.47 0.61
12生	(2088)	3.16 0.70	3.25 0.72	3.07 0.70	3.15 0.78	3.30 0.70
13生	(2950)	3.18 0.71	3.28 0.72	3.07 0.73	3.15 0.79	3.31 0.70
部局別	(6418)					
経済学部	(1720)	3.19 0.72	3.26 0.76	3.11 0.74	3.17 0.79	3.32 0.72
生物資源学部	(362)	3.06 0.66	3.27 0.62	3.02 0.64	3.15 0.72	3.30 0.59
海洋生物資源学部	(503)	3.08 0.72	3.15 0.73	2.92 0.70	3.06 0.84	3.23 0.71
看護福祉学部	(905)	3.39 0.63	3.44 0.62	3.28 0.64	3.40 0.68	3.49 0.59
学術教養センター	(2928)	3.20 0.70	3.31 0.70	3.12 0.72	3.18 0.77	3.34 0.68
規模別	(6418)					
100人以上	(3266)	3.14 0.70	3.23 0.73	3.04 0.73	3.11 0.79	3.26 0.70
100人未満	(3152)	3.28 0.70	3.38 0.67	3.20 0.68	3.29 0.74	3.43 0.65

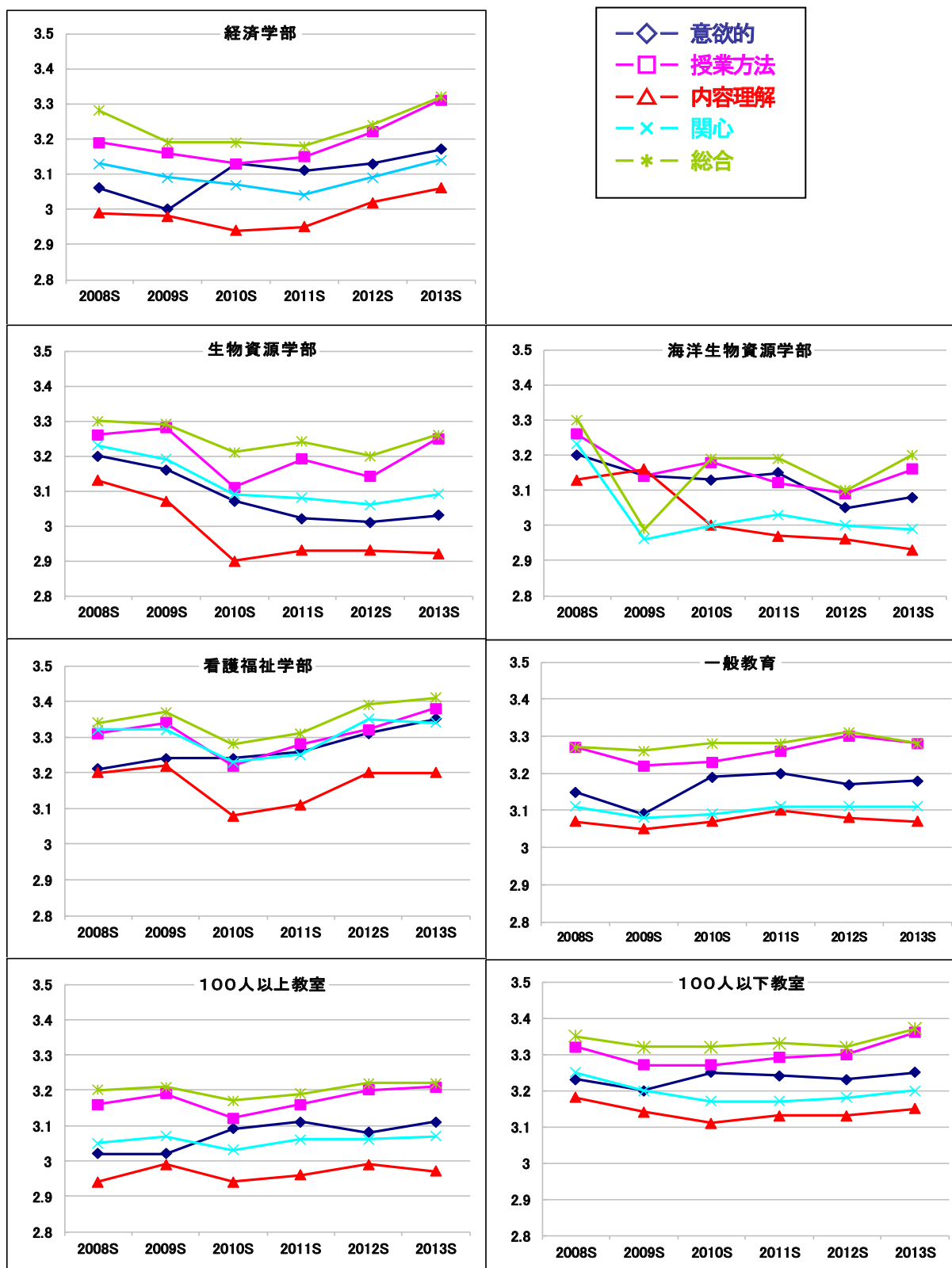
全体集計結果（大学院・前期）

集計グループ (集計数)		Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体 (73)		3.41 0.79	3.64 0.56	3.14 0.76	3.51 0.68	3.58 0.62
研究科専攻別 (73)						
研究科	経済・経営学研究科 (31)	3.81 0.40	3.90 0.30	3.35 0.70	3.74 0.44	3.87 0.34
	地域・国際経済政策専攻 (5)	3.40 0.49	3.40 0.49	2.80 0.98	3.40 0.49	3.40 0.49
	経営学専攻 (26)	3.88 0.32	4.00 0.00	3.46 0.57	3.81 0.39	3.96 0.19
	生物資源学研究科 (33)	2.94 0.89	3.33 0.64	2.85 0.78	3.21 0.81	3.24 0.70
	生物資源学専攻 (26)	3.00 0.92	3.50 0.57	2.96 0.81	3.42 0.69	3.38 0.68
	海洋生物資源学専攻 (7)	2.71 0.70	2.71 0.45	2.43 0.49	2.43 0.73	2.71 0.45
	看護福祉学研究科 (9)	3.78 0.42	3.89 0.31	3.44 0.50	3.78 0.42	3.78 0.42
	看護学専攻 (6)	3.67 0.47	3.83 0.37	3.33 0.47	3.83 0.37	3.67 0.47
	社会福祉学専攻 (3)	4.00 0.00	4.00 0.00	3.67 0.47	3.67 0.47	4.00 0.00
	科目等履修生・聴講生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別 (73)						
入学年次	06生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —
	07生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —
	08生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —
	09生 (3)	4.00 0.00	4.00 0.00	3.33 0.47	4.00 0.00	4.00 0.00
	10生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —
	11生 (1)	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
	12生 (12)	3.75 0.60	3.92 0.28	3.42 0.86	3.67 0.47	3.83 0.37
	13生 (57)	3.30 0.82	3.56 0.59	3.05 0.74	3.44 0.73	3.49 0.65
部局別 (73)						
部局	経済・経営学研究科 (32)	3.78 0.41	3.88 0.33	3.34 0.69	3.72 0.45	3.84 0.36
	生物資源学研究科 (33)	2.94 0.89	3.33 0.64	2.85 0.78	3.21 0.81	3.24 0.70
	看護福祉学研究科 (8)	3.88 0.33	4.00 0.00	3.50 0.50	3.88 0.33	3.88 0.33

全体集計結果（大学院・後期）

集計グループ	(集 計 数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	(45)	3.33 0.67	3.71 0.45	3.13 0.75	3.58 0.65	3.76 0.48
研究科専攻別 (45)						
経済・経営学研究科 (10)		3.80 0.40	3.90 0.30	3.40 0.49	3.90 0.30	3.90 0.30
	地域・国際経済政策専攻 (1)	4.00 0.00	4.00 0.00	3.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
	経営学専攻 (9)	3.78 0.42	3.89 0.31	3.44 0.50	3.89 0.31	3.89 0.31
	生物資源学研究科 (23)	2.91 0.58	3.52 0.50	2.83 0.82	3.30 0.75	3.61 0.57
	生物資源学専攻 (13)	2.85 0.77	3.62 0.49	3.00 0.88	3.23 0.89	3.62 0.62
	海洋生物資源学専攻 (10)	3.00 0.00	3.40 0.49	2.60 0.66	3.40 0.49	3.60 0.49
	看護福祉学研究科 (12)	3.75 0.43	3.92 0.28	3.50 0.50	3.83 0.37	3.92 0.28
	看護学専攻 (9)	3.78 0.42	4.00 0.00	3.56 0.50	3.89 0.31	4.00 0.00
	社会福祉学専攻 (3)	3.67 0.47	3.67 0.47	3.33 0.47	3.67 0.47	3.67 0.47
	科目等履修生・聴講生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別 (45)						
08生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —	
09生 (1)	3.00 0.00	4.00 0.00	3.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	
10生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —	
11生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —	
12生 (5)	3.40 0.49	3.60 0.49	3.20 0.40	3.60 0.49	3.60 0.49	
13生 (39)	3.33 0.69	3.72 0.45	3.13 0.79	3.56 0.67	3.77 0.48	
部局別 (45)						
経済・経営学研究科 (10)	3.80 0.40	3.90 0.30	3.40 0.49	3.90 0.30	3.90 0.30	
生物資源学研究科 (23)	2.91 0.58	3.52 0.50	2.83 0.82	3.30 0.75	3.61 0.57	
看護福祉学研究科 (12)	3.75 0.43	3.92 0.28	3.50 0.50	3.83 0.37	3.92 0.28	

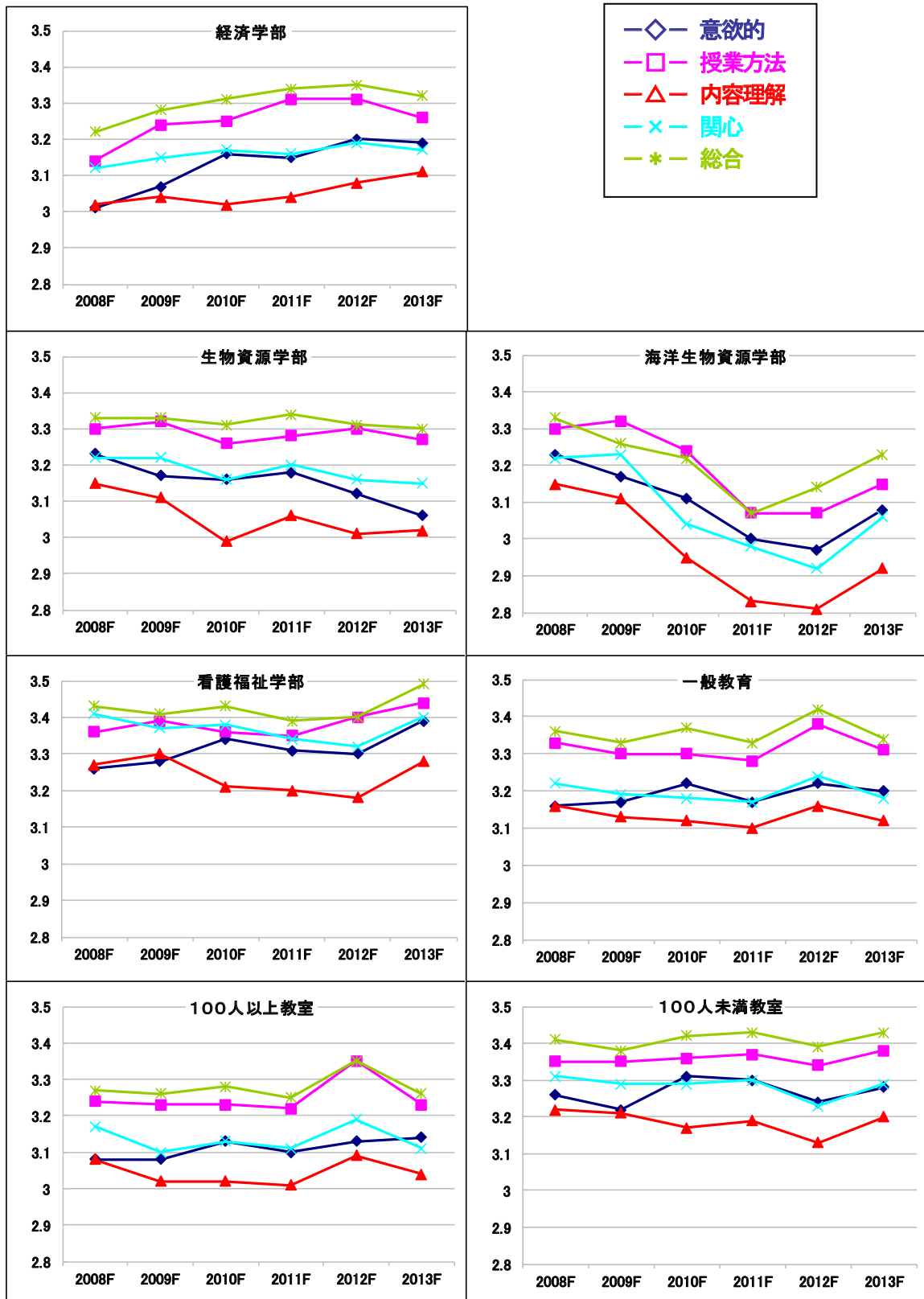
重要項目の経年特性（前期）



(注)

- ・「意欲的」は学生の授業に対する意欲、「授業方法」は授業の進行方法、「内容理解」は学生の満足度や学力、「関心(が高まった)」は、教員と学生双方の努力、「総合(評価)」は授業の質、に各々関係していると考えている。
- ・軸の数値2008SのSは春学期（前期）を、Fは秋学期（後期）を意味する。

重要項目の経年特性（後期）



1.4.2 授業公開

2 章「各部局の FD 活動」にて、部局毎に報告する。

1.4.3 FD 研修

全体研修のみ示す。それぞれの詳細および各部局で行った研修は、2 章「各部局のFD活動」にて報告する。

学内研修

テーマ	講師等	開催日	参加数
ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ	東京大学 大学総合教育研究センター 特任准教授 栗田佳代子他	8 月 26 日 ～ 8 月 28 日	7 名
ティーチング・ポートフォリオ講習会	東京大学 大学総合教育研究センター 特任准教授 栗田佳代子	2 月 28 日	23 名

学外研修

参加イベント	日程	出張先	参加者
F レックス第4回FD合宿研修会	9 月 9 日 ～ 9 月 10 日	福井工業高等専門学校	経済学部 新宮 晋 准教授 海洋生物資源学部 宮台 俊明 教授 学術教養センター 山川 修 教授 徳野 淳子 講師
F レックスシンポジウム ポートフォリオによる教育研究活動の進展～内省と改善への道標～	11 月 30 日	福井工業大学	看護福祉学部 深沢 裕子 准教授 江口 千代 助教 学術教養センター 山川 修 教授 徳野 淳子 講師
第3回F レックス・ティーチング・ポートフォリオ+アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ	3 月 6 日 ～ 3 月 8 日	福井大学	看護福祉学部 江口 千代 助教 (メンター) 学術教養センター 山川 修 教授

2. 各部局のFD活動

2008年度後期より部局主体で企画実施するようになったFDは、今年度いっそう部局毎の独自性を重視する方向で活動を展開した。以下は、それぞれの部局ならではの活動の報告である。今回は特に、授業公開について部局毎の方針が示されるとともに、それぞれの末尾に「課題と展望」が示されている（ただし、看護福祉学部については従前通りの報告となっている）。

2.1 経済学部（福山龍、新宮晋）

経済学部の本年度FD活動は、既定の①授業評価（前期・後期）と②授業公開（前期・後期）に加え、学部内研修として後期に開催した③教員懇談会からなる。これらについて順次報告するとともに、主に③にもとづいて、経済学部のFD活動の現状についての課題と展望をまとめとして述べる。

2.1.1 授業評価について

(1) 評価実施状況は従来通りである。昨年度報告書にあるとおり、原則として全授業を評価対象としてアンケートを実施している。

(2) 授業評価アンケートの結果について

前期は、この5年間の経年変化を見ると、全項目について下降から上昇にV字型を描いているように見える。この間の特徴として「意欲」と「関心」が交差したことが一つ、また、「授業方法」について高い数値を示す一方「内容理解」が低迷していることも明白に指摘できる。なぜかは分からない。

後期は前期以上に全体的に評価が高い。経年変化としては横ばいしないしゆるやかに漸増している。「内容理解」が項目の中で最低であることには変わらないが、それでも前期に比べると非常によい数値である。回答者の多数が1年生である（単位取得に伴い学年が上がるとともに受講者数が漸減するのは当然なので）ことを考えると、大学の授業に適応してきたことと関係があるかも知れない。

ただ、こうした表層の数値から得られる情報だけではこれ以上のことは言えそうにないので、可能ならば学部全体としてはもっときちんと統計的に処理をして意味のある分析をした方が多少マシなのではないか（個別にはサンプル数が少ないので細かく分析しても仕方ないであろう）。授業評価の場合、学生の「意欲」は本人の申告なので、その「授業方法」や「理解度」との相関にどれほどの意味があるのか疑念もあるが、それでもたんなる数値のざっくりした読み取りではなく、きちんと分析して見ることで授業改善の情報としてまだしも有益になるかも知れない。例えば「授業方法」と「理解度」よりも「意欲」と「理解度」の方が相関性が高ければ、教員の工夫が伝わる分「授業方法」の評価は高くなっているが、じつは空回りして「理解度」に結びついていない、むしろ学生のモチベーションを上げる方がよい、という場合もあろう。逆に「授業方法」の評価が低くても「理解度」が高い場合もあることが考えられる。学部全体でそのあたりのことが情報として共有できれば、FDのパフォーマンスを上げるのに今よりは参考になるように思われる。できれば、学生の申告に基づく「理解度」ではなく、試験の成績など客観的な評価との相関性が見られればもっとよいであろうが、匿名性を前提としているのでそれは適わない。

いずれにしても毎年この報告書に書かれていることであるが「授業評価アンケート」で授業改善を過度に期待するのはそもそも無理がある。ただ、学生との間にフィードバックの回路が制度的に開かれていて、学生が意見を述べる機会が与えられていることは大切であると思われる。

2.1.2 授業公開の方針と実績

(1) 方針

経済学部の授業公開ポリシーは、従前通り、具体的な授業を参観することを通じて参観者の授業改善に資

するとともに、公開者との間で、内容に立ち入らない範囲で率直な意見交換を行い、公開者の授業改善にも資することである。地道ながら継続することで、公開者・参観者ともそれなりの成果はあると感じている。ただ、後述するようにその限界も見えてきており、授業公開だけに依存しない授業改善の可能性を探る必要がある。

(2) 実施概要

〔前期〕：今期は期せずして、自然発生的授業公開の事例が2件報告されたので特に公募はしなかった。これらについて報告する。

授業名：広告論

日時：2013年6月6日

担当教員：北島啓嗣

参観教員：清水葉子、木下和久

【概要】

通常の講義科目であるが、今期は学生の参加型学習を促す形式を試みられるということで、北島先生から木下先生・清水先生に呼びかける形で授業公開が行われた。

【ディスカッション】

●講義に学生を主体的に参加させる工夫。参加者に名前を書かせそれを元に質問を行うことで、講義を合理的に運用している。事前に講義範囲を提示し予習を前提とすることで、学習効果を高めると共に、講義においてより深い内容まで指摘している。加えて、学生同士で議論し報告する時間を確保することで、講義内容の充実を実現しているなどの点が、参考になった。

●学生は指定された教科書を事前に読んで内容を把握しておくことが求められており、授業では、事前学習を前提に学生と双方向で議論しながら進めるというユニークな形式。学生は必ず発言を求められるので、授業への参加意識が非常に高い。自分の言葉で発言しているので知識の定着度も高いと感じる。

●受講に際しては各自予習が求められ、講義中に意見を述べなくてはならないなど、学生に積極的な学習参加を求めている。これらは講義による学習効果を高めると予想できるが、残念ながら受講する学生を選別する側面を有すると思う。受講に負荷が高くと良質な講義を、学生が選好するように、学生の意識変革をする必要があると思う。

●発言を求められた時にうまく答えられない学生や、もしかすると予習が不十分かと見える学生もいるが、非難がましい感じにならずさりと流して次の学生をあてておられるのは良いと思う。この授業形式では、全体の発言しやすい雰囲気を維持するのが重要だと思えるので。

●学生の主体的な講義への参加をいかに促すことができるか考えさせられた。私の講義でも、学生に対して行う質問内容・回数・タイミング・方法など、可能なら学生同士の議論についても工夫してみようと思う。北島先生にはトライアル・アンド・エラーで工夫していると聞いているが、学習効果を高める基準や目安、ポイントなどがあれば知りたい。

●教室ではディスカッションが中心であるので、体系的な学習は各自の予習にまかされていると思われる。学習が不十分な学生やついてこられない学生に対してはどうすればいいか（結果的に脱落しているのか）。また、事前学習を前提にして教室ではディスカッション中心というこのやり方は、理論科目には応用しにくい。とはいえ、座学だけの講義形式の限界も日頃感じているので、理論系の科目で学生参加型にするにはどうすればいいか関心がある。

【参観後の感想】

授業公開は、公開側も参観側も、時間の都合があわないなどの理由で頻繁に実施することは難しいと感じる。授業の工夫を持ち寄って意見交換する小規模な場を定期的に設けてはどうか。小テストの実施方法、コメントカードの使い方、資料紹介の仕方など、小さな工夫は意見交換でも伝わるのではないか。

授業名：金融論

日時：2013年7月18日

担当教員：清水葉子

参観教員：中里弘穂

【概要】

本講義の公開は、中里先生と清水先生が企画・運営された主として県内金融機関の実地見学の、事前情報共有の機会として行われた。授業は清水先生の通常の講義の一コマである。

【ディスカッション】

- 日本銀行の機能についての学習内容であったが、学生が理解しやすい身近な例を提示しての説明は参考になった。毎回オリジナルの教材を使用している点も評価したい。
- 授業への遅刻者が目立ったが、最初に学生が来ないといけなような工夫を取り入れるとよいと思った。
- 非常に教員の熱意が感じられる授業であったと思う。大学側には教員が熱意を持ち授業を行える為の支援をこれまで以上に求めたい。

【参観後の感想】

全ての授業ではなくても、全学部の公開授業と内容を期毎・月毎にご連絡いただけると参加しやすいと思う。

【後期】：今期は通常通りの授業公開を公募し、応じられた3件について授業公開が実施された。

授業名：国際経済学B

日時：2013年11月14日

担当教員：杉山泰之

参観教員：木下和久、福山龍

【概要】

通常講義の一コマが公開された。

【ディスカッション】

- 授業当日には配付資料が多く（12枚）、それまでに配布していた資料も確認していたこと。授業では学生に質問しながら内容説明を進めていたこと。板書の字が大きく声も大きくしていたことが参考になった。
- 学習の理解を促進・補助するため、プリントを有効に活用している点。プリントに沿う形で講義がすすむため、抽象度の高い内容であっても、プリントを追いながら講義を聞くことで理解を進めることができる。また、特に重要な事項を穴埋めにすることで、学生が講義内容の理解を深めるポイントを明確にし、意識付けすることができている点などが参考になった。
- 教壇備え付けのパソコンが邪魔しているため前から4列目5列目までに坐っている学生は黒板が見えなくなる場合がある。固定されたパソコンは移動できないので、板書には工夫が必要である。
- 説明のあと、「わかる？」と学生に何度も聞き確認するのは良いと思う。ただ、大教室なので、学生が「わからない」という反応をしづらいように思う。一方、選択肢を2つに限定し、どちらだと思うか、という質問と挙手の方法は、学生が答えやすく、かつ理解しているか確認しやすいなと思う。学生が反応するまで一呼吸時間をおくと良いかも。

●閑話休題を疲れてきたタイミングで話されていて良いなと思いました。内容はなんでも良いと思いますがオチは欲しい。ご家族に会うために早く帰ってきた、と言う話でしたので、最後に家についた時、たとえば家族の反応はどうだったかなど、最後まで話が行くと聞いている方は落ち着くかな、と思いました。閑話休題なので何でも良いのですが。

授業名：原価計算論

日時：2013年11月18日

担当教員：木下和久

参観教員：境宏恵、新宮晋

【概要】

通常の講義科目である。最初にNIKKEI BUSINESSの記事を示して導入し、その後前週分の確認をふまえて当週分の講義に入る。

【ディスカッション】

●非常にテクニカルな内容にもかかわらず安定して出席しているということで、学生達が元々モチベーションが高いことが分かる。それでも、テクニカルな学習が現実と遊離しているわけではないことを、時事的な情報を与えることでメッセージとして伝えている点は非常によいと思った。

●ロジックでカバーできることが学生に必ずしも上手く伝わるとは限らない。とりわけテクニカルには煩瑣で差異が微妙なものについては理屈の説明だけでは直ちには理解に結びつきにくい。それを、きわめて網羅的に提示することで学生の理解に資するよう工夫されている点は、さぞや準備が大変であつたろうと推察するとともに、頭が下がる。

●自主学習の機会が、学生の理解に欠かせないという印象を持った。理解とともに時間をかけた習熟が求められるように思われる。そのあたり、どのように工夫されているか、興味があるところである。

【参観後の感想】

自分の担当と直接には関わらないが、授業のフレームとしてみると参考になる点が多々あった。具体的な内容についてはコメントしようがないが、それだけに、相互に関係し合う科目間での情報共有は授業を活かす上で有効であるように思われた。実際あとで確認したことであるが、会計系の科目担当者の間では頻繁に情報交換や意見交換をされていることを知った。

授業名：中小企業論

日時：2013年11月28日

担当教員：山崎淳

参観教員：木下和久、福山龍

【概要】

通常授業の一コマが公開された。

【ディスカッション】

●授業の最初に前回説明した内容をまとめて復習していたこと、授業内容を展開する前に、その内容のポイントを先に説明していたこと、2013年版等比較的新しい資料を利用していたことが参考になった。

●参考になったこととしては、講義の導入において、講義内容の学習を促進する仕掛けを用意している点。具体的には、まず、講義の開始時に前回までの確認をし、復習と同時に学習への準備をさせていること。次に今回の講義のポイントを示すことで、学習内容を簡単に理解し準備させていること。最後に学習済みの内容で、今回の講義に関連する重要ポイントを再度提示し、理解を深める手助けとしていること。

●中小企業の生産現場の写真や製品の実物を上手く利用していたが、写真内容の説明や実物の技術開発などについてもっと具体的な説明があるとよかったのではないかと思います。

●理解を深めるための具体的な事例として、写真だけではなく、講義に関連する実物(コマ)を利用するなど工夫をしている点は良いと思った。それに加えて、その実物が優れている点や、注意深く見るべき点などについて具体的な言及があると、中小企業の技術のすばらしさなども指摘できるのではないかと感じた。

●学生がパワポの内容をノートするよう指示する際、指示する量や時間をどうすべきか、悩ましく思った。板書であれば書いている時間がノートに写す時間にあてられる。パワポではノートする時間を意図的に用意する必要がある。学生がノートへ書き写す時間の違いの問題は、学生が合図をしやすいように約束を決めることで解決しているのが参考になった。

2.1.3 部局でのFD研修

学部教員による学内・学外研修への参加については、他部局の報告と重複するので割愛する。本学部独自の研修についてのみ報告する。

経済学部懇談会

日時：2013年12月18日

場所：経済学部棟教授会室

参加教員数14名

テーマ：学部FDのあり方をめぐって

概要：以下、当日の議論を箇条書きにして示す。

①総論：FD=Faculty Developmentの原点に立ち返るべきである。

- ・規格化されたFDは教員も学生もスポイルしてしまう。むしろ個々の教員が裁量権を持って工夫することを促すことで、それぞれのパフォーマンスを上げることが必要である。

- ・個別に教員を評価することではなく、学部全体のパフォーマンスが優越するべきである。

- ・学部内での教員間情報交換が重要である。学部懇談会の頻度を上げるとよい。

- ・最近アクティブ・ラーニングを非講義科目でかなり積極的に取り入れている。講義科目でも工夫できるかもしれない。

- ・学内外を問わずゼミ横断的な授業が活発になっているが、基礎ゼミや外書講読でも取り組み始めている。

- ・演習や基礎ゼミ、外書講読などのインターアクティブな授業は、ノウハウの共有が有効と思われるので、やはり懇談会を通じてや非公式の集まりでもよいので情報交換が重要である。

- ・研究費だけでなく、教育にかかるコスト(教材費)の一定部分を学内で競争配分にする、例えば教材費の戦略的利用なども考えてみてはどうか。小樽商科大学が既に行っている。

②授業公開について

- ・授業公開・参観には一定の刺激があるが、講義についていえば工夫されているということ以上には自分の科目に使えない。工夫は専門性に依存する面がある。

- ・教員評価書で面白い取り組みを書いている教員や授業評価で高い数値を得ている教員の授業を参観するのも一つの考え。

- ・教育歴のない新任教員に授業公開や参観をうながす。現状を見る限り各教員は専門性に見合った工夫をしているので、むしろ独善に陥っていないか確認するためには研修を利用する方が良いかも知れない。

- ・専門に特化した授業については「経済教育学会」の報告や授業紹介が参考になる。

③授業評価について

・学期終了時の評価では、その期の学生の要望に応えられないので、学期途中（前期なら5月中）に実施し、最終回にもう一度改善成果について問うなら効力があるかも知れない。ただ、学期内にフィードバックできる体制を事務サイドで整えられるか不明。

・「自由記述欄」の内容がお座なりで役に立たない。個別に授業の中で書いてもらっているもの（リアクション・ペーパー）の方がはるかに改善に役立つ（多数の教員が実施）。

④授業評価実施要項中「8 評価結果の取扱い」について

・学部長及びFD委員と話し合いを行う場合、評価結果に対する意見や言い分をまずは聴取し、必要かつ可能な場合に授業を改善するよう促す、というのが主旨であるべき。いずれにしても授業改善が本旨であり、教員評価の道具にしてはならないし、しても授業改善の役には立たない。

・ただ、高評価の教員にどんな工夫をしているかなどの意見を求めるのは良い。授業公開をしてもらってもよい。

⑤FD研修について

・教員評価書で面白い取り組みをしている教員に、学部内研修としてレクチャーしてもらおうとよい。

・企画される研修が基本的にヘビーである。軽量級のプログラムにすべき。2時間を限度に再構成し、参加しやすくしてほしい。

2.1.4 授業改善についての課題と展望

「授業評価」や「授業公開」が制度化されてからずいぶん久しい。その間に、Faculty Development の「授業改善に資する」という元々の趣旨が忘れられ、もっぱら教員管理の道具に成り下がりがかけている面があることは否定できない。その一方で、個別には授業改善のために個々の教員が日々毎回工夫をこらして改善を試みていることも、上述および後述の報告の通りである。今後は、そうした教員の授業改善をサポートするような形でFD活動が活かされるという、FD本来の趣旨に沿ったものに軌道修正すべきであることについて、経済学部内では異論のないところである。そのための工夫はもちろん必要で、前項2.1.3に再録した懇談会でも、根底にある意図はそのことであつた。

授業改善は、毎回の授業それ自体がその営みともいえるもので、学生の反応を確かめるなどの不断のやりとりを通じて微修正しながら行われている。たしかに、時として独善的になってしまうこともあろう。それを回避するためにも受講生と間の不断のコミュニケーションが必要なことは言うまでもなく、例えば授業評価も、その一つの回路として活かされるべきものである。もちろん、期末試験の結果なども依然としてきわめて重要な情報源である。

しかし、実際には、懇談会の意見にもあつたように、授業評価や期末試験ではタイミングが遅いことなど、フィードバックは結局翌期に持ち越される。なので、実際のところ、各教員は期中にリアクション・ペーパーを配布する、中間テストやレポートを提出させるなどして学生の状況を把握しながら授業を進めているのが実情である。こうしたきめ細かい対応の方が、授業改善に即応的に取り組める。

他方、一定以上の長期間のトレンドとして学生の一般的属性の変化と授業のあり方、およびその成果の関係を知りそれらを授業改善に活かすには、また別の分析が必要かも知れない。教育制度の変更や、さらには広く社会全体の教育への向き合い方の変化などが学生の性向を変える場合など、それ相応の対応が求められる。例えば「ゆとり世代」という括りで学生を見る時、私たちはしばしば一定の共通属性を学生達の一般性として想定しているように見える。その直観が正しいかどうかを知るためには、学生の様々な属性と成績、授業スタイルと意欲や理解度の相関性などについてきちんとした分析がある方が良い。そしてこの直観が正しいければ（つまり逆に「それほどでもない」こともあり得る）、こうした分析が授業スタイルの変更を求めるかも知れないし、それほど大がかりでなくても、工夫のヒントを与えてくれることもあろう。

授業参観も、一定のマナーに陥っていることも否めない。そうであるなら、グループ（同系統科目）毎の授業の相互参観にするとか、情報交換会を定期的に行うとか、生物資源学部や学術教養センターの報告にあるように授業への取り組みを個別教員全員が公開するとか、工夫がある方がよい。また新しい授業スタイルや方法が開発され、それがどのように成果を出すと期待されるかについては、学内外の研修を通じて知ることが有効であるように思われる。

ただ、こうした見通しに直ちに飛びついて、全科目に同じことを求めるというような極端な話にならないようにする必要がある。全ては試行錯誤のなかで確かめていくしかない。かつて言われた板書かパワーポカ、授業改善一般の問題ではなく授業スタイルの選択の問題であるということは今や明らかであり、プレゼン型授業の方が効果的な科目ではそうすればよいだけのことというのが経験を積む中で共通理解になっていると思われる。

従前の「授業公開」や「授業評価」が、教育の改善にそれなりに資する面があることは否定できないし、またこれらの経験のおかげでむしろこうした既定の制度の不十分さを乗り越えるべく、実は各教員が様々な取り組みをしていることが見えてきたことは、結果として大きな成果といえる。今後、教育に関する中期目標や計画を立てる場合にも、各部局各教員の具体的な取り組みや問題意識をベースにして考えるべきで、見栄えのよい「数値目標」や形だけの「成果」の羅列にしないことが求められる。

2.2 生物資源学部（松岡由浩、伊藤貴文）

2.2.1 授業評価について

本年度前期の学部講義についての評価は、「意欲的受講」3.09、「授業方法」3.24、「内容理解」2.97、「関心」3.10、「総合評価」3.26であった。これらは、全体（全学）集計（「意欲的受講」3.18、「授業方法」3.28、「内容理解」3.06、「関心」3.14、「総合評価」3.30）と比較して、全項目にわたってわずかに低い。後期の学部授業についての評価は、「意欲的受講」3.13、「授業方法」3.32、「内容理解」3.08、「関心」3.17、「総合評価」3.33であった。これらは、全体（全学）集計（「意欲的受講」3.21、「授業方法」3.30、「内容理解」3.12、「関心」3.20、「総合評価」3.34）と比較して、「授業方法」はわずかに高いが、それ以外の項目はわずかに低い。この結果から、生物資源学部では、やや難しいと思われる講義内容を比較的多く含むカリキュラムでありながら、それに真剣に学習に取り組む学生から、総じて、良好な評価を受けていると考えられる。今後は、現在の方向性を基本に、学生との対話を充実させ、理解度をきめ細かく把握しつつ講義を進める工夫を継続することが肝要と思われる。

大学院の前期講義についての評価は、「意欲的受講」3.00、「授業方法」3.50、「内容理解」2.96、「関心」3.42、「総合評価」3.38であった。これらは、全体（全学）集計（「意欲的受講」3.41、「授業方法」3.64、「内容理解」3.14、「関心」3.51、「総合評価」3.58）と比較して、全項目にわたってやや低い。後期講義については、「意欲的受講」2.85、「授業方法」3.62、「内容理解」3.00、「関心」3.23、「総合評価」3.62であった。これらも、全体（全学）集計（「意欲的受講」3.33「授業方法」3.71、「内容理解」3.13、「関心」3.58、「総合評価」3.76）と比較して、全項目にわたってやや低い。この結果から、大学院では、学生が高度な講義内容の習得にやや難しさを感じている様子がうかがえる。従って、大学院では、学部以上に、学生との対話を充実させ、理解度をきめ細かく把握しつつ講義を進める工夫を進めることが必要と思われる。

2.2.2 授業公開の方針と実績

(1) 方針

生物資源学部では、各教員が、必要に応じて自分が担当していない講義を聴講し、授業内容を直接確認で

きるよう、全講義を対象に、希望者が事前に担当教員に連絡することでいつでも参観できる「随時公開制」を採っている。

(2) 実績

今年度、担当外の講義を参観した教員はいなかった。本学部では、後述するように担当教員による講義の工夫等をアンケート調査により共有し、学科会議等で授業内容の連携を進めている。加えて、学生によるFDアンケート調査からも、教員に対するクレームはない。以上の点から、現行のカリキュラムは無理なく実施されていると判断し、授業への参観企画に、特段、教員の動員をかけることは避けた。

2.2.3 授業改善への取り組み

生物資源学部では、2011年度より、各教員が、学生の理解を助けるために行っている、授業（学生実験を含む）上の工夫をアンケート調査により収集し、全教員でその情報を共有する取り組みを行っている。本年度は、12月14日に学部長からアンケート用紙が配布され、教育学習支援チーム員による回収・集計を経て、12月23日に結果が全教員に通知された。

本年度のアンケート項目は、「教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること」、「授業を担当しての感想など」、「学生の理解度を把握するための試み」、の3点であった。また、アンケートへの回答は任意とし、率直な意見の収集に努めた。

なお、この取り組みは、自身の講義をより良くする方法を考える上で大変参考になると、多くの教員から好評価を得ている（2.2.4「授業改善についての課題と展望」参照）。

アンケート結果を以下に記す。

・教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること

授業科目名	曜日・コマ	担当者	授業方法、あるいは授業工夫内容など
生体高分子化学	前期火曜1限	黒川洋一 (日弁教授と分担)	講義初回は、導入部として当該分野の歴史や講義の概要を説明し、毎回の講義冒頭ではトピックや前回の復習を行っている。蛋白質化学とは一見関係がなさそうな日常のトピックを取り上げることで、一定の関心を持たせることにつながっているようだ。講義の理解内容を確認するためのミニッツペーパーを二回実施したところ、説明を要する文章を書くのが苦手の学生がいると分かったが、論理的に考えて表現する能力が必要だと気づかせる助けになっていると思う。
生物物理化学I	前期火曜1限	平 修	今年度から初めて担当したため試行であること。熱化学、反応速度論などが、一般化学分野だけに限らず、生物分野でも重要な要因であることを理解してもらうためできるだけ生体物質の反応を例にして説明した。
分析化学	前期火曜1限	植松宏平	説明に十分な時間が充てられるよう、講義はスライドを用いて行っている。また学生が講義内容の理解に集中できる様、スライド資料を事前に配布している。スライド資料には適宜空欄を設けており、学生の集中力が持続するよう工夫している。
化学II	後期火曜1限	黒川洋一	講義初回に、日常生活になじみの深い化合物を取り上げ、その利用法の確立に至ったエピソードを理解させるほか、講義では、化合物の香りを体験させたり、化合物の意外な利用法や話題を取り上げて意識付けを図っている。板書、プリント、スライドのバランスを見直し、板書を写す時間を極力短くしている。高校での化学の履修状況等を確認するためのアンケート、理解度を確認するためのミニッツペーパーを実施しているほか、講義中に質問して答えさせている。

生物物理化学2	後期火曜 2 限	伊藤貴文 (日弁教授と分担)	学生がこれまで学んできた知識や学生実験で利用してきた機器類の復習を意識しながら、机の上で学ぶべきことが、実験室や将来働く際にどのように利用されているかを知ることによって、それらに対して興味を持てるよう努めた。まず初めにポイントと授業の流れをまとめたプリントを配り、その日の授業の内容と方向を示した。そして、難しい理論のところは、簡単な実験で身近に感じられるようにし、実際に得ることができる情報と利用価値に重きを置いて講義した。
応用微生物学Ⅱ	前期火曜日 2限	宇多川隆	応用微生物に関する学会や産業界の情報を講義に活かすようにしている。研究開発から工業化にスケールアップする際に、生物資源技術者として考えなければならないことなども含め、企業で経験してきたことを学生に分かり易く伝え、社会で活躍できる人材の教育に力点を置いている。
食品衛生学	前期水曜 1 限	川畑球一	本年度も教科書の説明に加えて、最近起こった関連する事件を上げて興味と理解度が深まるよう心がけた。また、配付資料を説明する際にはプロジェクターを使い、飽きが来ないように工夫した。学生から出席の取り方を見直して欲しいとのコメントを受けた。これは授業に積極的に参加しているという意思の表れだと思うのでぜひ検討したい。
一般微生物学	前期木曜 1 限	木元久	肉眼で見ることでできない微生物の講義であるため、学生達の関心を高めることを目的として、簡単な実験を取り入れた。栄養寒天培地を用いて、そのプレート上を指で触ったり、自分の頭髮を置いて培養し、実際にどれくらいの微生物が体に付着しているかを観察した。また、微生物であっても、培養して直径数ミリ程度のコロニーを形成させることにより、顕微鏡を使用せずに肉眼で確認できることを学習した。
栄養化学	前期木曜 1 限	高橋正和	各栄養素がどのように消化・吸収・代謝されて役立っているか理解してもらうため、図を多用している。昨年に続き DVD 教材を一部活用した。プリント授業であるが、板書の併用・受講生への質問で集中力を高められるように配慮している。また、配布プリントのどの部分を参照してもらいたいのか的確に伝えるため、OHC を活用している。OHC はフォーカスが甘いが、手元のプリントのどの部分に注目すべきか、を伝えるには便利。また理解度確認のため、期末試験以外に小テストと中間試験を実施している。さらに中間試験時にアンケートを実施している。
食品生化学実験	前期 8 回 (前半 8 回分)	高橋正和、川畑球一	茶葉抽出物のポリフェノール定量、培養細胞実験などを実施している。演習を多用してデータ集計に慣れる工夫をしている。最終日には討論会を実施しており、各班が得た実験データを駆使して発表・議論できる機会を設けている。このような討論会と実験の計画・遂行を通じてチームワーク力を高める工夫をしている。
食品化学	後期火曜 2 限	高橋正和	身近な食品に含まれる糖質・アミノ酸・脂質の基本構造を学ぶため、図表を多用して周辺事項と関連付けながら学べる工夫をしている。また合成甘味料・ミラクリンなどを利用した体験学習を一部取り入れ、身近に感じられる工夫をしている。このように食品の嗜好性を決める成分、食品の変質・機能性に関わる化学成分ならびにその変化を習得できるように配慮している。またその理解・修得度を確認するため、期末試験のほか、3 回の小テストと中間試験を実施している。さらに中間試験時にアンケートを実施している。
植物病理学	前期月曜 2 限	加藤久晴	本年度は中間試験の代わりに小テストを 4 回実施してみた。前回までの授業のポイントとなる内容について問い、次の授業の開始時に説明をするという形式で行った。当初は中間試験を実施するより時間的な余裕が生まれると期待したが、説明に要する時間を予定より多く必要としたため、最終的に講義の時間が足りなくなってしまった。学生には中間試験よりは負担が少ないようで、小テストの実施はおおむね好評であったが、1 限の科学英語Ⅰのあとの授業ということもあり、予習をしてこない学生も多く見受けられた。来年度はテストではなく、出席を兼ねたもう少し簡単な問いかけにしたいと考えている。
分子生物学	前期木曜 2 限	石川敦司	板書を主とする授業であるが、理解を助けるために動画を用いている。学生には好評である。

生物学 I	前期金曜 2 限	加藤久晴	本年度より担当することとなった。高校で生物を全く勉強してこなかった学生が多く、当初は講義の進め方について試行錯誤が続いた。少しでも生物に興味を持ってもらえるよう、教科書に関連した最新の話題を写真等を用いて紹介することが、学生にとっては良かったようである。
園芸植物資源学	後期水曜日 1 限	林 潤	今年より担当。授業開始時にミニレポートを行っている。レポートの課題は復習を兼ねて出題しており、前回の授業内容のポイントの大意要約になるようにしている。理解されることを優先して参考書を見て書いて良いことにしているが、全く見当違いのことを書いている学生が散見され、答案採点が想定以上に労力がかかっている。指定参考書がありその内容に基づいて授業を進めているが、他の参考書でわかりやすい図や写真があればスライドで図示している。スライドはまとめたモノを印刷して配布している。
分子育種学	後期木曜 2 限	三浦孝太郎	講義の重要なポイントについて、理解を深めるよう演習問題を実施している。また、講義内容が3つの章に分かれているが、各章の終わりに中間テストを実施し、講義内容を復習できるよう工夫している。
生化学 I I	後期金曜 2 限	石川敦司	系統立てた板書を行い、理解しやすいように心がけている。
環境生物学実験	後期 8 回	加藤久晴 (塩野先生、吉岡先生、水口先生と分担)	前期の授業科目である植物病理学で講義した内容に沿った実験を組み立てており、レポートに設けた感想欄からは、講義内容を確認できることなどからおおむね好評であると感じ取れる。植物病理学を履修していない学生に対しては、実験の前に長めに講義の時間を行うことで対処している。また、履修していない学生には実験の合間にできるだけ声をかけるようにした。比較的細かい作業が多いため、1日の作業内容をできるだけ少なくし、操作方法等の説明に時間を割くようにしている。
遺伝学 I	前期水曜日 2 限	村井耕二	毎回、授業の終わりにミニツッペーパーで授業内容に関する考察問題を解かせ、興味の喚起を図っている。教科書の補足資料は極力カラーコピーとし、理解の手助けとしている。ただし、カラーコピー代は教材費から支出できないため、個人の教員研究費から支出している。中間試験では、網羅的に重要な事項の復習ができるように多数の問題を課している。板書を丁寧に体系立ててするようにしている。常に熱い授業を心がけている。
環境生物学	前期木曜 2 限	吉岡俊人	学生にノートとりの重要性を意識してもらうために、ポイントとなる事項は図表を含めて全て板書している。板書した内容は、パワーポイントでスクリーンに映すとともにハンドアウトで配布しており、授業後に自主学習でノートを補足することができるよう工夫している。
生物資源学特別講義 I	前期金曜日 1 限	村井耕二	教科書の補足資料は極力カラーコピーとし、理解の手助けとしている。ただし、カラーコピー代は教材費から支出できないため、個人の教員研究費から支出している。積極的に授業中に学生を指名し、対話できるように試みている。板書を丁寧に体系立ててするようにしている。常に熱い授業を心がけている。
植物栄養学	前期金曜 2 限	塩野克宏	高等植物の生存に必須である水と植物栄養素の吸収、輸送、同化の理解を目指し、個別の要素よりも全体像の把握に重点を置いて指導した。講義には板書とスライドを使用し、スライドの内容については配付資料として渡した。3年生前期というまだ学生がそれぞれの専門性を決めかねている時期でもあるので、興味を持たせることが大切と考えて講義を進めた。講義の最初に分子生物学のモデル植物であるシロイヌナズナとブラキポディウムの種を栄養入り、栄養無しのポットに植えて毎週、講義の度に生育の状態を観察させて開花、結実までの生活環を観察させた。また、講義のキーワードを授業の開始時に板書し、講義の内容理解を高める工夫をした。授業のペース配分としては学生の集中力が高い 50 分間を講義に、その後の時間をコラム的にリラックスして最新の研究成果や踏み込んだ内容の話をするというように、授業時間と内容にメリハリをつけた。また、理解度を把握するために、小テスト、班単位でのプレゼンテーションおよび中間試験を実施した。また、小テストにはコメント欄を設け、よかった点や改善点を挙げてもらった。

科学英語Ⅱ	後期月曜 1 限	水口亜樹 (吉岡教授 と 分担)	本年度初めて担当した。まず、研究室所属後にいきなり英語論文を渡され読んでくれると言われても、物怖じせずに取り組めるようになってもらうことを目指していると宣言した。担当分の前半は、院入試レベルの英文を初見で10分間何も調べずに読み、その後30分間で辞書等を使いながら和訳して文章にしていくな訓練をした。後半は、実際の英語論文を渡し、論文の読み方やよく出てくる表現等を中心に解説し、最後まで一通り目を通すように指示した。その後、日本語で論文の内容を解説し、再度読ませることで、内容に関する知識があれば英語論文もまあまあ読めるということが実感できるよう工夫した。
遺伝学Ⅱ	後期月曜 1 限	松岡由浩	パワーポイントを用いて授業内容を視覚的に理解できるようにしている。説明の合間に十分な時間をとり、かつ頻繁に質問を發して内容のポイントを理解しながらノート作成できるようにするとともに、問題演習を実施して内容の理解を助ける工夫をしている。
環境分析学	後期水曜 1 限	水口亜樹 (吉岡教授 と 分担)	本年度初めて担当した。生態系に放出される物質や生物の生態リスクを定量的に測定する方法、その数値を元に評価、管理、対策する方法について最新の研究を紹介した。テーマごとに、関連する論文やWEB上のプレスリリース記事を示し、論文や記事の検索方法も含めて紹介した。講義中に提示した話題の内、興味ある話題について掘り下げて調べてくること、その内容を問う試験問題にすることを宣言し、自分で調べ考える習慣が付くように促した。また、実際に生態リスク研究に取り組んでいる現役の研究者を招集し話題提供してもらうことで、学生の記憶に残るよう工夫した。
環境生物学実験	後期7回	塩野 克宏、吉岡俊人、水口 亜樹 (加藤先生 と 分担)	環境因子に対する植物の応答を解析するための実験の習熟を目指し、実験原理に重点を置いた指導をした。実験の待ち時間を利用して、初回に配布する手順書だけでなく原理説明のために資料を使い説明した。前年度、試薬調整のためのモル濃度を計算できない学生が目立ったので、全員の理解を図るために全問正解でないと合格できない小テストを待ち時間に実施し、合格できなかった学生にはその度にTAによる個別指導をしてフォローした(最終的に全員が合格)。待ち時間が長い実験が多くあったが、効率的に実験を進めるために、説明を受ける班と実験をする班に分けた。その際、主担当者が説明をしている間にその他の担当者が実験手順を説明するというように役割分担をして効率的に指導した。また、学生の実験中の集中力を保つために、待ち時間にはレポートの準備を進めるようレポートを事前配布し、待ち時間にレポートを進めさせた。
植物資源学実験	通年月-木曜 3-4 限	水口亜樹 (吉岡教授、塩野助教と分担)	本年度から主として計画、準備、レジメ作成、実験の説明、解説を担当した。昨年度までのレジメを参考にしながら、A4用紙1枚に1つの実験の目的、方法、結果のまとめ方(=レポートのまとめ方)を簡潔に記載し、それを読むだけで学生が実験内容を理解して実施できるよう工夫した。また実験開始前に必ず今日やる部分を全員が黙って読む時間を設け、その上でポイントを解説することで、学生が何もわからずに手だけ動かすことが無いように心がけた。また、班ごとに実験条件を考えさせ、多数の反復を設けることで、班内でコミュニケーションをとり、協力しながら進めるよう促した。
植物資源学演習	通年月-木曜 3-4 限	水口亜樹 (吉岡教授、塩野助教と分担)	植物資源学実験で結果が得られた班から順に、演習の課題となる解析方法を解説した。5-10人の少人数に対して解説することで、各自の顔を見て理解度を確認しながら話を進めることができた。学生も気軽に質問してくれ、難しい数式に対しても理解しようと努力している様子が伺えた。また班長をあえて決めなかったことで、データ収集や解析を人任せにするのではなく、各々が自分で動いて、考え、まとめたことが見て取れるレポートが多く提出された。
環境生物学実験	通年月-木曜 3-4 限	水口亜樹 (吉岡教授、塩野助教と分担)	塩野助教が主として行った。実験待ち時間が多かったため、積極的な学生には対照用のサンプルの操作を最初から最後まで任せたり、消極的な学生には実験の内容で私自身が疑問に思ったことについて相談を持ちかけたりするなど、やる気を継続させる工夫を行った。

・授業を担当しての感想など

生体高分子化学	前期火曜 1 限	黒川洋一 (日 井教授と分担)	選択の講義であり、真面目に受講する者が多いと感じた。この講義では、蛋白質などの高分子がどのように形作られて、維持されているか等を「化学」の視点で理解することを目指しているの、説明力が不足していると思われる者に対しては、ぶつ切りの断片化された知識を暗記するのではなく、一定の法則に従い、論理的に考える姿勢を身につけて欲しいと考えている。
生物物理化学 I	前期火曜 1 限	平 修	2 年生の選択科目である。大半の学生がまじめに講義を受けていた。数式の説明は興味を示さない学生が多いように見受けられたが、その意味、応用例について生物学寄りに紹介すると興味を持って聞いているようだった。
分析化学	前期火曜 1 限	植松宏平	学生の講義に対する興味をいかに引き出すかが課題と感じている。
化学 II	後期火曜 1 限	黒川洋一	身近な話題と化合物の関係や歴史を取り上げることで、学生の関心を高めたようであり、アンケート等では好意的な反応が見られることは教えがよいを感じる。その一方で、小テスト等で芳しい成績を取れない者には、遅刻や欠席が多い、あるいは、出席していても講義に関心を持たず、集中していないなど学習態度が好ましくないことが多いと感じている。何事にも関心を持ち、思考および表現するトレーニングを積み重ねる機会として、講義に出席して欲しい。
生物物理化学 2	後期火曜 2 限	伊藤貴文 (日 井教授と分担)	生物物理化学は教科書との相性が個人で異なり、難易度も高いが、学び続けられれば生命現象を説明するのに重要であることに気づき、楽しい内容である。そのため、学生に辛くならないよう、嫌にならないように気をつけている。物理化学的な説明を日常的なこと、例えば、お菓子を食ふことやゲームに置きかえることができないか考えている。
応用微生物学 II	前期火曜日 2 限	宇多川隆	応用微生物学 II においては、発酵で生産される生理活性物質の構造が頻繁に登場するが、構造式を苦手とする学生が多いように思われます。基本的な構造は理解するように努力してほしいと思います。例年の事であるが、質問がほとんど出ないのは、講義して物足りなさを感じます。
一般微生物学	前期木曜 1 限	木元 久	学生達は、指先や頭髮に予想以上の微生物が付着していることを知り、より身近な生物として関心を高めたようである。
栄養化学	前期木曜 1 限	高橋正和	ヒトの生化学を中心に据えており、代謝は難しいとの声は多い。しかし、栄養素代謝はビタミンの役割を教えるためにも欠かすことのできない、栄養化学の核となる内容。もう少し映像を増やす工夫をしてもよいと考えている。なお、プリントはよく待っていてうれしい、という声もやはり多い。
食品生化学実験	前期 8 回 (前半 8 回分)	高橋正和、 川畑球一	生き生きと実験している学生の姿が印象的だった。面白いと思ってくれていることは担当教員としては最もうれしいことだと思う。
食品化学	後期火曜 2 限	高橋正和	小テストと同じ問題を中間試験で出しても誤答する学生もいるが、勉強不足を理由に挙げる例が多く、授業改善を求められてはいない。アミノ酸の構造を覚える事が苦手な学生がいるようだ。プリントがよくまとまっていて好評のようなので、大きな変更を迫られないまま今に至っている。
植物病理学	前期月曜 2 限	加藤久晴	本年度より月曜 2 限へと変更になったが、月曜 1 限は必修の科学英語 I であり、そのためか例年より履修者が 10 名ほど増加した。しかし、科学英語にエネルギーを費やしてしまい、植物病理学の講義には集中できていない様子が感じられ、授業評価アンケートの結果にも「内容が難しかった」という意見が多かった。難解さをやわらげるべく、何らかの工夫をしなければならないと考えている。
生物学 I	前期金曜 2 限	加藤久晴	最初は教科書の内容を補足する形で進めていたところ、真面目に聞いているがイマイチつまらなそうであった。途中からは最新の話題等を多く取り入れるように変更したところ、学生の表情が変わったように感じられた。今後も、学生の意欲を高められるようもっと工夫しなければならないと感じた。

園芸植物資源学	後期水曜日 1 限	林 潤	1 限目なので遅刻者が多く出ることが予想されたので、初回授業時にミニレポートの点数と 2 回の本テストを合算して評価することを強調した（シラバスにもその旨記述あり）。にもかかわらず、遅刻者が続出していることへの対策を考慮中。
分子育種学	後期木曜日 2 限	三浦孝太郎	選択科目であるが、意外と受講者数が多かった。受講者数が多い割に私語や遅刻をする学生が少なく、まじめに取り組んでいる学生が多いと感じている。中間テストの得点も比較的高く、講義内容を理解している学生が多いと感じている。
環境生物学実験	後期 8 回	加藤久晴（塩野先生、吉岡先生、水口先生と分担）	本年度、前期の授業科目である植物病理学に対する授業アンケートの評価は大変悪いものであったが、実験に関しては興味を持って取り組んでいたように感じられた。しかし、テキストを予習している学生は少なく、一刻も早く終わらせて帰りたいという学生が例年以上に多いようであった。
遺伝学 I	前期水曜日 2 限	村井耕二	熱く授業をおこなうと、学生は興味深く聞いてくれる。板書を書き写すのが忙しそうに思える。もっと早くメモをとるように訓練すべき。PowerPoint の授業にすると、書き写すことをせず、かえって教育効果は低くなると思う。
環境生物学	前期木曜日 2 限	吉岡俊人	ノートとりの重要性を伝えるようにしているが、板書したものを写しとるだけの学生が多い。今年度、板書せずに、パワーポイント投影だけで講義した授業回を設けたが、そのときはほとんどの学生の手が止まったままであった。
生物資源学特別講義 I	前期金曜日 1 限	村井耕二	熱く授業をおこなうと、学生は興味深く聞いてくれる。なかなか、授業中に発言するのは難しいようだ。なんとか、海外の大学の授業のように、対話形式の授業ができないか、模索中である。でも、大学院でもこれは難しいので、学部での授業では無理かと思う。
植物栄養学	前期金曜日 2 限	塩野克宏	小テストを実施したのが良かったと思う。講義開始からの数回の様子を見てみると前年度に比べて理解が低下していることが分かった。講義期間中に講義方法などを修正した結果、小テストの結果も良くなった。数回分の講義内容に関連する身近な内容について出題し、班単位でプレゼンテーションをしてもらった。学生達も昨年度同様によく自主学習をし、講義内容を上手に身近な例と関連づけて説明できていた。プレゼンテーションに不安はあったようであるが、総じて発表を楽しんでいたようである。次々と質問があり質疑も白熱した。想像していたよりも期末テストの平均点が低く、問題文をよく理解していない、またポイントをつかみ損ねている学生が多かったように思う。小テストでも期末テストで行っているような記述式の問題を取り入れ、説明をすることでこの課題には対応してみたいと考えている。
科学英語 II	後期月曜日 1 限	水口亜樹（吉岡教授と分担）	英文和訳を文章で書く時間に、単語を調べるのみで文章にせず、解答を待つ学生が多かった。わからなくてもとにかく文章にすれば、どこがわからないかぐらいはわかるので、頑張って文章を書く習慣をつけるよう促したい。
遺伝学 II	後期月曜日 1 限	松岡由浩	居眠りする学生が非常に少なく、講義に真剣に取り組む姿勢ができていると感じた。
環境分析学	後期水曜日 1 限	水口亜樹（吉岡教授と分担）	スライドの解説の時間が長引くとウトウトする学生が増えるので、板書や動画を組み込みながら話を組み立てるよう模索中である。また来年度は関連する研究者をもっと招集して、学生の刺激になるよう工夫したい。
環境生物学実験	後期 7 回	塩野克宏、吉岡俊人、水口亜樹（加藤先生と分担）	前年度、待ち時間が長く集中できない学生が多くみられたが、今年度、なにもしなくて良い待ち時間を作らずに小テストやレポートの推進をさせた結果、実験時間中に集中力を失う学生が減少した印象がある。また、プロトコルの見直しを図り、前年度に比べて待ち時間を短縮できた効果があったのだと感じた。一つの操作に時間がかかるものが多く、分析サンプルを限定しなければならぬため、1 人 1 人が実験操作を体験できていない。少しでも、多くの人が実験を体験できるよう工夫が必要であると感じた。

植物資源学実験	通年月-木曜 3-4限	水口亜樹 (吉岡教授、塩野助教と分担)	ミスしやすい部分を説明し忘れた際、やはりミスする学生がたくさんいた。一部の学生はレジメをよく読んでおり、ミスしていなかったが、他の班員がミスしていたためデータが不揃いになったと残念がっていた。来年度はSAの学生とも事前によく相談し、ミスしやすい箇所を再抽出して、実験前にきちんと説明しようと思う。
植物資源学演習	通年月-木曜 3-4限	水口亜樹 (吉岡教授、塩野助教と分担)	少人数を相手に丁寧に説明すれば、難しい数式でも理解してくれるようなので、来年度からは平均値と標準偏差だけではなく、t検定や分散分析等をレポートに必要な解析として取り入れたいと思う。
環境生物学実験	通年月-木曜 3-4限	水口亜樹 (吉岡教授、塩野助教と分担)	待ち時間が多いため、その間の演習を増やすなど工夫したい。

・学生の理解度を把握するための試み

授業科目名			ミニッツペーパー、小テスト、独自のアンケート、LMS 等によるやり取りなど
生体高分子化学	前期火曜 1 限	黒川洋一 (日井教授と分担)	ミニッツペーパーを二回実施し、考えを表現したり説明したりする能力を確認した。文章力の改善につながるように添削した上で返却した。また、高度な専門的内容に対しても、意欲的に学ぶ姿勢が感じられた。
生物物理化学 I	前期火曜 1 限	平 修	直接、理解度を聴取した。
分析化学	前期火曜 1 限	植松宏平	学生実験指導時に、学生から講義の印象や講義内容の理解度などの情報収集を行っている。
化学 II	後期火曜 1 限	黒川洋一	初回にアンケートを実施し、高校での化学の履修状況や苦手意識を確認した上で、基礎的な項目を押さえながら、専門的な内容までを学ぶことを説明している。この数年、意欲的に学ぼうとする者の割合が向上しているが、導入部での意識付け効果にもよるのかも知れない。また、課題調査として、アスコルビン酸のような身近な化合物の利用や歴史を取り上げることにも好意的な反応が寄せられた。講義中に当てられて答えるのが苦手とする意見も少しはあったが、理解度を確認したり、考えを表現する良い機会だと思われるので、今後も続けたい。
生物物理化学 2	後期火曜 2 限	伊藤貴文 (日井教授と分担)	授業を簡単な演習とともに進め、理解度をみている。
栄養化学	前期木曜 1 限	高橋正和	理解度確認のため、期末試験以外に小テストと中間試験を実施している。さらに中間試験時にアンケートを実施している。授業形式の変更も尋ねているが、現行のままを希望する率が最も高い。
食品化学	後期火曜 2 限	高橋正和	理解・修得度を確認するため、期末試験のほかに 3 回の小テストと中間試験を実施している。さらに中間試験時にアンケートを実施している。試験ができなかった理由には、勉強不足を挙げている例が多く、授業改善を求める声はなかった。
植物病理学	前期月曜 2 限	加藤久晴	小テストに質問・意見欄を設け、小テストの解説の後に答えるようにした。
分子生物学	前期木曜 2 限	石川敦司	ミニッツペーパー
生物学 I	前期金曜 2 限	加藤久晴	生物を勉強してこなかった学生がかなりおり、講義後不安を訴えてくることが多かった。そのような学生に対しては、小テストの返却時を利用して意見等を聞くようにした。
分子育種学	後期木曜 2 限	三浦孝太郎	中間テストなど
生化学 I I	後期金曜 2 限	石川敦司	ミニッツペーパー

環境生物学実験	後期8回	加藤久晴 (塩野先生、吉岡先生、水口先生と分担)	実験の待ち時間を利用して、できるだけ学生と会話するよう心がけた。レポートには、講義に関する感想や意見を記述してもらう欄を設けた。
遺伝学 I	前期水曜日 2限	村井耕二	ミニッツペーパーで毎回、感想や質問を受け付けている。授業中に近くまで行って、対話するようにしている。
生物資源学特別講義 I	前期金曜日 1限	村井耕二	討論形式を取り入れたいと考えている。が、なかなか積極的な意見がでないのが現状である。
植物栄養学	前期金曜 2 限	塩野克宏	小テストにコメント欄を設けて毎回、意見をやりとりした。また、中間試験、プレゼンテーション、期末試験の方向性なども一緒に相談して決める方式をとった。14 回目の講義の終わりには忌憚のない意見が言えるよう無記名でのコメントをしてもらった。意見の一例としては昨年同様に「板書を書き終えるのを待ってくれるのがよい（書き取りの速度が違うので遅い人に合わせるようにし、板書を終えてから説明をするように心がけていた。）」というものが見られた。
科学英語 II	後期月曜 1 限	水口亜樹 (吉岡教授 と 分担)	和訳する時間に学生の間を回り、どのくらい書いているかを観察し、あまり書けていない学生には声をかけるようにしているが、ただ「難しいっす」と最初から諦めていることが多かった。また「スライドに映した解答の文字が見にくいので、大きくして欲しい」との要望があったが、スライドの縦横比の関係であまり大きくできなかったため、見にくい人は前の席に移動するよう声をかけることにした。
遺伝学 II	後期月曜 1 限	松岡由浩	授業中に頻繁に内容が理解できているかを直接質問し、確認しながら説明を進めるようにしている。
環境分析学	後期水曜 1 限	水口亜樹 (吉岡教授 と 分担)	3 年生後期の選択科目のため、初回に「なぜこの講義を受講したのか？」を聞いた。多くは単位が足りないという理由だったが、一部、農業について学びたかったのと言ってくれた学生がいた。そのため、講義のテーマに則してできるだけ農業の話題を多く盛り込むように心がけた。
環境生物学実験	後期 7 回	塩野克宏、 吉岡俊人、 水口亜樹 (加藤先生と分担)	アンケートなどは実施していないが、実験の合間などに学生との意見交換を心がけた。
植物資源学実験	通年月－木 曜 3-4 限	水口亜樹 (吉岡教授、塩野助教と分担)	植生調査、樹木の葉の採取、温室での播種作業等で野外に出ることが多く、その都度、学生と意見交換を行った。外に出るのが好きな学生は積極的に質問に来て理解を深めようとするが、そうでない学生はただ作業をこなすだけといった印象だった。
植物資源学演習	通年月－木 曜 3-4 限	水口亜樹 (吉岡教授、塩野助教と分担)	実験の中で演習を行っているので、レジメの指示がわかりにくい場合は、実験の空き時間に気軽に指摘してくれる学生がおり、助かった。
環境生物学実験	通年月－木 曜 3-4 限	水口亜樹 (吉岡教授、塩野助教と分担)	教員によって指示が異なる場合があつて困るという指摘があつた。どちらの指示も間違いではない場合（＝どちらでもよい場合）は、その旨を説明し、実験の原理を理解して判断すればいいと伝えた。しかし危険な試薬を使う場面もあるため、来年度は事前の打ち合わせを念入りにし、指示の食い違いがないよう気をつけたい。

2.2.4 授業改善についての課題と展望

本年度、生物資源学部では、FD 活動の課題を探るため、各教員が本学 FD 活動の現状をどのように考えているかを把握することを目的としたアンケート調査を実施した。

アンケート項目は、次のようであった。

1. 授業評価について

(1) 現在の実施方法について、実施にあたっての問題点や、それに対応するために工夫されている点があればお聞かせ下さい（〔例〕マンネリ化を防ぐために自由記述欄を書く時間を与える、など。）

(2) 授業評価結果をふまえて、どのようなFD活動を行っていくのが望ましいとお考えですか？（〔例〕学年ごとの詳細な処理をすべき、低下している項目について定期的に懇談会を開き対応すべき、など）

(3) その他、要望

2. 授業公開について

(1) 実施方法についてお考えをお聞かせ下さい（〔例〕半強制的にも参加日を設けるべき、授業についての懇談会を行うべき、現在の実施方法で問題無し、など）

(2) その他、要望（〔例〕他大学に授業参観することや、授業公開よりもFD研修を充実すべき、など）

3. 生物資源学部で行っている「授業改善のための工夫」についてのアンケート調査について

(1) 全般的なこと（〔例〕授業改善の参考にできて良い、など）

(2) その他、要望

4. FD研修についての要望（〔例〕合宿は重たいので大学で簡単なセミナーを開催していただきたい、eラーニングによる講習が良いのでは、など。）

アンケート用紙は、1月15日に教育学習支援チーム員から配布され、回収・集計を経て、1月27日に結果が全教員に通知された。アンケートへの回答は任意かつ無記名とし、率直な意見の収集に努めた。

アンケート調査では、現在FD活動の一環として本学で実施されている「授業評価」、「FD研修」のいずれについても、否定的意見と肯定的意見が寄せられた。この結果から、これらの活動の現状について、生物資源学部の教員が多様な意見・感想をもっていることが窺える。このため、本学のFD活動を発展させるためには、社会的要請を精査するとともに、教員のニーズ・要望を十分に把握した上で、教員の自主的な取り組みをいかに効果的に支援できるかが鍵となろう。

「授業公開」については、現在の方式（随時公開制）を支持する意見がほとんどであった。特に、新任教員が前任者から講義を引き継ぐ際に役立つとする回答が複数あった。これは、本学部において、随時公開制が有効に機能していることを示すものと考えられる。

また、生物資源学部独自に行っている「授業改善のための工夫」アンケート調査については、実質的に全ての寄せられた意見が肯定的であった。従って、この活動は、生物資源学部での授業改善において、一定の役割を果たしているものと評価し得る。

アンケート結果を以下に記す。

1. 授業評価について

(1) 現在の実施方法について、実施にあたっての問題点や、それに対応するために工夫されている点があればお聞かせ下さい（〔例〕マンネリ化を防ぐために自由記述欄を書く時間を与えるなど。）
意見欄だけで良いと思います。教員が回収することによって、質問や、意見に対する回答など、直ぐにできるので、学生にとっても良いのではないかと思います。出てくる数字の意味がよくわかりませんので、マークシートは不要かと思います。
収集を学生に任せているが、回収がきちんとなされているか疑問に思う時があります。
何をしても、数年たてば、マンネリ化するので、現行の形式で、情報を蓄積すればよい。
最近あまり意見が多くないので評価に関連づけての工夫というのはいない。
それぞれの項目で自由記述欄をもうける。
現在の方法で良いと思います。

授業評価アンケートの目的は何でしょうか？授業の実質的改善でしょうか？教員評価なのでしょうか？ 現行実施体制がその目的にたてられて実効性が高い状態か、改めて考えてみてはいかがでしょうか？ (1) アンケート結果から出す平均点は教員の通信簿的発想で、授業改善に具体的かつ直接的に役立つ情報にはなりません。 (2) また結果が分かるのは授業がすべて終わった後のため、声を上げた学生へのリターンはできず、翌年の学生への改善にしかつながりません。 これらの問題点に取組まない／実質的に無理なら、授業評価アンケート自体は現行のままとし、他の試みで補えばよいと思います。 個人的には、7年前から授業期間途中で（中間試験の際に）理解度などについて無記名アンケートを実施し、その声を後半の授業に反映しようという試みを続けています。「小テストと同じ問題を中間試験で出しても間違えの原因は、なぜ？」との質問には、「自分の努力不足」、という答えが最多。授業改善を提案された事は少なく、「今のままがよい」との返事が大半の学生から返ってきます。また印象に残った内容を尋ねると、体験学習的な試みを行った時の内容を答える学生が圧倒的。また成績については二極化が大きく、勉強する学生としない学生で習得度に大きな差があります。授業内容を必要最小限に絞ったり、考えさせる内容に変え、授業が終わっても印象に残っていて忘れない工夫をもっと取入れるべきか、と毎年悩んでいます。
講義における工夫に関する設問に対して、一部の者による評価は記述されているが、全体については分からない。そこで、これらの工夫に関心を高めたかどうかを四段階の選択式で答えさせ、あるいは感想を自由記述で書かせた。授業評価の結果、講義態度が真面目でないとと思われる学生には、建設的ではない、単にネガティブな評価を書く者が多い印象を持っているが、この問題に対する工夫は特に思いつかない。
全学的に同時期に行っているので、マンネリ化は仕方ないと考えている。他に独自に学生にアンケートを取ったり、懇談の場を設けている。
現状のやり方で、自分の講義を数値としてフィードバックできるので、授業の改善に大変役立っております。
点数という客観的な指標で講義を評価し、振り返ることができるので有難いと感じている。
(2)授業評価結果をふまえて、どのようなFD活動を行っていくのが望ましいとお考えですか？（[例]学年ごとの詳細な処理をすべき、低下している項目について定期的に懇談会を開き対応すべき、など）
極端に理解度が悪い、あまりに苦情が多い講義に関してだけ、関係者の事実確認をすればよいと考えます。平均値以上の場合は、特段、ナーバスになる必要を感じません。
教員間でのオープンな話し合い。
あまり分析的にならないのがよいと思う。
人気のない授業をどのように活性化するかという問題は、各教員・各授業内容に依存しており、全学一律な改善手法はないと思います。特に専門分野ごとに取り得る授業工夫には違いがあります。また、FD活性化の議論は数年前から進んでいないように思いますが、委員会が特に問題視されている点、あるいは科目（特定の科目名をあげて明確化して戴くべき）があれば、どんどん指摘・公開して学部で議論を降ろして戴くのが速い問題解決につながると思います。
懇談会では顔を合わせられるため、他部局の教員とのコミュニケーションをその後も円滑に持つことができる点が最大のメリットです。 一方、他部局の学生の様子を伺ったり、他部局の教員の意見を知るだけ、つまり単純な情報交換だけなら、教員にアンケートして授業工夫のアンケート事例集を作れば十分です。 なお、「(成績を) 学年ごとに詳細に（統計）処理すること」は、語学以外には効果がないと感じます。同一科目でも試験内容が毎年変化していれば比較が難しいためです。
データは、現状を知る手段にはなるが、それだけでは十分でないと思う。現状の課題などを共有し、可能な工夫や対策を考えるために、教員による懇談会は定期的に開催するのがいいと思う（少なくとも年一回以上）。
著しく下がっている傾向にある項目に関しては対応をしなければいけないが、現状、対応が必要とは思っていない。生物資源学部を卒業するとどういった社会人になるのかを学生が意識できるようにしていけば点数も上がるのではと思う。
これまで通り、学内メールでよいので、意見・情報交換等を行うのがよいかと存じます。
分析も大事だと思うが、少人数であるため有意な傾向が出にくいように思う。教員同士での学生、学年の傾向などについての情報交換が有用ではないか。

(3) その他、要望
意見欄を充実する事によって得られる学生のコメントを参考に、教員として授業内容や方法について修正していくことがよいと思います。
授業評価=FD となりがちなのが問題。授業評価は、学生に物申す権利があることを周知させるためにあることが大切。授業改善が主目的と考えるからおかしくなる。教育の改善は、まず環境整備を中心に議論した方が分かり易く、実効性が高いのではないかと。
学生が求めているものは何でしょう？自分自身の体験から、学生が授業を面白いと感じることは、勉強意欲を刺激するうえで確かに効果的／必要ですが、面白いと感じても全員が授業内容を修得出来ているとは限りません（比列しません）。大半の学生が理想とするところは、「面白い」、かつ、「苦勞することなく、speedy に、いつの間にか覚えていて、単位が楽に取れる」。その要望に出来るだけ応えるために、映像の利用・配布物の工夫・授業内容の削減簡素化など、色々行ってきましたが、output に資格試験が存在しない生物資源学部では、何をやっても授業内容は試験が終わったら／単位が取れたら忘れ去られる運命にあり、特に近年その傾向が強くなっています。 こんな場面も何度もありました。○4年生／大学院生：「ネット情報でこんな記述を見つけました」○教員：「それは○○の授業で教わった／教えたはずでは？」。各授業の必要性を問われかねない現象ですが、現行の授業評価では解決不可能。 学生の長期記憶に残るのは、「すぐに、あるいは将来確実に必要な内容である内容」と、「自分で苦勞して達成した内容」。そのためには、1) 4年生以上で必要である事をしっかりと、刷り込む。（ただし授業内容は偏る）2) 体験型学習で、自分で調べる努力を払って達成した経験をさせる。といった工夫が必要か？と自問しています。学ぶ意欲が低い学生がいる現状は、従来のFD活動だけでは解決し得ないと思う。講義中に学生に質問して答えさせることを含め、個人あるいはチームで調べたことを発表させるなど、学生の受動的な態度を改め、彼らの意識を変えるよう働きかけていくことを、全学的にも議論してはどうか。
学生の意識を上げるための工夫を反映しながら、カリキュラムを検討する必要があると思う。しかし、学生の意欲や関心や理解度の項目により、個々の授業の内容が左右されるものではないと考えている。
講義で学せることを「表面的なものではなく、生きた・使える知識」とするために、理解が難しい、もしくは多くの学生が不得意とするテーマを採り上げねばならない場合が、多々あるかと思っています。しかし理解・習得が困難なテーマを採り上げればあげるほど、学生の理解度・関心・興味等がさがる「リスク」も上がることは、よくあることではないかと思っています。故に授業評価結果を重視しすぎること（評価結果の公開等も含めて）、授業内容がスポイルされる（理解が難しい内容は省く）→学生の学習能力や学習到達度を低下させる等の影響が出ないか懸念しています。
自身の講義の振り返りと学生の変化の把握には各教員のスコアの経年変化を分析すること（前年度、前前年度との比較）が効果的であるように思う。アンケート結果の通知の際に、以前の結果との比較が簡単にできるよう、自分の5年間分のデータなどをつけていただくと振り返りがし易いのではないかと思います（私自身は自分で過去のアンケート通知を管理しており、照らし合わせている。）。

2. 授業公開について

(1) 実施方法についてお考えをお聞かせ下さい（[例]半強制的にも参加日を設けるべき、授業についての懇談会を行うべき、現在の実施方法で問題無し、など）
赴任した直後は、大学の授業とはどんなものかを知る上で、良い点も、悪い点も参考になりました。良い点を真似し、悪いと思った点は、自分ならこうすると、自分なりの改善法を考える事も良いのではないかと思います。それを、当該教員に伝えるのは勇気がいりますが。
原則、「誰でも、いつでも、聞きに行ってもよい（公開性の担保）」とすべきと思いますが、参加者は強制すべきではない（教員の自発的興味にゆだねる）と考えます。
これで授業が改善できるのはほんの一部であり、いろいろな方法を組み合わせていくことが大切。例えばだが、授業に自信がある先生方の講義や大学の特徴を出せるような講義をインターネットを通じて外部に授業を公開するというようなことをしてもいいのでは。
授業公開の必要性は疑問。
現在の方法で良いと思います。
公開自体が不要。特に、授業が下手な教員の授業を公開して戴いても聞きたいとは思いません。 そんなに下手な教員をなぜ講師以上に採用しているのでしょうか？ 本当にそんな教員が存在しているのでしょうか？ 具体的な根拠があれば、学部長からの積極的な指導を行い、その効果もなく実害が生じているなら、降格するべきではないでしょうか？
他の教員の授業も聞いてみたいのが、どのような方法が良いのかよく分からない。半期に二回ほど公開週を作るくらい、ゆるい物が良いのでは。

前任者から授業を引き継ぐ際には、参観は有効と思う。全面公開としているので、自分の授業の改善のために必要性があれば参観する現状のスタイルで問題無いと考えている。
特に必要ないと感じています。
個人的には授業公開は強制するものであったり、懇談会をひらくというやり方では負担の割には効果が出にくいように思う。定期的に講義や研究内容の近い教員同士が意見を交換できるような時間を5-6人の小規模なグループで設けることを義務付けるといようなものはどうか？具体的には各教員に学生アンケート結果が届く時期に合わせて、前期後期に一度ずつ同じ研究領域内の教員同士での意見交換会を開くというイメージである(30-60分程度)。

3. 生物資源学部で行っている「授業改善のための工夫」についてのアンケート調査について

(1) 全般的なこと（[例]授業改善の参考にできて良い、など）
他の先生の工夫を知ることが出来て大変参考になります。
これは、大変参考になります。この情報を蓄積して、いつでも、だれでも、閲覧できるように、資料収集をして欲しい。
最近の学生には、考える前に、まず行動に移させることが意識を高めるために必要と考えている。例えば、生物生産実習では、「今の授業や自分との関わりの接点を見つけるように」というテーマを与えて見学させたところ、終了後の質問などでは、どうやったらこの会社に就職できますか、どんなことを勉強すべきですか、など具体的な質問が出るようになり、それに対しての答えには高い関心が見られた。そうした意味で演習の量を少しずつ増やしている。
板書の充実。パワーポイントでは、学生の頭に入らない。
これが一番効果があると思います。
非常に参考になっています。 これだけでFD活動の半分以上は達成できています。
現状の問題点、他の先生方の工夫を知り、参考になるので良い。
学生の集中力の持続など授業改善の参考にできて良い。
他の先生方の取り組み、またその効果を把握でき、大変役に立っております。
講義や学生実験での共通する課題は、多くの学生の集中力が続く時間が最大でも50分以下であるという点である。個人的には90分間継続しての一方向的座学形式の伝達法では大多数の学生の集中力が続かないと認識している。そこで、時間内にメリハリをつけている。具体的には、キーワードを板書する時間、座学形式で理解する時間、小テストや実際のサンプルを手にとって観察するなどを盛り込むよう工夫している。また、学生は板書をとりながら内容を理解することが難しい場合があるので、ほぼ全ての学生が板書を終えたのを確認してから説明するというように「板書を書き写す時間」と「説明の時間」を明確に分けている。学生からは話を聞くことに集中できると評価する声がある。
(2) その他、要望
FD委員会の現在の活動：FD活動として、1. 授業評価、2. 授業公開、3. 授業改善のための工夫の収集、4. FD研修を実施。 そもそも論ですが、FacultyをDevelopするためには、上記以外に、上記以前に、やるべきことが多々あると考えます。 例えば、1年次生の大部分が自立できていないとすれば、卒業時に自立できる方向で、4年間のプログラムに、どのような仕掛け、仕組みを工夫するか？ 「きちんと教え込む講義」と、「答えのない問題に、それなりの道筋をつける訓練」を、どのようにすみ分けさせるか？ 教員が汗をかきすぎていて（準備のしすぎ、教え込む量の過剰）、学生が受け身一辺倒でないか？ もっと学生が汗をかく手だてを考えると？ 2学期制度（前期後期）を4学期制度（3か月単位）に変更して、余裕のある3か月をひねり出せば、おもしろい企画が可能ではないか？ このようなことを、委員会で議論して、方向づけすることを、希望します。 あくまでFDの目標は、社会で活躍する学生を輩出するために、やれる範囲で、すべきことをする点にあります。現在、行っている1から4は、コンスタントに情報を集めることで十分で、1から4を掘り下げる必要は、全く感じておりません。 毎年、積み重ねていくことが大切だと思います。

全学の動きとは関係なく、学部独自で毎年行うのが良いと思う。

4. FD 研修についての要望([例] 合宿は重たいので大学で簡単なセミナーを開催していただきたい、e-ラーニングによる講習が良いのでは、など。)

とにかく教員は、自分の授業が一番と思いがちなので、新しい授業ツールの紹介などの研修があってもよいのではないかと思います。ただし、ツール屋が商売の為に実施するのではなく、いいツールに巡り合った教員による研修が参考になると思います。

必要を感じません。

研修をやるなら、テレビでの公開授業をやるぐらいの力量のある講師の方を招致してほしい。

宴会付きの合宿も悪くない。

気軽に参加できるセミナーがよいのでは。

研修会や合宿はほぼ無意味です。部局が異なると、在籍している学生の性格や考え方・資質はずいぶん異なります。また専門が違えば教え方が異なるのも普通なことです。

セミナーは内容次第では FD に役立つかもしれませんが、専門分野によってセミナーの講師を変えた方が間違いなく効果的ですし、「教え方セミナー」よりも講演上手な研究者の講演を聞く方がよほど勉強になります。

E-ラーニングは使いこなせる方だけの講習会にした方が効率的です。

学内のセミナーを希望する。

改善方法に関する教科書の紹介や、e-ラーニングによる授業のやり方講習など、参考になるかも知れないと感じたら気軽に参加できる方法が良いと思う。

現状を少し改善する目的であれば、大学で簡単なセミナーを実施して頂くのが良いように思う。ただし、他大学との差別化や教育に力を入れているということを大学の「売り」として発信していくのであれば、全教員が FD 研修を受けるということを戦略的に実施することは意味があるように思う。

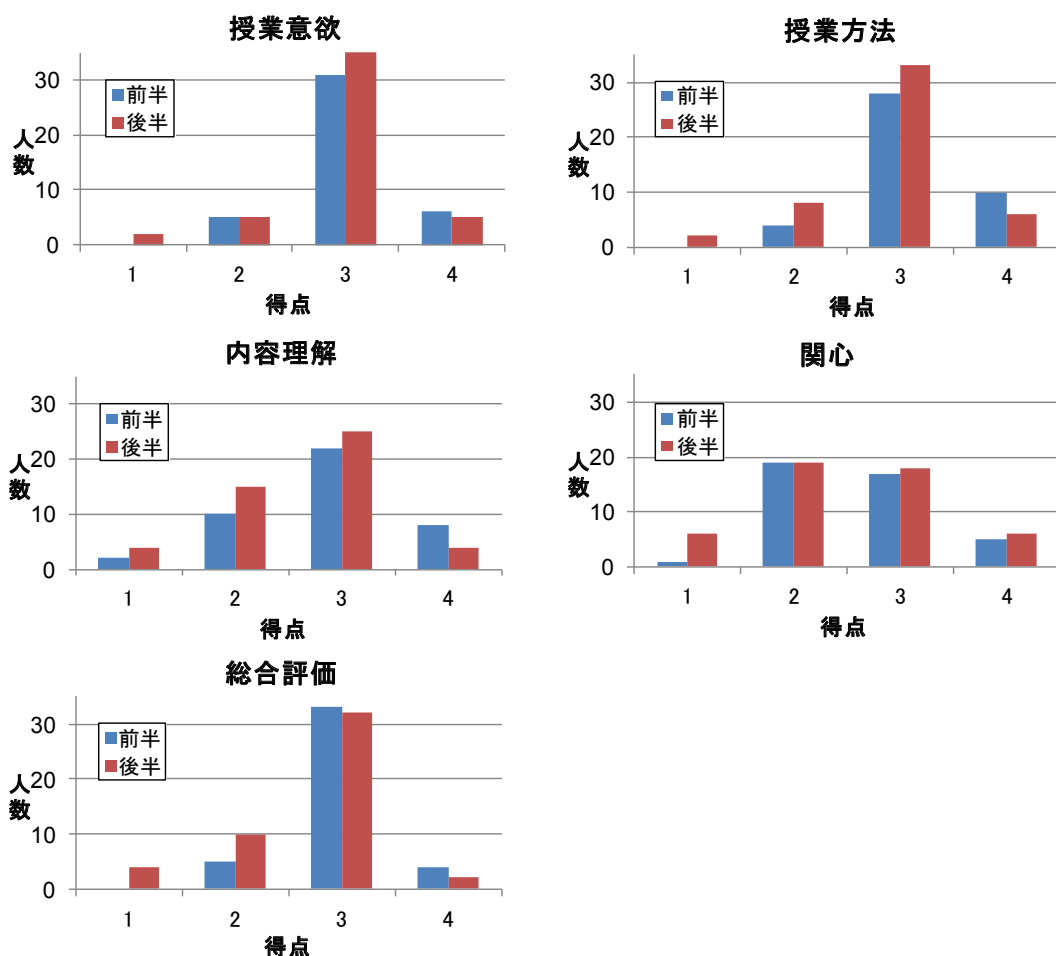
2.3 海洋生物資源学部（富永修、松川雅仁）

2.3.1 授業評価について

アンケート結果に対して、多くの教員が真摯にコメントを加えていた。コメントがない教員もいたが、できる限り対応するようにこころがける必要がある。昨年度と今年の評価結果を比較すると、前期では、授業方法と総合評価で点数が上昇し、それ以外の項目は同等の点数を維持していた。昨年度、課題となった後期の評点に関しては、大幅な上昇が認められた。特に、内容理解は 0.2 ポイント上昇し、総合評価も 0.1 ポイント以上高くなった。各教員の継続的な授業改善の努力によるところが大きいと考えられるが、対象となる母集団の学生が異なっていることから、今後継続して検証する必要がある。

独自の授業評価アンケート結果（47 ページ） 前半は 11 月末までの 7 回分、後半はその後の 8 回分の講義に関するアンケート。前半は 42 名分、後半は 48 名分。1 点が低い評価、4 点が高い評価。

昨年度の FD 報告書でとりあげた授業評価の低下に対する対応策として、新入学生のカリキュラムの改正を行い、特に評価が低い科目に対して、1) 科目名の変更、2) 内容の見直し、3) 担当者の複数化を実施した。さらに、対象講義の補習を実施することで、理解不足の学生をサポートする体制を構築した。本年度は、この対策に対する検証が必要であったが、オムニバス講義であったため授業評価を行わなかった。しかし、代替として独自にほぼ同じ内容のアンケートを実施したので、それらをまとめて報告する。独自のアンケートは記名式という点で通常のアンケートと異なり、講義の前半 7 回が終わった段階で 1 回目のアンケート、その後の 8 回の講義に対して 2 回目のアンケートが実施された。アンケートでは授業評価とともにコメントも記述を求めた。さらに、上記とは別に、1 名の教員が、1) 講義の感想、2) 改善してほしいところ、3) 導入部分が理解できたかどうか、4) 数学に対する好き嫌いや得意・苦手意識に関して設問したアンケートを実施した。以下は、主に独自アンケートに関する結果をまとめた。



総合評価は、前半に比べて後半が低下しているものの、ほとんどの学生が3点以上と高い評価をしていた。また、総合評価以外の項目をみると、授業意欲と授業方法に対する評価も高く、授業に対してある程度満足していることがわかる。しかしながら、内容理解と関心は2点以下の評価が多かった。特に関心については、約半数の学生が2点以下で1点という評価も多く見受けられた。本講義は数学をあつかっているため、学生が本来興味をもっている海洋の内容と大きく乖離していることが原因の一つと考えられる。上記のアンケートとは別に、数学に対する苦手意識を調べたところ、43名中20名の回答があった。これらの内15名が苦手あるいは嫌いであったことから、数学に対する忌避感も関心に対する評価と関連しているのかもしれない。

内容理解は点数のバラツキが大きく前半、後半ともに4点から1点の評価であった。学生のコメントでは、「ふつうに理解しやすい講義です」の一方で、「公式など教えてもらうのはいいが、例題などがなくどう使っているかわかりづらい。」や「僕たちが理解している前提で授業を進んでいくので、まったく理解できないし、例えばこの数式を入れるとこうなると言うだけで、なぜそうなるのかなども教えてくれないため、一切理解できなかった。補習に関しても授業するスピードが速すぎるし、問題を解き始めるとすぐに次の問題をやるので時間がない。僕たちがわかっている前提で話すので理解できないし補習の意味もないと思った。」など手厳しい意見もあった。また、「もっと練習問題を増やしてほしい」、「レジュメの解説が少なかった」など理解を深めるための建設的な意見もだされた。内容理解の評価が低いのは、学生の理解力不足だけでなく、学生の理解力に対する授業の対応がうまく機能していなかったことも原因としてあげられる。

今回の改善では、総合評価にみられるように、ある程度目的を達成したといえるが、学生コメント(他にもあり)にあるように改善すべき点も多い。今年度は2名の教員で分担したが、とくに後半は、全体的に

評価が低下していることから教員の補強も必要である。また、選定が遅くなったことが一因であったが、本講義の担当教員と補習教員の間で講義内容に関して、一度も協議する機会を持つことができなかった。来年度は、1) あらかじめ講義内容を担当教員間で協議し、難易度や授業方法などを相互に議論し改善を進める。

2) 補習教員と授業内容を調整し、本講義に対して理解が不足している学生を効果的にサポートできるようにする。3) 独自の授業評価の継続的实施、などを課題とする。

授業評価に対する学部からの意見

授業評価という名称を例えば「授業改善アンケート」に変更の方が目的が明瞭になる。

FD は基本的に授業方法や授業内容を評価することを目的としているのではなく、学生の理解を深めたり、関心を高めるための授業改善をめざしたものである。授業評価という名称を改めて、本来の目的が明瞭になるようにする必要がある。

来年度はオムニバスの講義に関してもできる限りアンケートを実施するが、質問内容を変える必要がある。例えば、オムニバスによる授業に対する学生の意見など。

2.3.2 授業公開の方針と実績

授業を公開することにより、ふだん発表者が気付かない改善を必要とする部分を抽出できるだけでなく、他教員の講義を参観することによって、講義の進行方法などを客観的に分析することができ、参観する教員の授業改善の手段としても役立てることができる。さらに、参加教員が講義に関して問題点や改善アイデアを議論し、それらを共有できる機会も提供できる。以上の点から、授業公開は講義の改善に有効なツールと考え、海洋生物資源学部で実施することにする。授業公開の方法に関しては、以下に示す回数・方法で進める。ただし、毎回議論を積み重ねて、授業公開の方法に関しては改善していくことが望ましい。

- ◆ 年1回だと参加できる機会が制限されるので前期・後期それぞれ1回（合計2回）実施する。継続性を考えると2回程度が適切。
- ◆ 授業参観のあとに意見交換会を行う（海洋では、60分講義、30分意見交換）。ただし、授業の内容に関してではなく、授業方法や進め方に関して議論する。

平成25年度の授業公開

本年度は平成24年度と同じく1回のみの授業公開となった。来年度からは、方針通り前期と後期に1回ずつ実施する。

公開科目名：食品保全学 担当：松川先生

公開日時：2013年11月29日（金）10：40～12：10

場所：M204 教室 講義（10：40～11：40）

講義後の意見交換会 小浜キャンパス1F会議室（11：40～12：10）

参加人数：15名（海洋生物資源学部の教員数24名）

以下、参加者の意見は以下の通り。

1) 工夫されている点、参考になる点

- ◆ ゆったりとした話し方は非常に参考になりました。ともすれば、自分のペースで早口で話してしまうことがあるので、注意したいと思いました。

- ◆ 実際の加工食品を手にとって見せながら、説明されていたので、学生は講義を身近に感じたのではないかと思います。
- ◆ 企業での経験をもとにした話は、松川先生ならではのものですが、学生の興味を引き付けるために大事なことだと思いました。
- ◆ 学生の顔を覚えている。
- ◆ 他の講義科目で使われるであろう専門・業界用語を分かり易い解説を簡潔に加えている。
- ◆ 身近な例、業界話を上手に含めている。
- ◆ 板書の量は、PPT（パワーポイント）スライドとのバランスがよい。
- ◆ 講義（教室）の空気・雰囲気作りが良い。
- ◆ 特に、講義を開始する際に、出席等を取りながら、場の空気を落ち着かせる時間を取っていた点。質問をしたり、発言を求めたりという積極的な方法はとっていなかったが、受講者とのコミュニケーションができる雰囲気で講義が行われていた（講義時間以外での学生との関係性も重要なかもしれません）。
- ◆ 授業の進行速度が適切であった。
- ◆ 少ないPPT スライドで、一枚当たりの表示時間が長かったので、内容がよく理解できた。
- ◆ わかりにくくなりがちな化学物質の説明を身近な話題を使ってうまく説明していて素晴らしいと思いました。
- ◆ 資料を配るだけではなく、板書も交えることで受け身になってしまう講義をうまくコントロールできていると思いました。また、資料を配ることで聞くことに重きを置くようにしていると感じました。
- ◆ 実例を多くあげて説明をしている点がよかった。
- ◆ 授業を進行するペースがよい。間延びせず、くどすぎない適度で聞きやすかった。
- ◆ スライドに示すもの、口頭で話すものの仕分けが良いのではないかと思います。また、やや小さめの声の方が学生の注意力を引くのかという印象を受けました。理由はよく分からないのですが、非常に惹きつけられる「何か」を感じました。全体として、講義に緩急がありことが一番印象に残りました。
- ◆ 少ないスライドで説明することにより、学生が理解しやすい。私はたくさんのスライドを使うのですが、学生がその日の講義の焦点をとらえるのを難しくしていると思いました。
- ◆ 1日の進行速度が適していた。その結果、学生が集中できていたようだ。

2) 改善したらよいと思われる点

- ◆ ご自分でも気づいておられるのですが、語尾がはっきりしないことがあるので、改善されたほうがよいと思います。
- ◆ 授業の概要を示すスライドをつくって、最初に説明するとともに、話題の変わり目にも挟んでいくと、メリハリがつくのではないかと思います。
- ◆ 黒板の使い方。上下あるから両方使う方がよい。
- ◆ 言葉尻が聞き取りにくいことがしばしばあった。
- ◆ 数多い物質の中から、今回の講義では5つの物質を取り上げていた。なぜその5つなのか、全体の中のどの部分を今回学ぶのか、という解説があってもよかった。
- ◆ 板書される内容は、学生もしっかりとメモを取っていたので、板書する事項がもう少し多くても良いのではないかと感じた。
- ◆ 声が小さいときがある

- ◆ 黒板を使う量が少ないが、重要な部分を印象に残すために使ってはどうか。
- ◆ 板書の字がやや小さい
- ◆ 語尾が聞き取りにくい時がある

3) その他意見、感想

- ◆ 大変充実した授業公開でした。とくに建設的な意見交換は授業改善に向けた大事な取り組みだと思います。授業については、いろいろ自分で考えたり、学生の授業評価を参考にしたりして工夫をしているのですが、授業公開は、同僚の先生方の意見が参考になるので、とても重要であるように思います。ちょっと緊張してしんどい面もありますが、何年かに一度、授業のPCDAの一環として実施できるように運用してはどうかと思いました。
- ◆ PPT スライド量、話、板書、全体のバランスがよいと感じた。

2.3.3 部局でのFD研修

第2回 Fレックス ティーチング・ポートフォリオ

日 時 : 2013年 8月26日(月)～8月28日(水)

会 場 : 福井県立大学

参加者 : 青海忠久

感想 : 私が参加した第2回Fレックス TP作成ワークショップは、2013年8月26日～28日の3日間の日程で実施されました。第1日目は、午後に集合しましたが、2日目、3日目は朝9時から8時過ぎまで夕食も取りながらの作業でした。常日頃、忙しさにかまけて学生に対する教育ということに関して意識を向けていなかった私ですが、そのような自分を大学卒業のころから振り返り、なぜ自分は今ここにおり教育という場で自分は何をしたいのだということに思いを巡らすことができました。と言っても、巷でよく行われている何とか研修のように自分の全否定ということはされず、メンターの先生にも随分とやさしく接していただき、肯定的に自分を振り返ることができました。考えてみれば大変ぜいたくな時間を過ごすことができたと思います。

忙しい先生方に3日間をあけるということは困難なことと思われるでしょうが、少し自分を取り戻す時間として大変貴重だと思います。

Fレックス第4回FD合宿研修会

日 時 : 2013年 9月9日(月)～9月10日(火)

会 場 : 福井工業高等専門学校 大講義室

参加者 : 宮台俊明(10日 参加)

感想 : 福井県の中小企業(石本石材)社長の石本氏が、社員のやる気を引き出す工夫について講義を行ったが、教員と学生の間にも十分当てはまる内容であった。有意義な内容であり、それぞれの教員が1度は参加するとよい研修会であった。

2.3.4 授業改善についての課題と展望

1) 改善点

授業改善に関しては、学生がどのように改善してほしいと考えているかを具体的に把握することが重要である。そのためには、より多くのコメントを記述してもらう工夫をしなくてはならない。方法として授業評価の時だけでなく、講義時間に適宜、講義の感想や改善要望点を提出してもらうことを心がける必要がある。

実際、すでに、この取り組みを進めている教員もおり、中間段階でコメントをまとめて後半の講義に反映させているようである。

授業評価の評点に関しては、些細な点数にこだわるよりも、高い評価（4点）が多い教員、低い評価（1点）が多い教員に関して模範講義や改善のための授業公開を進めてもらうのが、授業改善に最もつながると考える。

2) 海洋生物資源学部における今後のFD活動方針

- 学部内でのF レックス FD 研修会開催の周知方法を改善して参加者を増加する
 - ◆ FD 研修会に参加した先生が簡単な報告会を行い、次回の研修会への参加を促す（学部教授会や授業公開のあとの意見交換会の時など）
 - ◆ 高校の先生に授業を公開して意見を求める
 - ◆ 高校の先生の授業を見学する機会を作る

3) 海洋生物資源学部からのFD活動の提案

- 教員に対する社会の要望を聞くセミナーの開催

社会が大学教育に求めている要望を様々な分野の人から直接聞く機会を設定し、教育・研究の向上に寄与することが目的。例えば；どのような人材を輩出してほしいのか。望ましい教育とはどのようなものか。などを聞く機会をつくる。
- ◆ 財界人や研究者あるいは社会に出てそれぞれの分野で成功している人達が大学教員にどのようなことを望んでいるかを講話してもらう。
- ◆ 講演者の示唆や叱咤・激励により、県立大学教員の視野を広げ、思考を深化させることで教育研究レベルを向上させることが期待できる。
- ◆ 海洋生物資源学部ではFD委員会を中心に、4月か5月に上記のセミナーを開催することを計画している。このセミナーはTV講義で行うことにより、海洋生物資源の教員だけでなく他学部教員も機会を得ることができる。その結果、大学全体の教育研究・地域貢献活動をレベルアップさせることが期待できる。
- 授業コンサルティング制度（授業改善のための教員個別相談）を取り入れる。

2.4 看護福祉学部（平井一芳，塚本利幸）

本年度実施した授業評価、授業公開、部局での取り組み、FD研修を以下に報告する。

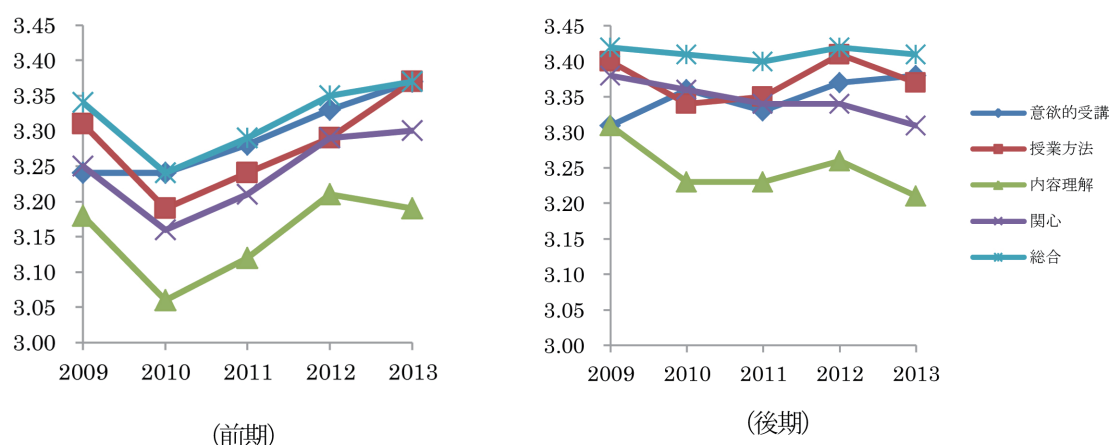
2.4.1 授業評価

2.4.1.1 看護学科

授業アンケートの結果について、まず昨年度と比較してみると、前期は「意欲的受講」「授業方法」「授業への関心」が上昇し、「内容理解」が低下した。後期は「意欲的受講」は上昇したが、「授業方法」「内容理解」「授業への関心」において低下した。次に過去5年間の推移をみてみると、2010年の前期に「授業方法」「内容理解」「授業への関心」において低下したが、2010年から2012年は前期、後期とも総じて上昇傾向であったが、2013年では後期に若干低下した。また、得点においては全体的に前期より後期の方が高い傾向にある。項目別でみると、どの年度においても「内容理解」が他の項目に比べて低い。しかし、5年間（2009年度から2013年度）のすべての項目の得点レンジはおぼろげに3.1～3.4であり顕著な傾向は見受けられない。

以上のとおり学生アンケート結果からみた授業評価は、総じて良く特段の変化がないと言える。

看護学科 授業アンケート結果

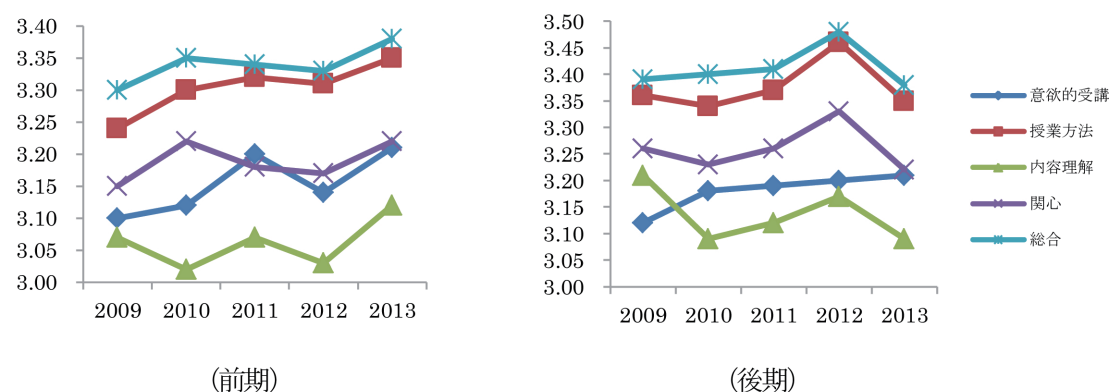


2.4.1.2 社会福祉学科

授業アンケートの結果について、まず昨年度と比較してみると、前期はすべての項目において上昇した。後期は、「意欲的受講」の1項目のみが上昇し、残りの4項目は低下した。次に過去5年間の推移をみると、前期では「意欲的受講」「内容理解」において、年度による得点の変動がみられる。後期では横這いもしくは若干の上昇傾向にあったものが、5年前の水準に回帰した。項目別でみると、ほとんどの年度において「内容理解」が他の項目に比べて低い。しかし、5年間（2009年度から2013年度）のすべての項目の得点レンジはほぼ3.0～3.5であり顕著な傾向は見受けられない。

以上のとおり学生アンケート結果からみた授業評価は、総じて良く特段の変化がないと言える。

社会福祉学科 授業アンケート結果



2.4.2 授業公開

2.4.2.1 看護学科

看護学科では、例年、前期、後期にいくつかの科目で随時公開しているが、参観した教員はいない。実質的に授業公開が成立しない要因として看護学科は学外実習や演習科目が多く時間割がタイトであることも要因のひとつと考えられる。このことは残念ではあるが、看護学科独自の授業改善への取り組みが行われているので、以下（2.4.3.1）に報告する。

2.4.2.2 福祉学科

社会福祉学科では、例年、前期、後期にいくつかの科目で随時公開しているが、参観した教員はいない。

実質的に授業公開が成立しない要因として社会福祉学科は学外実習や演習科目が多く時間割がタイトであることも要因のひとつと考えられる。このことは残念ではあるが、社会福祉学科独自の授業改善への取り組みが行われているので、以下 (2.4.3.2) に報告する。

2.4.3 授業改善への取り組み

2.4.3.1 看護学科

看護学科はオムニバス授業が多く、担当する教員同士で授業について検討を行う機会がある。同様に、演習では複数の教員がかかわること多いので、そのような機会には授業方法についての話し合が行われている。臨地実習においては、学生の思考・判断・行動を教員は目のあたりにするので、自ずと授業を振り返ること、授業改善へと繋がっていく。また、教員有志の学習会（「学生の看護実践能力向上に向けた教育的支援を考える会」）がこの1年間継続的に開催され、学生の看護実践能力向上に向けた教育的支援活動が以下の通り活発に行われた。

「学生の看護実践能力向上に向けた教育的支援を考える会」

1. 発足の経緯について

看護教育には臨地実習が課せられており、学生は看護実践能力向上をめざして臨地実習に取り組んでいる。しかし、学生は無資格者であるが、学生の行為が対象者には看護にならなくてはならないので、教員の教育的支援が必要になる。そのためには、教員の実習指導能力の維持・向上が必須条件である。しかしながら、当看護学科では教員の実習指導能力を向上することと経験ある教員の実習指導能力を若手教員の実習能力向上に役立てる場づくりが課題になっていた。

そこで、2012年度から看護学科の教員有志で「学生の看護実践能力向上に向けた教育的支援を考える会」を発足して「看護実践能力とは何か」、「教育的支援とは何か」について、実際の臨地実習における指導場面をもとに検討することになった。

2. 2013年度活動報告について

臨地実習のインターバル期間に時間調整して開催日時を決め、2013年度は2014年2月現在で8回行い、7名から11名の教員が参加した。臨地実習各領域の教員から話題提供があった指導場면을資料として参加者間で教育の視点で検討した。

今年度の検討で、明らかになったいくつかの成果を以下にまとめた。

一つ目は、若手教員が実習指導を振り返る機会になり、次の実習指導に活かすきっかけになったことである。例えば、若手教員から提供された指導場면을検討することで、学生が受け持つ対象者の情報を事前に得て、どのような対象かを描いて看護の方向性を出しておくこと、学生の捉え方の違いが分かり、どこを修正するように指導していくかが明確になるという意見が出された。また、経験ある教員が対象者との関わりを学生に示して見せると、経験の違いのみ評価する学生には、教員が何を考えて関わっていたかを示すことで、学生は自分に不足している見方・捉え方に気づくという意見が出された。このことを聞いた若手教員からこれまでは自分自身の判断を意識して学生に伝えていなかったの、今後は伝えていきたいという発言が聞かれた。

二つ目として、臨地実習は小グループに分かれて8領域をローテーションで履修するため、実習が進むにつれて、学生の成長を確認できる場になっていた。また、学生の学習能力に応じた学習目標を立てて指導していく等、次の実習領域において学生の指導を考える機会になっていた。このことにより、実習領域を超えて継続した教育的支援につながることが期待された。

全体を通して、臨地実習は対象者の状況に合わせて看護を実践していく能力を育てることになるので、教

員は学生が自己の看護実践を意味づけられるように振り返りを支援する役割があることを改めて認識することができた。

3. 2013 年度看護福祉学部 KF 枠研究費による研修会開催について

看護学教育における指導過程を分析し、指導力をつけることを目的に、2014 年 3 月 8 日（土）、看護福祉学部棟 4 階 403 会議室において看護福祉学部看護学科教員を対象に研修会を開催した。千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部教授和住淑子氏による講義「指導過程とは何か、指導過程を分析するための基本的な考え方について」聞いた後、今年度提出された指導場面を用いて「指導過程の分析・評価」グループワークを行った。（文責：赤川晴美）

2.4.3.2 福祉学科

社会福祉学科はオムニバス授業が多く、担当する教員同士で授業について検討を行う機会がある。同様に、演習では複数の教員がかかわること多いため、そのような機会には授業方法についての話し合いが行われている。実習関連科目の担当教員の間で、ソーシャルワーク実習担当者会議、精神保健福祉実習担当者会議を毎月開催しているが、そこでも実習教育を充実させるための方法について話し合う機会がある。

社会福祉学科の授業科目には、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の国家試験の受験資格に関わるものが多く、資格要件の変更に応じて、実習施設や実習時間、授業科目の変更や組み替えを実施する必要がある。これに対応するため、学科内にカリキュラムワーキンググループを組織し、隔月程度のペースで会議を開催しており、そこで教育効果を高めるためのカリキュラムの構成の仕方や授業方法について、検討が行われている。カリキュラムの変更に際しては、ワーキンググループの報告を受け、学科の全教員が参加する学科会議で意志決定する必要がある、ここでも教育効果を高める授業の進め方について話し合う機会がもたれる。

社会福祉学科は、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の養成に関わっているため、社会福祉士養成校協会、精神保健福祉士養成校協会、社会福祉学校連盟、公立大学協会社会福祉学系部会などに加入し、部会や連絡会議、セミナーなどに定期的に参加している。具体的には、それぞれの担当者を決定し、学科の代表として各種の部会、セミナーに分担して参加している。こうした機会にFDに関わる議題が取り上げられたり、FD関連のセミナーが実施されたりすることがある。FDに関連する部会、セミナーの個別の内容については（2.4.4.2）に報告する。そこで得た知見は持ち帰って学会会議で報告され、教員間で知識の共有が図られるとともに、それに関した話し合いも行われる。

また、教員有志の学習会（「教員懇談会」）を今年度12月から定期的で開催することになり、学生への教育効果を高めるための情報交換とディスカッションが活発に行われている。第1回の懇談会は、12月25日の12:10-13:30に開催され、8名の教員が参加した。「講義の双方向化の施行例」が事例とした報告がなされ、それを受けて教員間で意見交換を行った。第2回の懇談会は、2月13日の16:20-17:50に開催され、12名の教員が参加した。「社会福祉学科の実習教育」を題材とした報告がなされ、直接実習に関わらない教員に対しても実習教育についての詳細な情報が周知され、それを受けて実習教育に関する意見交換を行った。

社会福祉学科教員懇談会

	テーマ	日時	場所	参加者数
第1回	講義の双方向化	12月25日（水） 12:10-13:30	N403	8名
第2回	社会福祉学科の実習教育	2月13日（木） 16:20-17:50	N403	12名

2.4.4 FD研修

2.4.4.1 看護学科

1. ポートフォリオによる教育研究活動の進展 ―内省と改善への道標―

講演1「ティーチング・ポートフォリオによる振り返りと気づき」

本田知己氏（福井大学大学院）

講演2「ポートフォリオによる自己改革のススメ」

北野健一氏（大阪府立大学工業高等専門学校）

主催：フレックス、福井工業大学

日時：2013年11月30日（土）13:30～16:30

場所：福井工業大学

参加者：深沢裕子、江口千代

前年にフレックスの研修会でティーチング・ポートフォリオの紹介があり、今年は実際にティーチング・ポートフォリオに取り組んでおられる先生方の話をきくことができた。ティーチング・ポートフォリオとは、「自らの教育活動について振り返り、その自らの記述をエビデンスによって裏付けた厳選された記録」です。その構造は、＜教育の責任（何をやっているか）＞＜理念（なぜやっているか）＞＜方法（どのようにやっているか）＞＜成果（どうだったか）＞＜今後の目標（これからどうするか）＞からなっている。本田氏は自らのポート・フォリオ作成によって、すべての教育活動に関して「理念―目的―方針・方向―成果―エビデンス」の縦串を通せたことが大きな成果であった」と述べていた。この縦串を通すことが『難しかった』という実感のこもったお話には、大いに共感した。北野氏も「長年無意識に行っている教育活動を言語化し、理念を導出する過程で教員として自己省察が促される」さらに「自分は教員として何をやってきたのか、これからは教員としてこうありたいという意識が明確になり、心のリフレッシュや主体回復につながる」と述べた。私自身のことを振り返ると、自分の教育理念はあるにはあるのだが、それが看護師養成に関する社会の要請とどのような関係になっているのか、また福井県立大学看護福祉学部看護学科の理念との関係がどうなっているか、今まで突き詰めて考えることができていない。ティーチング・ポートフォリオ作成のワークショップでは、メンターから助言を受けることができるしくみになっており、メンターとの意見交換で自身の考えがより明確になっていくのだそうだ。ワークショップでは、3日間かけてティーチング・ポートフォリオを作成するということがあった。私も、毎年「業務実績報告書」、「自己点検評価書」を作成している訳だが、時間に追われるなかでの作成となることが多い。授業アンケートや学生の反応など、なるべくエビデンスを集めて＜成果＞を＜方法＞とともに振り返るようにしている。しかし、今回の研修会に参加して、＜教育の責任＞＜理念＞を明確にして、＜方法＞を考えることが非常に意義深いことであることを再認識することができ、感謝している。

この研修報告文執筆にあたり、大学評価・学位授与機構研究開発部 栗田佳代子氏発行の『ティーチング・ポートフォリオってなんだろう？』のパンフレットおよび、研修会で配布された本田氏、北野氏の配布資料から一部引用させていただいた。（文責：深沢）

2. ティーチング・ポートフォリオ講習会

テーマ：「ティーチング・ポートフォリオ～概要とミニワークショップ～」

日時：2014年2月28日

場所：福井県立大学共通講義棟L208

講師：栗田佳代子氏（東京大学大学総合教育研究センター）

参加者：有田広美

内容：ティーチング・ポートフォリオの目的と意義、高等教育の質保証とティーチング・ポートフォリオなどティーチング・ポートフォリオが有用なツールとなるための講演と昨年の自分の教育活動について「なぜ

このような事を行っているのか」というミニワークを行った。(文責：有田)

3. 看護基礎教育を考える会

県内の看護師養成機関が共同で福井県看護協会において教育について考える活動をしている。その一環として研修会を開催しており、福井県立大学からも参加したので報告する。

第1回 初年次教育について

日時：2013年5月18日(土) 13時～16時

参加者：高原美樹子、寺島喜代子、笠井恭子、山崎加代子、深沢裕子、鳥羽愛乃、梶瑞紀

第2回 学生支援・授業の工夫

日時：2013年9月14日(土) 13時～16時

参加者：高原美樹子、深沢裕子、島田理代、辻裏佳子、矢島直樹

第3回 臨地実習指導の工夫

日時：2013年12月14日(土) 13時～16時

参加者：高原美樹子、矢島直樹 他

2.4.4.2 社会福祉学科

1. 2013年度 日本社会福祉教育学校連盟 全国社会福祉教育セミナー

日時：2013年11月2日(土)～3日(日)

場所：長崎市民会館、長崎純心大学

参加者：奥西栄介、木村多佳子、吉川公章

研修内容：教育セミナー 全体テーマ「社会福祉の開発機能と社会福祉教育」

第1日目(11/2)

基調講演「社会福祉の開発機能から社会福祉教育へ期待するもの—社会福祉法人南愛隣会による罪を犯した障がい者や高齢者に対する福祉的支援の実践をふまえて—」

講師：社会福祉法人南高愛隣会顧問 田島良昭氏

長年の厚生労働省との協議、委託研究の取り組みの経過を報告され、罪を犯してしまった当事者への共感的理解をもとに、当事者の立場からエビデンスに基づく具体的支援の実践活動、法制化に向けた行政、政府への働きかけの重要性を強調された。特に、実践活動の成果を数値化し、試行事業の効果を具体的に示し、ソーシャルアクションを展開すること、このようなプロセスに沿った社会福祉実践における開発的機能の発揮が社会福祉士に要請されていることを提起された。(文責：奥西)

シンポジウムテーマ「社会福祉の開発的機能と社会福祉教育」

コーディネーター：栃本一三郎氏(上智大学)

シンポジスト：和田敏明氏(ルーテル学院大学)、白澤政和氏(桜美林大学)、
古都賢一氏(厚生労働省大臣官房審議官)

和田敏明氏より、南高愛隣会田島良昭氏の実践から学ぶことを整理し、人材養成と社会福祉事業主体の姿勢の重要性を提起された。人材養成の要点として、自立と尊厳の価値に基づく対象者に対する理解力、現行の対象ごとの制度では解決できない問題への対応力、コミュニケーション力、他者と協働する力、社会資源の動員、資源開発など地域に働きかける力などをあげた。また、本務校による人材養成プログラム(地域福祉開発コース、地域福祉ファシリテーター養成講座)

の紹介があった。次に、白澤政和氏より、コミュニティ・マネジメント教育による社会福祉士教育の報告があった。これからの社会福祉専門職は、地域をマネジメントし、地域のニーズに合わせて新たな社会資源を開発していく方法を身につけること、検討されているソーシャルワークの世界定義の動向から、社会変革と社会開発が強調されていることから、社会福祉士の開発的機能が今後ますます要請されていることを提示した。最後に、古都賢一氏より、最近の社会福祉士の動向について報告があった後、たとえば、社会福祉士の活躍の場として新たな生活困窮者施策があり、社会福祉法人の本来的役割、社会的使命を意識した、地域において制度で漏れ出る社会問題の解決への志向性を有する社会福祉士が求められていることを強調した。最後にコーディネーターの栃本一三郎氏による全体の総括があった。（文責：奥西）

第2日目（11/2） 分科会

第1分科会テーマ：社会福祉士国家試験と新カリキュラム見直し～これからの社会福祉士養成教育を展望する～

コーディネーター：中谷陽明氏（松山大学）

発題者：白澤政和氏（桜美林大学）、二木立氏（日本福祉大学）、
谷村誠氏（社会福祉法人みかり会）

コメンテーター：古都賢一氏（厚生労働省大臣官房審議官）

コーディネーターの中谷陽明氏より、分科会の趣旨が提示された後、白澤政和氏より、現行の国家試験制度の問題点が指摘された後、その対応として、①一般養成施設を中心とした試験制度から福祉系大学の教育を保証し担保する試験制度に根本的に改めること、②専門職の実践活動に必要な不可欠な知識と技術を問う試験にすること、③養成校の教育に委ねる教育プログラムであること、例えば実習時間数を倍増などが提言した。次に、二木立氏より、本務校の実習教育研究センターの紹介を中心に、実習教育、試験対策についての詳細な報告があった。また、試験制度批判だけでなく、養成校の責務を明確にすることを強調された。続いて、谷村誠氏より、社会福祉法人における社会福祉士の役割について報告された。地域福祉ニーズへの対応と新たな福祉サービスの創造を志向した社会福祉士養成を養成校に望むこと、養成校と実践現場との連携の重要性について強調した。その後、会場との質疑応答が3意見あり、最後に古都賢一氏より、各発題者へのコメントがあり、総括として、資格制度の創設は実務家優先でスタートした経緯があること、国家試験の意味は養成校の教育プログラムを一定水準担保するもので振るいにかけるものではないこと、若い世代に伸びしろのある教育プログラムを提供すること、今後新たな社会福祉法人の役割、機能に基づいた社会福祉士養成に期待する旨、述べられた。（文責：奥西）

第3分科会テーマ：ソーシャルワーカーとしてのキャリア形成

コーディネーター：中村卓治氏（広島女子大学）

発題者：安藤亘氏（ビヨンドサポート株式会社代表取締役）、
茶屋道拓哉氏（九州看護福祉大学）、保正友子氏（立正大学）

ソーシャルワーカーとして働き続けるための人生ビジョンの明確化と、その成長を支えるためのキャリアパスの確立が不可欠であるが、その取り組みは始まったばかりである。分科会では、養成教育や職能団体として、その支援のその支援の可能性や取り組みの工夫といった話題から、社会福祉教育を再考することが目的として掲げられていた。まず、ソーシャルワーカー養成では、現象を捉え、解釈し、他者に伝え、行為するという一連の力を養うこと、次に、実践を経るなか

で実践能力は変容し、その段階に応じた研修やSVが必要なこと、そして、自分の能力を発揮する環境を自らが創出すること、という教育からキャリアにまたがるポイントが語られた。コーディネーターを含む4者の発言でほとんどの時間が使われ議論を交わすところまでには至らなかったが、このなかでは、資格取得教育を支える基礎力（学士力）涵養の重要性と資格取得教育に焦点化されている大学での社会福祉教育の見直しが必要になっていること、また、実習や職場におけるソーシャルワーカーの「ロールモデル」の存在が重要なことが明確にされた。（文責：吉川）

第5分科会テーマ：社会福祉実践現場におけるスーパービジョンの実際と課題～メゾ・マクロ領域に焦点をあてて～

コーディネーター：野村豊子氏（学校連盟副会長・東洋大学教授）

発題者：黒木邦弘氏（熊本学園大学准教授）、高山直樹氏（東洋大学教授）、
室田信一氏（首都大学東京准教授 ＊録音音声による報告）、
小山隆氏（同志社大学教授）

利用者への個別支援や業務手順に関するミクロ領域を中心に、従来スーパービジョンが展開されてきたが、施設運営管理に関する研修を求める高齢者福祉施設従事者のニーズや、コミュニティソーシャルワーク事業や政策形成といった領域におけるスーパーバイザーの必要性を中心に4名の報告者から発題がなされた。また、認定社会福祉士認証・認定機構による「スーパービジョン実施マニュアル」が紹介され、将来質の高いスーパーバイザーとなることができる人材を育てるために学部教育で行うべきことについて議論がなされた。本分科会では、①学部教育において「スーパーバイザーとしてのいい体験」を学生に経験させること、②演習がメゾ・マクロ対応できる内容となっているか、教員間で確認し合う必要があること、③ソーシャルワークの価値・倫理を今以上に重点的に教え、社会で起きている不正義をとらえる力を育てること、④他職種の在学時教育と卒後教育から学ぶ必要性があることが今後の課題として集約された。（文責：木村）

2. 第33回日本医療社会事業学会

テーマ：『MSW 実習の実態』に関する集い

内容：医療機関での相談援助実習（社会福祉士養成）を担当する実習指導者および関心のある現任者、実習担当教員、実習を経験した大学生による意見交換会

日時：2013年5月18日

会場：大阪国際交流センター（大阪市天王寺区内）

ファシリテーター：佐原直幸氏（大阪労災病院）

参加者：木村多佳子

3. 第12回日本精神保健福祉士学会学術集会

分科会テーマ：専門職の教育・養成

内容：精神保健福祉援助実習（精神保健福祉士養成）に関する報告

日時：2013年6月15日

会場：金沢エクセルホテル東急

参加者：木村多佳子

4. 日本ソーシャルワーク学会第 30 回大会

テーマ：ソーシャルワーク教育に関するコア・カリキュラム構想の検討

内容：社会福祉士国家試験指定科目以外も含めた社会福祉関連科目の設定や相談援助実習で必要となる価値・知識・技術との関連について議論するシンポジウム

日時：2013 年 6 月 30 日

会場：仙台白百合女子大学

座長：白川充氏（仙台白百合女子大学）

参加者：木村多佳子

5. 日本社会福祉教育学校連盟近畿ブロック支部・日本社会福祉士養成校協会近畿ブロック 2013 年度合同研究会

テーマ：『実習費』のあり方について

内容：相談援助実習（社会福祉士養成）における実習に関する費用の調査報告と教育現場と実習指導現場担当者によるパネルディスカッション

日時：2013 年 10 月 6 日

会場：関西学院大学梅田キャンパス

報告者：梓川一准氏（関西学院大学）、他

参加者：木村多佳子

6. 公立大学協会社会福祉学系部会連絡会

協議事項：公立大学の社会福祉教育における役割の認知

承合事項：資格過程希望者が定員を超える場合の対応

GAP 導入状況、FD の取り組み、実習の適否

日時：2013 年 11 月 6 日

会場：岩手県立大学

参加者：吉村臨兵

関係公立大学では、ほとんどの大学が枠組みとしては GPA（Grade Point Average）を導入済みでありながら、「活用」している感じなのは数校にとどまること、問題を抱えている学生の情報は GPA で拾えないことがわかり、教員集団どうしの情報のやりとりに着手した大学もあること、等の情報を交換した。（文責吉村）

7. 日本精神保健福祉士養成校協 全国研修会

テーマ：精神保健福祉士養成教育の本質とは

日時：2014 年 6 月 29 日～30 日

会場：聖学院大学

基調講演：精神保健福祉士養成教育の本質とは（講師 助川征雄氏）

シンポジウム：精神保健福祉士養成教育の本質を問う

シンポジスト：栄セツコ氏（桃山学院大学）、中村卓治氏（広島文教女子大学）、山本由紀（上智社会福祉専門学校）

参加予定：橋本直子

2.5 学術教養センター（亀田勝見、木村小夜、山川修）

2.5.1 授業評価について

結論から言うと、ここ数年の動きとしては特段の変化を認めるまでには至らない。以下、具体的に述べる。

・前期

学術教養センター（以下センター）の科目については、Q1「意欲的受講」からQ4「関心」までの個別項目は、いずれも微増微減であり特段の意味を見出しがたい。Q5「総合評価」は前年から0.03下がっているが、これもここ3年ほどの微増からやや落ちた程度で、横ばいの傾向を示しているに過ぎない。比較的センターの授業が多い100人以上の授業における評価を見ても、同様である。

・後期

センター科目については、今年は昨年と比べると、軒並み下がっており、最大で0.08の下降が見られる。しかし、これは昨年特に目立った上昇があったことを念頭に置けば、一昨年までのほぼ横ばいだった水準に戻ったと見なすのが妥当である。100人以上の授業でも同様の説明で事足りる。

一般教育の授業に限らないが、そもそも多くの授業は年度ごとに受講生が総入れ替えとなる。いくら授業改善を行おうが、前年度と比べての評価をする受講生などほとんどいない。また、受講生の側の質が年々（多くは望ましくないという意味合いで）変化しているという指摘も少なくない。受講生の学力が低下し学問への意欲が低下した場合、授業の達成目標水準を下げて授業運営上の規律を甘くすれば、多くの学生から「楽」「分かりやすい」といった好意的な評価を得られポイントは下がらない。これはすなわち授業の質とは無関係の人気投票に過ぎず、かえって授業の質向上に向けた教員の意欲を阻害する面が大きい。

少なくとも現行の授業評価アンケートにおいて、個々の授業・個々の教員の良し悪しを客観的かつ公正に評価し得る目などない。それ故、評価ポイントの高低上下そのものに価値を見出すような形で授業評価の結果を見ていくことは、甚だ不適切である。部局や学年、授業形態や規模などといった相違にもとづくポイント比較や、ポイントの経年変化から読み取れる教育現場の現状把握こそが大事である。

以上のような点を踏まえて、ここではセンター関連の授業評価結果を経年変化という視点でのみ見ておこう。ここ数年の動きは高止まりと考えてよい。授業評価以外の授業改善努力を踏まえたならば、この高止まりは、昨年と今年とで授業の質に変化が見られないとか、学生に迎合した安易な人気取りの結果だとかを意味するのではなく、どの年度の受講生に対しても柔軟に対応し適切な教育を施す努力が不断に行われていることを意味すると言ってよい。今後も、改善の努力の先にこの横ばい傾向という結果が出来れば、大変望ましいことである。

2.5.2 授業公開の方針と実績

授業はこの5年間随時公開とし、担当教員に事前連絡のうえ参観することを原則としている。今年度も学術教養センターの方針により、随時公開という形で進められた。結果としては昨年度と同様、本年度も参観報告は提出されていない。

公開しているにもかかわらず参加者が皆無、という状況を問題視する向きもあるが、我々センターでは、これを特に大きな問題とは考えていない。理由は以下の通りである。

第一に、授業を参観するための物理的な制約が存在する。たとえば新入生を対象とした導入教育的意味合いを持つゼミ授業は、センターの教員の多くが担当し、その中心となっており行われている。今後も継続して改善をしていかねばならないこの授業については、授業公開が有効であろうと思われる。しかし、この授業は同一時間に一斉に行われるため、他クラスの参観は不可能である。これは他の授業にも一部当てはまることであり、参観したくても同じ時間帯に自分の授業があれば、参観はできない。

また、昨年度の報告にも記したことだが、近年、一層の研究成果を求められる一方で、地域貢献や雑務などの負担が増えていく状況も変わらず、授業の準備や事後の課題処理など必須の業務も含めると、個々の教員が自由に使える時間は予想以上に少ない。その結果、参観できる時間に参観したい授業があるという確率は大変低くなる。

より重要な点として、第二に、センターの実施する原則全科目常時公開方式は、常に参加者があることを必要とするものではない。自らの授業改善のヒントを得るために参観したり、自らの授業の問題点を他の教員に見出してもらうために参観してもらったりといった、必要と感じた時に機会を常に用意しておくことに最も大きな意義を見出している。2年連続で参観者がいないという状況は、こういった必要性を特に感じていないことの表れであるとも解釈できる。

授業公開制度を利用した他教員による授業参観は、参観の動機と参加できる物理的余裕が共に備わってはじめて実現する。センターでは授業公開の有用性と限界の双方を見据え、公開授業への積極的な参観を呼びかけ続けつつも、年度ごとの具体的実績にはとらわれず今後も常時公開を継続していきたい。

2.5.3 部局でのFD研修

第2回F レックス、ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

日時：2013年8月26日（月）～28日（水）

場所：福井県立大学

内容：

3日間かけて自分の教育を振り返り、教育の理念、方法、具体的な実施内容をティーチング・ポートフォリオという形で記述することにより、自分の教育を俯瞰する。

学術教養センターからの参加者：亀田勝見

参加者のコメント：

普段の教育活動において、自らの教育理念や方針は未整理なままで、首尾一貫しているかどうかさえ意識していない場合も多い。本ワークショップは、メンターという助言者とともにそれらの全体像を把握し、理念と方法がかみ合っているか、その成果が現れているか、今後の改善点はないか、などといった点を明確化できるよい機会であった。これにより、自らの教育理念や手法に対する自信を高めることができた。

第4回FD 合宿研修会

日時：2013年9月9日（月）～10日（火）

場所：福井工業高等専門学校

内容：

テーマ「授業デザイン」

【講演】

熊本大学・社会分科科学研究科 鈴木克明

【ワークショップ】

熊本大学・社会分科科学研究科 鈴木克明

仁愛女子短期大学 田中洋一

学術教養センターからの参加者：徳野淳子、山川修

参加者のコメント：

授業デザイン（インストラクショナルデザイン：ID）の日本の第一人者である熊本大学の鈴木先生から、IDの基本をわかりやすく教えていただき、その知識を元に、授業デザインのワークショップを行ったので、非常

に有益だった。

学術教養センター懇談会

日 時 2014 年 1 月 29 日 15:30～17:30

参加人数：学術教養センター教員 12 名（要確認）

主旨：

前期「導入ゼミ」について、いくつか実践事例を発表した上で、初年次教育（後期「教養ゼミ」も含む）における授業の進め方や工夫について意見交換を行った。1 年生の導入教育的な意味を多分にもつこれらの講義であるが、同日時開講のため普段は相互参観できない。このため、懇談会を通して教育内容および教育方法の改善を目指した。

内容

事例紹介（導入ゼミ）

- 1 山川修（テレビを読もう）
- 2 亀田勝見（東洋を語ろう）
- 3 木村小夜（文芸作品との対話）

意見交換内容

[1]何を教えるか

新入生の基礎学力の低下が毎年話題にのぼる中、初年次教育たる本ゼミでは何に重点を置いて教えるのか（「読み書きの基本」「大学生としてのマナー」「レポート作成スキル」等）、また、これらをどの程度のきめ細かさで指導しているのか、担当教員によって大きく差異があることが改めて分かった。

また、半年間で発表とレポート作成の双方を教えることは可能であるか、あるいは、授業時間に制約がある中で、各クラスで取り扱うテーマの内容に深く立ち入ることと大学での学習法という形式に重点を絞ることとのバランスをどのようにとればよいのか、などといった課題が浮き彫りとなった。これに関連して、テーマに即した調べ物を指導しようとしても、明確な方向性も定まらない学生に、真の意味での「調べ方」が果たして指導可能なのか、といった重要な問題提起がなされた。

[2]どのように教えるか

いくつかのクラスでは、グループワークの形式を用いて学生を指導している。事例紹介時にはこのグループワークがうまく行かない場合が報告され、どうすれば効果的に指導できるかという話題について、様々な視点から意見が出された。

以前はグループワークを用いていたが、今は個人学習に切り替えた教員もあり、グループワークの教育効果についての長所短所などが取り上げられた。長所としては、視点の違いを理解させることに効果的である点、短所としては、グループ内に怠ける学生が生じてしまう点、さらには分野によっても要不要が分かれる点などが指摘されている。

また、グループワークがうまく機能しているクラスの事例も紹介された。1 グループあたりの人数は何人が適切か、グループのシャッフルやグループ間での交流活動、役割分担、属性（男女・県内外等）が偏らないようにする、等の工夫を導入してはどうか、といった問題が話し合われた。

学生の積極性が見られず、授業が盛り上がらない問題に対しては、アイスブレイクの手法を工夫したり、授業の序盤に積極性のある学生を発表させて勢いを付けたりする方法が提案された。

[3]どこまで共通にすべきか

担当教員ごとに方式も内容も難易度も異なるゼミ授業について、共有すべき最低基準のあり方が議論となった。他大学の一部で実施されている共通教科書の導入などの是非も、従来以上の真剣さで検討対象となった。また、ゼミ担当の分担をお願いしている協力教員のクラスに、学生の評判が高いものがあるので、その手法や工夫を紹介してもらう機会を設けることも検討された。

[4] 事前に学生にどう伝えるか

ある程度は共通基盤を構築すべきだが、教員によって相違があるのはやむを得ぬし、むしろその方がよい。であれば、学生には履修登録作業前にその相違を把握し、好みに応じた選択ができるような方法をも考えねばならない。この問題に対して、重点を図示した一覧を配布する案が出された。ゼミで教えるべき項目として「話す」「書く」「読む」「発表」「方法論」等といった指標を設定し、クラスごとに異なる重視の度合いを数値化したものをレーダーチャートとして図示し、履修登録時に参照しやすいような一覧を学生に呈示するというものである。

以上のような論点が議論され、大変有意義な懇談会となったが、様々な方針の決定にまでは未だ至っていない。来年度以降の授業に実際に活かすため、継続的に懇談会を開くことについての同意を得て、本会は終了した。

2.5.4 授業改善についての課題と展望

先に述べたように、授業公開は必要な時に利用できればよいものであって、日々の授業において改善に向けた努力がなされていることこそが実質的かつ重要な「授業改善への取り組み」である。そこで今回センターでは、各教員が今年度それぞれに取り組んだ授業の工夫点を示し、上記の実質的な取り組みが如何様になされているかを報告することとした。

石原一成

講義・実技を問わず、受講生は学習活動の記録を行い、教員がコメント・アドバイスを記入しフィードバックを行い、双方向授業の基礎づくりを行っている。また、大学による授業アンケートとは別に、自身の授業のねらいとしている。

- ・自己管理に資する基礎的な知識の習得や態度の育成
- ・他者とのコミュニケーションを通じて、リーダーシップの発揮、問題解決等の能力
- ・就業力（信頼関係構築力や共同行動力など）の育成につながるスキルの獲得などについての調査を行い、授業改善のための資料としている。

加藤まどか

〈講義科目〉

配布資料と板書、パワーポイントを併用し、分かりやすい説明を心がけた。

亀田勝見

〈中国語〉

例年どおり、いかに復習を習慣づけるかに留意し、小テストや課題の与え方を工夫したとともに、留学生との交流授業を企画。学生・留学生双方にとって大変意義ある授業となった。今後も、発音のみならず、ピンイン表記修得のためのさらなる工夫を考えていく。次年度も留学生との交流活動を取り入れた授業を企画したい。

〈導入ゼミ〉

昨年度の反省を踏まえ、導入教育的要素を充実し、一定の効果を得た。これにより学生のスキル向上はある程度達成できたが、積極的な学問的活動につなげるところまではいかなかった。導入教育的部分はある程度充実したので、今後は学生達の積極的な活動を促す工夫に重点をおきたい。

〈学術ゼミ〉

資料を読むための背景となる地理・歴史感覚を身につけさせることに留意した。今後は漢文訓読能力の育成とともに、各種問題に対する東洋思想からの視点の導入を学生に促すよう努める。よりなじみやすい教材の利用に努める。

〈講義科目〉

視聴覚教材を効果的に利用して、学生達に内容を理解してもらうことができたと考える。引き続き効果的な教材の利用に努め、興味を失いがちな分野の話に耳を傾けさせたい。

菊沢正裕

- ・本学の学生に適した教科書をつくる、またはLMSに教材を掲載することになっている。
- ・100人規模の講義では、大福帳を授業運営に役立てている。大福帳には、授業中に関心の高まった学習内容や関連した質問等を数行記させ、フィードバックする。そのうえで次回授業では多数からあった質問等の解答から始める、理解が不足している箇所を補う、等の対応をしている。
- ・情報処理演習では、教科書で個々のスキルを学んだ後、実践的総合問題に短時間で対応できるよう訓練する。例えば、昨年の試験に出題した問題（試験では実践的・総合問題を出題）を授業中に行い、自分の弱点を克服できるよう指導している。
- ・環境論（100人規模の講義）では、授業に変化をもたせている。昨年までは主として環境科学の講義を中心とし、環境ネットワークサイトの閲覧や外部の環境団体とのワークショップなどを課外学習としていた。外にでるのを嫌う学生が多いので、今年からは、最初の4回で社会的関心が高い話題を講演、興味を喚起してからつぎの7回では知識を養う環境科学の講義を行い、最後の4回では「持続可能な社会」をテーマとする双方向授業とグループ議論を行うという形式で15回に変化をもたせた。大福帳の記載から昨年まで以上に学生の関心が高まったと思われる。

北村知之

- ・学生の学力実態をチェックしながらそれに即した講義を工夫し、教材などの改善に努めた。
- ・評論文の読解力が弱い学生が多いという現状認識から、ゼミは読解力と発言力を強化するという趣旨を掲げ、少数ではあるが意欲的な学生がこれに応じて、成果を上げている。

〈具体的な授業の工夫〉

以前からやっていることだが、大講義で毎回配布するプリントには空白個所を多数設け、学生にノートとりを促している。空白個所のないプリントの場合、学生はメモをとらず、またプリントも読まないままにすることがあるようだが、空白個所があるとそこを埋めなければならないという強迫観念に駆られるらしく、ほとんどの学生は空白個所を埋めるべく最低限の筆記作業をするようだ。

また同じく大講義では、期末試験の他に、学期中にレポートを提出させている。1500字程度の作文だが、多くの学生にとっては小さくない負担のようだ。これをこなした学生は、最後までしっかりついてきてくれる。

木村小夜

〈講義科目〉

- ・いずれも中小講義室規模の受講者数であったので、ごく初歩的な内容の指名発問を頻繁に行った。これによ

り、受講生側に適度の緊張感が生まれ、ある程度の双方向性を確保できた。とりわけ小浜での10人前後の授業では学生の積極性が高まり、興味深い質問が寄せられた。

- ・取り上げた各作品や各事項のポイントに即し、数回、小課題への解答を二百字原稿用紙に書かせて授業中に提出させた。これを次回授業冒頭に紹介し、講義内容に生かす形で組み込んだ。

- ・板書事項と配布プリントの内容・割合に、なお工夫の余地がある。大学でのノートのとりかたの練習となり、同時に授業内容を的確に振り返れるようなものとした。

〈導入ゼミ・教養ゼミ〉

- ・学生の発表内容を一定の水準に保ち、且つコミュニケーションを図るため、事前の個別指導をかなり重視した。が、結果的に学生の考えがうまく引き出せず、教員の考えだけが反映された発表となる場合がしばしばあった（同様の事態は学術ゼミでも生じた）。どこまでを委ねるべきか、指導のありかたに工夫を要する。

- ・レポートは加味して返却。参考となる数本を全員で読み、感想を述べ合った。共通課題の方が学生の関心度は増すようである。

- ・学生の（能力ではなく）モチベーションに相当な幅がある。一回ごとの授業構成を再考し、難易取り混ぜた課題を用意する必要がある。

- ・導入ゼミのテキストとして従来翻訳物を用いていたが、より親しみやすい題材を検討する。

〈学術ゼミ〉

- ・少人数・専門科目との兼ね合い等の事情があるものの、適度の負荷は必要である。作家・作品の選択を学生に任せていた過去の方法の採用も、再度検討したい。

熊谷正

- ・講義の始まる30分前には、講義室へ行き、『環境整備』をして、その日のクラス・学生の「状況・雰囲気」を観る。

- ・毎講義最後の7分ばかりを利用して、『講義アンケート』を行い、それに対して、『自分にとって都合の悪いものから』、その次の講義で回答していく。

黒田祐二

〈講義科目〉

- ・工夫した点

学生の理解度が高まるように、日常例や映像をできるだけ多く提示したり、穴埋め式の講義ノートを作成して配布したりした。

学生が主体的に考えて学ぶことができるように、講義内容に関わるテーマについてまず自分で考えさせ、その後学生同士でディスカッションする機会を複数回設けた。学生とのやりとりが深まるように、リアクションペーパーを1枚の用紙にして、「学生に質問や疑問点、感想を書いてもらう→コメントをして学生に返却」を繰り返した。

- ・反省点

ディスカッションの後で必ずまとめを入れるようにしているが、話し合うだけで満足してしまっているように見える学生もいる。ディスカッションとまとめとの関連づけの仕方を今後工夫したい。

講義によっては映像の提示が少なくなってしまった。講義内容に深く関連する映像を探して提示することも今後の課題である。

わかりやすく説明しようとしすぎてかえって説明がくどくなってしまうことがあった。簡潔でわかりやすい説明を今後心がけたい。

〈導入ゼミ〉

・工夫した点

レポートの見本を提示して学生に良い点・悪い点を指摘させるなど、できるだけ学生自身に考えさせるように努めた。

学生が興味をもって学習できるように、学生自身にテーマを設定させて文献講読・レポート執筆・プレゼンテーションを行わせた。

・反省点

授業中の学生とのやりとりが少なかった。今後は学生に質問してその回答から学習内容につなげるなど、少人数のメリットを最大限に活かせるように努めたい。

ディベートを取り入れたが他の授業内容との関係から1回しかできなかった。ゼミで扱う学習スキルを絞るか、広く育てるようにするか、今後再検討する。

島田洋一

〈ゼミ授業・講義科目〉

ともに現在進行形の国政政治問題に関し、アメリカの英語資料（Wall Street Journal、Washington Post の記事や、著名な保守派評論家である Mark Levin、Charles Krauthammer、John Bolton の論説など）。いずれも話題的にフレッシュかつ邦訳のないものなので、国際政治に対する理解力や時事英語力を向上させたい学生は積極的に授業参加していた。

津村文彦

・教養ゼミでのディスカッションの学生相互評価と Most Valuable Speaker (MVS) の選定

1年生にとってゼミでのディスカッションは馴染みのないものである。そこで積極的な発言を促し、ディスカッションを反省的に捉えるために、学生に相互評価を行わせた。すべての学生が他の学生の発表・コメントをスコアシートで採点し（論理性、説得力、質疑応答の適切さなどの項目）、さらにその時間に最も効果的な発言を行った者（MVS）の名前を書かせるようにした。結果、議論に集中し、展開を考えながら積極的に発言するようになった。

・大講義における教員間および教員と学生のあいだのディスカッションの実践

受講者が200人を超える大講義科目では教員から学生への一方的な情報提供に終始することが多いが、オムニバス講義「日本の文化と社会」では、最終回に担当した複数の教員が登壇することにした。学生は選択したテーマの教室に出席し、事前に準備した質問を教員に投げかけ、その問いをめぐり登壇した複数の教員が議論するかたちを取った。「難しかったが、教員同士のやりとりが興味深かった」などの感想が多く、好評であった。

・写真撮影課題の実践

ほぼすべての学生がカメラ付き携帯電話をもっている現状を活かして、学生が撮影した写真をメール送信する課題を「比較文化論」にて実践した。「元旦に食べたお雑煮とおせち料理の写真を撮ってください」というもので、日本各地のお雑煮とおせち料理の写真を正月明け最初の授業で学生に紹介した。雑煮には地方色が強く見られるが、おせち料理ではそれが薄れている様子を指摘し、日本の正月食の歴史的形成について講義を行った。自分の地域のものしか食する機会のない雑煮の多様性について体感できる授業として好評価が得られた。

徳野淳子

【2013年度から新たに行った取り組み】

〈情報基礎演習〉

近年の学生の情報処理能力の向上を踏まえ、毎年初回に実施しているプレースメントテストの内容を変更した。具体的には、この授業で学習する「タッチタイピング」「ワープロ」「プレゼンテーション資料の作成」の3つの主要な単元のプレースメントテストを実施し、入学時の能力について調査した。また、その結果を学習後の能力と比較することで、今後授業内容をどのように改善していくべきか、学期末に同授業を担当する5名の教員と議論した。

〈情報科学〉

2013 年度に若者によるインターネット上での悪ふざけ写真の投稿などが社会問題になったことを踏まえ、ネットワークリテラシーに関する動画教材を一新して、重点的に学習した。また、情報社会の中で、自分で考えて行動できるように、ビデオで見たトラブル事例を題材にグループに分かれて議論を行った。

近年のスマートフォンやソーシャルメディアの普及など急速に変化する情報社会に対応するために、同科目を担当する教員とともに、2013 年度に既存の教科書を大幅に加筆・修正した。この新しい教科書は次年度以降の授業で使用する予定である。

〈情報処理F〉

映像制作の授業であるが、同時にメディア理解・表現能力を養うため、例年より映像分析の時間を多くとった。

〈科学史（オムニバス）〉

情報科学の歴史について、学生にとって身近なコンピュータがどのように誕生したか、また、それを使って情報を処理することを可能にしたシャノンの功績を題材に、必修の情報科学の授業と関連付けながら、写真を多用して紹介した。

【2013 年度以前から継続して行っている取り組み】

〈情報科学〉

F レックス LMS に提出した課題の成績とクラスの平均点などの統計情報を各学生に公開して、努力する目標を与えた。

〈情報科学〉

大人数の講義であるため、個々の学生への対応として、毎回授業の最後に用紙（大福帳）を配布し、質問、要望などに応じた。

〈情報処理F〉

「福井県の紹介 CM」という枠組みで、学生が（グループ毎に）興味のあるテーマの中から作成したい映像のテーマを選択できるようにして、授業への興味関心が高まるよう工夫した。また、映像制作の流れや映像編集ソフトの操作方法を理解し易くするために、予めサンプル映像などの教材を作成した。

〈授業全般〉

- ・講義には、PowerPoint 資料を用い、これに対応した配布資料（空欄記入形式）を用いて、学生が講義に集中できるように工夫した。
- ・授業で使った教材を学習管理システム（F レックス LMS）に掲載して授業外の学習を支援した。
- ・定期的に LMS 上のオンラインテストや小テストを取り入れ、学生の理解度を確認した。
- ・学生が作成したレポートや課題を用いてグループワークや相互評価を実施した。
- ・学生が理解しやすいように、適宜、写真や動画教材やソフトウェアなどの視覚教材を取り入れた。
- ・複数の教員で担当する授業（情報基礎演習、情報科学）では教員間で授業内容に差が出ないよう、教科書やシラバスに即した内容になるよう心がけた。

長岡旺生

- ・今年度担当した科目（選択）のうち、前・後期各 1 科目において、とくに英語での発信力をつけることを目

的にした。前期には、学生が興味をもちそうなスティーブ・ジョブズのスピーチやプレゼンを見聞きし、最終的に自分の好きな部分を暗唱させたが、適宜に動画を提示することによって関心を高め、理解を深めさせた。また当時話題だった山中教授のプレゼンを教材にするなど、ニュースな英語にもふれられるようにした。

- ・後期には、新しい試みとして、グループ内でスピーチをおこなう時間を設け、最終的にはクラス全体に向けてグループによるプレゼンテーションをおこなわせた。

聴衆の大きさ、時間、テーマについても少しずつ負荷をかけていったことで、グループのメンバーとも打ち解けつつ、無理なく課題をこなせていったと思う。

学生は、発言する機会を通して互いから学ぶことも多かったようである。時間的な制約もあり、各々のスピーチに対して教員によるフィードバックが徹底できなかったのが、今後は少しでもフィードバックができるようにしたい。

中村匡

〈物理学 I、物理学 II（大講義）〉

- ・微分や積分を知らない受講生が大多数なので、それを使わない解説と、微積分の概念自体の説明という二段構えで教えている。
- ・単に講義だけだと興味がわからないので、電磁気学でひとりひとつクリップモーターを作成させるなど、実際のものをつかった実験的な講義をなるべくとりいれている。

〈学術ゼミ（少人数講義）〉

- ・数理科学系の科目が不得意だった受講生に、非常に単純な運動方程式のような基礎的な概念を、学生同士のディスカッションを通じてじっくり考えてもらうことによって、本当の理解が得られるようにしている。

〈宇宙科学（大講義）〉

- ・NASA、EASA、JAXA などの各国の宇宙機関が公表した最新のデータを動画を中心として紹介し、最先端の知識にふれる楽しみを知ってもらうようにしている。

森英樹

〈英語 II（補習）〉

授業中に英作文の課題を課すとともに、毎回宿題として単語学習を促し、授業、自宅学習ともに基礎徹底の場となるようにした。

山川修

- ・知識を伝達されるだけでなく、自分で考え、他の学生と議論し、知識を自律的に構築するグループワークを使った授業を行った。
- ・自分の考えを外化し、リフレクションを行い、他の学生・教員がそれを閲覧し、フィードバックを行うことを通して、考えを深める学習となるよう努めた。・授業内容の抽象度が高い場合には、学生に身近な話題、直観的にわかる教材を取り入れ、抽象度の高さの壁を、興味により乗り越える（または、あきらめさせない）工夫を心掛けた。
- ・LMS、SNS、e ポートフォリオなどの教育支援システムを最大限利用し、学生と教員の負担を減らし、相互作用が多い、刺激的な授業形態とした。

（教員名の五十音順）

センターでは、他部局以上に授業ごとの性質や形態が異なり、また取り扱う分野の幅広さに伴う性格の相違も

顕著である。それ故、改善へ向けた一律の道筋も共通の到達目標も設定しにくい。一方で、相違を越えた共通課題も漠然と存在するため、他者の具体的な改善努力が参考になる場合も少なくない。何を参考とし何に向かって改善していくのか、それはここに掲げたコメントを読む者と読まれる者双方が、それぞれに見出し設定していくものであろう。

3. 点検と課題（経済学部 新宮晋）

各地の大学の先行事例から学びながら、それらを参考に当時のチーム・リーダーを中心に本学のFD活動が始まった頃、私自身委員の一人としてインタビューに行くなどして本学の制度設計を傍目ながら見てきた。当時を思い出して今も大事だと思うことは、それが文字通り Faculty Development として機能することであり、立ち上げ期の委員もそのために制度作りに苦心したことである。それは先行大学の試みが教えてくれたことでもあった。それでも、FD 活動の意義について期待半ば疑義半ばでスタートし、その後折に触れて修正を加え改善しながら、今ある形ができあがってきた。

今や本学のFD活動もすっかり定着し、ルーティンに動いている。そのFD活動が曲がり角にきている。一方で、経済学部の項でも触れたが、各部署の教育上のパフォーマンスを上げるという本来の目的から、単なる教員管理の手段になりつつあるように見える（そのような指摘は、各部署・各委員からも上がってきている）。これは、FD の本来の主旨である授業改善とは何の関係もないことを、改めて確認しておきたい。他方で、昨年の本報告でも加藤先生が触れておられるように、マンネリズムに陥っている面もある。

こうして現状をふまえ、FD 活動の可能性と限界を見極め、これについて過大にも過小にもならない見通しを立ててみたい。

3.1 授業評価

授業評価結果についての評価は、各部署でそれぞれになされているのでここでは触れない。ただ、これも経済学部の項で触れたように、今後はもう少しデータを活用して、限定的であるとはいえ各部署にそのパフォーマンスの現状を把握しやすい情報を提供することを、「教育学習支援チーム」（以下、本チーム）として考えてよいように思われる。

授業評価は、もともとそれによって授業改善の「種」を受講者サイドから拾うことを目的としていたはずである。これに関して、授業評価については、常々次のような問題が学内で指摘されている。

- ① 事後評価なので、その期の授業にフィードバックできない。
- ② 成績評価と結びつけられる懸念から受講生が自己抑制的に評価している可能性がある。
- ③ 無記名なので受講生が無責任な評価をしている可能性がある。

こうしたことから、制度化された授業評価アンケートから授業改善を行うのは困難である、という意見もしばしば出される。

授業評価アンケートが制度化される以前から、少なからぬ教員が授業について受講生からの反応を確認する様々な試みを行っていた。これが制度化されることによって、少なくとも全教員が、受講生からのチェックが入るようになったこと、それによって学生にフィードバックする（といっても次の期の学生に対してであるが）回路が確保されたことは、ひとまず評価しておくべきことと思われる。受講生サイドからしても、教員に対して直接率直に意見を述べる回路があることは望ましいことである。従って、授業評価の形式については現状より改善する余地については今後も検討していくことはあっても、少なくとも現状より後退することはあり得ないと思われる。

①については、常に大きな課題であり、多くの教員は、FD とは別に個別に学生とのコミュニケーションを図っている。期中に受講生とのコミュニケーションや理解度チェックの可能性を含む授業評価を行って当該期の受講生にフィードバックすることができるようにするかどうかは、今後の課題である。ただ、事後的ではあれ、現在既に制度化されている授業評価への個別教員の回答については、せめて確実に実施していきたい。

②については、授業評価結果は受講生の成績評価後に教員に開示されることを、もっと明示的に告知することで回避できそうに思われる。

③については、むしろ受講生サイドの②の懸念を強めてしまう可能性があるのでは、なかなか難しいと思われる。今後の課題である。

なお、今年度「教育企画推進委員会」で「授業評価実施要領」が確定され、今後これにもとづいて授業評価が実施されることになった。この中のとりわけ「8 評価結果の取扱い」については本チームおよび「教育企画推進委員会」のみならず、各部局でも慎重かつ真剣な議論があったことを明記しておきたい。この第8項にあるとおり、「評価結果は本要項の目的以外に使用してはならない」こと、特に第8項の運用に当たっては、評価結果を各部局が授業改善に資する限りで使用されるべきものであり、その運用の主体は各部局であることも確認された。具体的な運用方法については各部局で決めることが望ましいと思われるが、第8項にある「必要に応じて」は、授業評価結果を懲罰的に使用するのではなく、あくまで授業改善に資するように使用すること、「当該授業の改善が必要な場合だけでなく、新しい取り組みを他の教員に紹介していく必要がある場合など、さまざまな意味を持つものであること」（2013年12月4日「教育企画推進委員会」議事録より）が確認されている。

加えて、2013年12月4日の「教育企画推進委員会」では、今後の検討課題として次の3点が出されたことを、ここで改めて記しておく。

- ・ 毎回の評価結果だけでなく、経年変化を分析すること。
- ・ 現状の授業評価アンケートは無記名式であるが、回答者（学生）に責任を持って回答することを促すため、記名式にすること。
- ・ 評価結果の公開対象を、非常勤講師にまで拡大すること。

このうちの第1項の個別評価をどう扱うかは、経年変化にとどまらず、各部局主体で詳細に運用を検討していただくのがよいと思われる。第2項は、上述の③と同じものであり、今後本チームでも、その是非を含め課題として継続して考えていきたい。

3.2 授業公開

授業公開の個別の実績については、こちらも各部局毎の報告に詳しいのでここでは触れない。

授業公開の課題としては、マンネリズムが一つ、もう一つとして公開実績と参加実績の乖離、という二つが——しかも相互に関連しあって——あるように思われる。

マンネリズムについては、FD 開始以来の時間の経過の中で、本学での教育歴の長い教員にとっては授業公開と参観がほぼ一巡していること、授業が専門性に依存しているので直接の参考にならないことが多いなどの理由で、その意義についてインセンティブが消滅しつつあることが考えられる。実績のある部局でも、本チーム委員が個別に依頼して授業公開を行い、参加についても動員をかけるというかたちでどうにか実績を残しているというのが実情である。参加者数の減少とも関連するが、独法化以後に業務が増加して時間がとれないことや、そもそも授業公開の授業改善効果を疑問視する声も無視しがたい。その一方で、一定の刺激と改善への示唆になる場合もあるという参加者の意見もある。

今回、F-Leccs の FD チーム委員になったことを契機に、県内各高等教育機関における授業公開の実績について個人的に尋ねてみたが、どの大学・高专でも多かれ少なかれマンネリズムと形骸化は避けられず、全員参加を実施しているところでは、実績としてはともかく、とりわけ参観内容が形ばかりで授業改善にどれほど資するか疑問だと明言されるところもある。

そこで、今回の報告書では、授業公開の方針を部局毎に明示してもらった。今後は、こうした部局毎の考

え方をくみ取って、改めて授業公開について考えていく必要がある。

その際特に注目されるのが、どの部局でもそうであるが、授業公開以上に教員間の情報交換の場を設けることの意義が少なからず強調されている点である。実際、懇談会等を通じて公式に教員間情報交換をFD活動に入れている部局も多い(次項3.3に関連)し、その中でもあきらかになっているように、非公式な教員間交流はもっと頻繁に行われている。こうした交流の結果、例えば経済学部では、単位認定は独立に行うが実質的に共同して授業を行うというような試みも行われている。他部局でもそうした試みがすでに行われているかもしれない。また、生物資源学部や学術教養センターのように、授業改善への全教員の取り組みを本報告書で公開することで、これをもとに情報共有できる基盤を整えているところもある。

さらに、授業公開と参観は教育歴の浅い教員に限って行い、例えば授業の方法やスタイルについては研修を通じて刺激を受ける方が望ましいという意見もある。

授業改善の装置として授業公開がどれほど有効か率直な疑問の声がある一方、参観の有無にかかわらず公開することに意義があるという意見もある。いずれにせよ、工夫のないまま形骸化とマンネリズムに陥る可能性を回避しつつ、授業公開のFD活動における位置づけを明確にしていく必要があろう。

3.3 研修その他

現在本学教員が参加できる研修には4つのタイプがある。全国各地で行われている学外研修、F-Leccs内で企画され行われるこれも学外研修、学内で独自に行う全学的研修、そして部局毎に行う研修の4つである。最後のものには、看護福祉学部のように専門性に特化した学外研修も含められよう。

学外研修には、授業改善のヒントになったりこれまでの自分の教育履歴を振り返る契機になったりと、限られた範囲での情報だけからは得られない刺激が得られる可能性がある。特定の教育のスタイルに関わるものなど一般性のないものもあるが、直接には取り入れられないとしても、授業改善の可能性が広く開かれていることを知ることはそれなりの意義があるように思われる。

研修では、例えば、講義型の授業では無理でもゼミナールなど双方向型の授業では新しい方法がいろいろ開発されている、といった情報が得られる。こうした情報が、現に行っている授業スタイルとの異同について考えるきっかけになることも期待される(実際、講義として登録していても、そういうスタイルを取り入れている授業は本学でもある。経済学部前期授業公開の北島先生の授業公開参照)。個々の教員が試行錯誤で行っているスタイルが、実は非常に体系化されて確立したものと相似であることを確認し、更なる改善につながることも、研修の意義と言えるかも知れない。

授業には、基本的なスタイルを変えず年を追って練り上げられる面がある。従って頻繁にスタイルを変えればよいというものではない。時流に乗ってやってみても教育効果・成果はそれほどでもないという経験は多くの教員がしているはずである。しかし同時に、蛸壺的・独善的になっていないかチェックする意味でも、それが結局、自分のやり方でよいことを確認することに終わったとしても、外部の刺激に触れてみるのはよい。そういう機会として学外研修がもっと活用されても良いように思われる。来年度、本学はF-LeccsのFD研修の幹事校に当たっているので、これへの参加を促していきたい。

研修について特に要望が多いのが、規模のコンパクト化である。大規模すぎることが参加の障害になっているのである。これについては、特に学内で開催するに当たっては工夫の余地があるものはそうしたい。今年度2月末の「ティーチング・ポートフォリオ」に関する研修については、学内のそうした要望に応えたもので、それなりの参加を得たことは今後につながるものと思われる。

今年度特筆すべきは、部局内での研修、とりわけ、既述の通り、懇談会等の教員間情報交換が進んだことである。独法化以後のトップダウン型に対する現場の危機意識の表れと評価すべきかも知れない。「現場」

を金科玉条とし外部の意見に耳を貸さないということは厳に自戒すべきである。が、逆に外部の意見に翻弄され足もとを見失っても仕方がない。そのためには、外部に自らを開きつつそれぞれの経験や知見を教員間で共有する回路をきちんと確保しておくことであろう。また、それ以前に、これまで以上に教員間の連絡が十分であれば回避できた改善の余地について直接に相互確認することは重要であると思われる。教員間の交流は、それがさらに部局の枠を越えて行われる機会があれば、相互の相違の確認も含めディスコミュニケーションを避けるためだけでなく、次期中期目標の策定などで共有可能なことがらを確認するためにも有用であると思われる。

いずれにせよ、研修としていっそう教員間の情報交換・情報共有を促すことは、有望なFD活動の一つとなるだろう。

おわりに

末筆ながら、この1年のFD活動に対し、理解と前向きな姿勢で励ましつつチームをリードして下さった青海チーム代表に、また、事務を取り仕切りつつ年度にまたがる経緯について適切にアドバイスを頂戴した教育推進課 村崎さんに、心からお礼申し上げます。

ファカルティ・ディベロップメント報告書 2013

発行年月 2014年3月

編集・発行 福井県立大学教育学習支援チーム